クク井遺跡発掘調査報告書

防災集団移転促進事業関連遺跡発掘調査

遺跡全景（北西から）

平安時代の鍛冶炉（1号鍛冶工房跡内）

縄文時代の大型住居（1号住居跡）

縄文時代前期の玦状耳飾り

序

本県には、旧石器時代をはじめとする１万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されております。それらは地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料であります。同時にそれらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らねばなりません。

一方、県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要とされます。それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財の保護との調和も求められるところであります。

（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行ない、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は山田町における防災集団移転促進事業に関連して平成 27 年度に発掘調査された、ククイ井遺跡の調査成果をまとめたものであります。ククイ井遺跡は山田町船越半島の西端に位置しており、発掘調査の結果、縄文時代と平安時代の２つの時代に営まれた集落遺跡であることが判明しました。縄文時代では前期後葉の大型住居が見つかっており、それに伴う縄文土器や石器、また玦状耳飾りといった石製品も出土しました。平安時代では竪穴住居跡のほかに、鍛冶工房跡が点在しておりました。そしてそれに伴い鉄生産関連の遺物が多数出土していることから、鉄生産を行う特殊な集落であることが窺えました。これまで船越半島での発掘調査事例は少なく、したがって本報告は船越半島の歴史を知る上でも貴重な資料となり得ます。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました山田町建設課、山田町教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成 29 年３月

公益財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　菅野洋樹

例　　言

1　本報告書は、平成27年度に行ったクク井遺跡（下閉伊郡山田町船越第６地割ほか）の発掘調査の成果を収録したものである。

2　今回の調査は、防災集団移転促進事業に関わる事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課と山田町との協議を経て、（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが担当した。

3　遺跡台帳に登録されている遺跡番号は「MG04 － 2365」である。

4　遺跡略号、発掘調査期間、担当者、調査面積、委託者名は以下の通りである。

遺跡略号：KKI － 15
調査期間：平成27年４月６日～７月15日
調査担当者：須原　拓・光井文行・澤目雄大
調査面積：4,800㎡
委 託 者：山田町建設課

5　室内整理期間と担当者は、以下の通りである。

整理期間：平成27年８月３日～平成28年３月31日
担 当 者：光井文行・澤目雄大

6　調査および整理における委託業務については次の機関に依頼した。

基準点測量：有限会社　スカイ測量設計
航空撮影：株式会社　リッケイ
遺構図面の写真解析図化および図版編集：株式会社　リッケイ
石材鑑定：花崗岩研究会
炭化物年代測定（ＡＭＳ）：株式会社　加速器分析研究所
鉄滓等の分析：株式会社　古環境研究所

7　本遺跡の調査成果は、すでに『平成27年度発掘調査報告書』（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第661集）において発表しているが、内容については本書が優先する。

8　土色の色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修 1993）を使用している。

9　本報告書の執筆は須原　拓・光井文行・澤目雄大が行い、文末に氏名を記している。編集は須原が行った。

10　本報告書で使用した地形図は、国土地理院発行１：25,000「陸中山田」、「霞露ヶ岳」、「大槌」を使用している。

11　野外調査ならびに整理作業、報告書作成に際し、次の方々からご協力、ご指導いただいた。記して深く感謝いたします。（敬称略）

竹下将男、山田町教育委員会

12　本遺跡の調査で得られた一切の資料、出土遺物・撮影写真・遺構実測図・遺物実測図は岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

凡　　例

1　遺構について

（1）本文中の図版縮尺

以下を原則とし、各図版にはスケールを付している。

竪穴住居跡・鍛冶工房跡の平面・断面：1/50・1/60・1/80

土坑の平面・断面：1/40　カマドの平面・断面：1/25

鍛冶炉および竪穴住居跡に伴う炉の平面・断面：1/20

（2）遺構断面の土層注記

野外調査の際、土層の観察記録については以下の項目を基本とし、記録した。

色調（『標準土色帖』（農林水産省農林技術会議局監修）を基準とする）

粘性（4段階表示：**強**、**やや強**、**やや弱**、**弱**）

しまり（4段階表示：**密**、**やや密**、**やや疎**、**疎**）

混入物の有無（混入量は5段階表示：**微量**　1～10%・**少量**　11～20%・**中量** 21～30%・**やや多い** 31～40%・**多量** 41～50%）

2　遺物について

（1）本文中の図版縮尺は以下を原則とし、各図版にはスケールを付している。

縄文土器・土師器・須恵器：1/3　　土製品・石製品：1/2　　羽口：1/4

剥片石器：2/3　　礫石器：1/3・1/4・1/5

（2）遺物図面のアミかけについては凡例図に示した通りである。

（3）観察表の表記項目について

出土位置・層位、器種、残存部位、外面文様（描線、縄文原体の種類、手法）、内面調整（文様）・色調（外・内面）・胎土混入物・焼成・時期（土器型式）について観察し、記載している。

文様については、口唇部（「唇」と表記）、口縁部（「口」と表記）、胴部（「胴」と表記）、底部（「底」と表記）に分けて観察し、表に記している。

焼成：土器の断面を観察し、断面内の黒色層を基準として土器の焼成具合を4分類した。

良　好→断面に黒色層が認められず、断面の色調が橙色を帯びるもの。

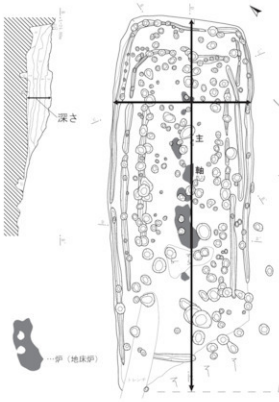
やや良好→断面に明瞭な黒色層は認められないが、土器の内外面色調と比べ、やや暗い（黒色味がかっている）もの。

やや不良→断面の中央部にのみ黒色層が認められるもの。

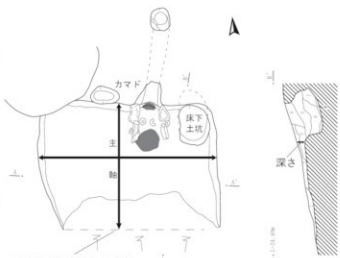
不　良→断面の半分以上に黒色層が認められ、焼成の際の火回りが悪いもの。

色調：内外面の色調について、『標準土色帖』（農林水産省農林技術会議局監修1993）を基準とし、観察した。なお観察表には色調名のみ記している。

竪穴住居跡
縄文時代

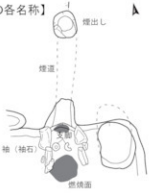


平安時代

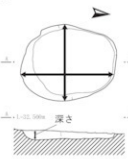


※遺構の頭部が消失している場合、
最も残存する範囲で規模を計測した。

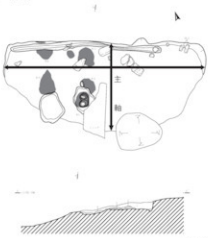
【カマドの各名称】



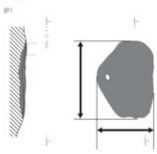
土坑



鍛冶工房跡



鍛冶炉



【鍛冶炉の色表示について】
…被熱により橙色に還元
…被熱により赤褐色に還元

【遺構規模の計測について】
竪穴住居・鍛冶工房はカマド・炉の主軸方向とそれに直交する方向を基に遺構規模を計測した。
その他の遺構は最も長い範囲とそれに直交する範囲を計測し、遺構規模とした。
また深さは最も残りの良い範囲を計測した。
※壁・床面が消失している場合は残存する範囲を計測し、（○cm）と記した。

…計測位置

【図中の裸表記について】

凡 例 図

目　　次

Ⅰ　発掘調査に至る経緯 …… 1

Ⅱ　遺跡周辺の地理的環境
1　遺跡の位置 …… 1
2　遺跡の立地 …… 1

Ⅲ　ク ク井遺跡周辺の歴史的環境
1　山田町の遺跡 …… 3
2　ク ク井遺跡周辺の遺跡 …… 3

Ⅳ　調査の経過・方法
1　野外調査について …… 6
2　室内整理について …… 7
3　出土した縄文時代・古代・近世以降の遺物について …… 8
4　出土した古代の鉄生産関連遺物について …… 9

Ⅴ　調査の概要・基本土層
1　調査の概要 …… 10
2　基本土層 …… 10

Ⅵ　検出遺構・出土遺物
1　縄文時代 …… 14
2　平安時代 …… 69
3　近世以降 …… 115

Ⅶ　総　　括
1　縄文時代 …… 120
2　平安時代 …… 125

附編　ク ク井遺跡の自然科学分析
1　ク ク井遺跡における放射性炭素年代（AMS 測定） …… 131
2　ク ク井遺跡出土の鉄滓等分析 …… 136
報告書抄録 …… 231

図版目次

第 1 図　クク井遺跡位置図 …… 2
第 2 図　周辺の遺跡 …… 5
第 3 図　グリッド図 …… 6
第 4 図　石器について …… 8
第 5 図　鉄滓の分類について …… 9
第 6 図　基本土層 …… 10
第 7 図　遺構配置図 …… 11
第 8 図　1 号住居跡 1 …… 15
第 9 図　1 号住居跡 2 …… 16
第 10 図　1 号住居跡出土遺物 1 …… 17
第 11 図　1 号住居跡出土遺物 2 …… 18
第 12 図　1 号住居跡出土遺物 3 …… 19
第 13 図　1 号住居跡出土遺物 4 …… 20
第 14 図　1 号住居跡出土遺物 5 …… 21
第 15 図　1 号住居跡出土遺物 6 …… 22
第 16 図　1 号住居跡出土遺物 7 …… 23
第 17 図　1 号住居跡出土遺物 8 …… 24
第 18 図　2 号住居跡 …… 26
第 19 図　2 号住居跡出土遺物 …… 27
第 20 図　3 号住居跡 …… 28
第 21 図　3 号住居跡出土遺物 1 …… 29
第 22 図　3 号住居跡出土遺物 2 …… 30
第 23 図　4 号 a・b 住居跡 …… 32
第 24 図　4 号 a・b 住居跡出土遺物 1 …… 33
第 25 図　4 号 a・b 住居跡出土遺物 2 …… 34
第 26 図　5 号住居跡 …… 35
第 27 図　5 号住居跡出土遺物 …… 36
第 28 図　6 号住居跡 1 …… 38
第 29 図　6 号住居跡 2・出土遺物 …… 39
第 30 図　7 号住居跡・出土遺物 …… 40
第 31 図　8 号住居跡 …… 41
第 32 図　土坑（縄文時代）1 …… 43
第 33 図　土坑（縄文時代）2 …… 44
第 34 図　土坑（縄文時代）3 …… 45
第 35 図　土坑出土遺物（縄文時代）1 …… 46
第 36 図　土坑出土遺物（縄文時代）2 …… 48
第 37 図　包含層 …… 49
第 38 図　遺構外出土遺物（縄文時代）1 …… 50
第 39 図　遺構外出土遺物（縄文時代）2 …… 51
第 40 図　遺構外出土遺物（縄文時代）3 …… 52
第 41 図　遺構外出土遺物（縄文時代）4 …… 53
第 42 図　遺構外出土遺物（縄文時代）5 …… 54
第 43 図　遺構外出土遺物（縄文時代）6 …… 55
第 44 図　遺構外出土遺物（縄文時代）7 …… 56
第 45 図　遺構外出土遺物（縄文時代）8 …… 57
第 46 図　遺構外出土遺物（縄文時代）9 …… 58
第 47 図　遺構外出土遺物（縄文時代）10 …… 59
第 48 図　遺構外出土遺物（縄文時代）11 …… 60
第 49 図　9 号住居跡 1 …… 70
第 50 図　9 号住居跡 2 …… 71
第 51 図　9 号住居跡 3 …… 72
第 52 図　9 号住居跡出土遺物 …… 73
第 53 図　10 号住居跡 1 …… 74
第 54 図　10 号住居跡 2 …… 75
第 55 図　10 号住居跡出土遺物 …… 76
第 56 図　11 号住居跡 1 …… 77
第 57 図　11 号住居跡 2 …… 78
第 58 図　11 号住居跡出土遺物 1 …… 79
第 59 図　11 号住居跡出土遺物 2 …… 80
第 60 図　11 号住居跡出土遺物 3 …… 81
第 61 図　1 号鍛冶工房跡 1 …… 83
第 62 図　1 号鍛冶工房跡 2 …… 84
第 63 図　1 号鍛冶工房跡 3 …… 85
第 64 図　1 号鍛冶工房跡出土遺物 …… 86
第 65 図　2 号鍛冶工房跡 …… 88
第 66 図　3 号鍛冶工房跡 1 …… 90
第 67 図　3 号鍛冶工房跡 2 …… 91
第 68 図　3 号鍛冶工房跡 3 …… 92
第 69 図　3 号鍛冶工房跡出土遺物 …… 93
第 70 図　4 号鍛冶工房跡 1 …… 95
第 71 図　4 号鍛冶工房跡 2 …… 96
第 72 図　4 号鍛冶工房跡出土遺物 1 …… 97
第 73 図　4 号鍛冶工房跡出土遺物 2 …… 98
第 74 図　5 号鍛冶工房跡出土遺物 …… 99
第 75 図　5 号鍛冶工房跡 1 …… 100
第 76 図　5 号鍛冶工房跡 2 …… 101
第 77 図　土坑（平安時代）1 …… 104
第 78 図　土坑（平安時代）2 …… 105
第 79 図　土坑（平安時代）3 …… 106
第 80 図　土坑出土遺物（平安時代） …… 107
第 81 図　1 号性格不明遺構 …… 108
第 82 図　遺構外出土遺物（平安時代） …… 110
第 83 図　2 号性格不明遺構 …… 115
第 84 図　土坑（近世以降） …… 117
第 85 図　遺構外出土遺物（近世以降） …… 118
第 86 図　縄文時代の遺構 …… 120
第 87 図　包含層から出土した前期前葉の縄文土器 … 121
第 88 図　出土した大木 4 ～ 5 式土器 …… 122
第 89 図　石器の分析 …… 124
第 90 図　平安時代の遺構 …… 125
第 91 図　出土した支脚の分類 …… 126

表 目 次

第 1 表　周辺の遺跡 …… 4
第 2 表　遺構名変更表 …… 7
第 3 表　出土遺物一覧 …… 12
第 4 表　土坑（縄文時代）一覧 …… 42
第 5 表　遺物観察表（縄文時代） …… 61
第 6 表　土坑（平安時代）一覧 …… 103
第 7 表　遺物観察表（平安時代） …… 111
第 8 表　遺物観察表（近世以降） …… 119
第 9 表　出土鉄滓一覧表 …… 128

写真図版目次

写真図版 1　調査区全景 …… 177
写真図版 2　調査区全景・基本土層 …… 178
写真図版 3　1 号住居跡 …… 179
写真図版 4　2 号住居跡 …… 180
写真図版 5　3 号住居跡 …… 181
写真図版 6　4 号 a・b 住居跡 1 …… 182
写真図版 7　4 号 a・b 住居跡 2・5 号住居跡 … 183
写真図版 8　6 号住居跡 …… 184
写真図版 9　7 号住居跡 …… 185
写真図版 10　8 号住居跡 …… 186
写真図版 11　土坑（縄文時代）1 …… 187
写真図版 12　土坑（縄文時代）2 …… 188
写真図版 13　土坑（縄文時代）3 …… 189
写真図版 14　土坑（縄文時代）4 …… 190
写真図版 15　9 号住居跡 …… 191
写真図版 16　10 号住居跡 …… 192
写真図版 17　11 号住居跡 …… 193
写真図版 18　1 号鍛冶工房跡 1 …… 194
写真図版 19　1 号鍛冶工房跡 2 …… 195
写真図版 20　2 号鍛冶工房跡 …… 196
写真図版 21　3 号鍛冶工房跡 1 …… 197
写真図版 22　3 号鍛冶工房跡 2 …… 198
写真図版 23　4 号鍛冶工房跡 1 …… 199
写真図版 24　4 号鍛冶工房跡 2 …… 200
写真図版 25　5 号鍛冶工房跡 …… 201
写真図版 26　1 号性格不明遺構 …… 202
写真図版 27　土坑（平安時代）1 …… 203
写真図版 28　土坑（平安時代）2 …… 204
写真図版 29　土坑（平安時代）3 …… 205
写真図版 30　土坑（平安時代）4・（近世以降） … 206
写真図版 31　縄文土器・土製品 1 …… 207
写真図版 32　縄文土器・土製品 2 …… 208
写真図版 33　縄文土器・土製品 3 …… 209
写真図版 34　縄文土器・土製品 4 …… 210
写真図版 35　縄文土器・土製品 5 …… 211
写真図版 36　縄文土器・土製品 6 …… 212
写真図版 37　縄文土器・土製品 7 …… 213
写真図版 38　縄文土器・土製品 8 …… 214
写真図版 39　縄文土器・土製品 9 …… 215
写真図版 40　石器・石製品 1 …… 216
写真図版 41　石器・石製品 2 …… 217
写真図版 42　石器・石製品 3 …… 218
写真図版 43　石器・石製品 4 …… 219
写真図版 44　石器・石製品 5 …… 220
写真図版 45　石器・石製品 6 …… 221
写真図版 46　石器・石製品 7 …… 222
写真図版 47　古代の遺物 1 …… 223
写真図版 48　古代の遺物 2 …… 224
写真図版 49　古代の遺物 3・近世の遺物 …… 225
写真図版 50　古代の遺物 4 …… 226
写真図版 51　古代の鉄製品 1 …… 227
写真図版 52　古代の鉄製品 2 …… 228
写真図版 53　鉄滓 1 …… 229
写真図版 54　鉄滓 2 …… 230

Ⅰ　発掘調査に至る経緯

ク久井遺跡は、「船越・田の浜地区防災集団移転促進事業」に伴い、その事業地内に所在することから発掘調査を実施することとなったものである。

平成23年3月11日に発生した東日本大震災による津波と地震によって、山田・船越両湾に面した大沢・山田・織笠・船越の4地区は、甚大な被害を蒙った。この未曾有の災害から立ち上がるべく、山田町では平成23年12月に「山田町復興基本計画」を策定し、

①津波から命を守るまちづくり

②産業の早期復旧と再生・発展

③住民が主体となった地域づくり

を基本理念に、新しい町づくりを進めているところである。

船越・田の浜防災集団移転促進事業は、被災した船越湾の浜～田の浜地区の復興に資するため、土地造成や道路建設を実施するものである。

当事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成26年11月11日付建第375－3号で山田町建設課から山田町教育委員会に対し試掘調査実施依頼があったことに端を発する。

試掘調査は、平成26年11月25日から12月10日まで実施し、縄文時代と古代の竪穴住居をはじめとする遺構を検出した。

この結果を受けて、岩手県教育委員会、山田町建設課及び教育委員会が協議を行い、平成27年4月1日付で公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターと委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。　（山田町）

Ⅱ　遺跡周辺の地理的環境

1　遺跡の位置

ク久井遺跡は下閉伊郡山田町船越6地割ほかに所在し、船越半島の西端、船越湾から約200mに位置する。座標では北緯39度25分47秒、東経141度59分07秒付近に相当し、国土地理院発行の5万分の1地形図「大槌」の図幅に含まれる。今回、本遺跡は東日本大震災後の復興事業、「船越・田の浜地区防災集団移転促進事業」に伴い、発掘調査が実施されることとなった。

2　遺跡の立地

ク久井遺跡は、船越湾の東端に位置する丘陵末端頂部の平坦面、またそれに続く南向き斜面下方に立地し、標高は21～32mである。船越湾から本遺跡までは約200mしか離れておらず、ほぼ海岸沿いと言って良い場所である。

調査前の現況は、昭和期に植林された杉林である。調査が進むにつれ分かったことだが、植林の際、地形を一部改変するほどの造成を行った形跡があり、特に調査区北側頂部平坦面は、造成により地形が著しく削られ、人工的に形成されたものであった。また調査区の大半を占める斜面地にも植林が及んでいる。こうした点から遺構の残存状況は悪い。　（須原）

25,000分の1「陸中山田」「霞露ヶ岳」「大槌」

第1図　クク井遺跡位置図

Ⅲ　クク井遺跡周辺の歴史的環境

1　山田町の遺跡

山田町内からは多数の遺跡が確認されており、山田町教育委員会の行った４年間の詳細分布調査から517箇所にも及ぶ遺跡が確認されている。主に３つに大別でき、縄文時代の散布地ないし集落跡・製鉄関連遺跡・中世城館跡に分けられ、中でも製鉄関連遺跡に関しては総数が387遺跡と多く、岩手県内で確認される半数近くがこの地域に集中している。しかしそのほとんどが未調査のままであるため詳細は不明であるが、調査事例の一部には山ノ内Ⅱ・Ⅲ遺跡（30・31）、湾台Ⅱ・Ⅲ遺跡（33・34）、上村遺跡（40）、後山Ⅰ遺跡（47）、房の沢Ⅳ遺跡（66）、田の浜館跡（23）が挙げられ、主に古代の竪穴住居跡・工房跡や製鉄鍛冶関連の炉跡と共に多くの鉄滓・羽口が出土している。中には房の沢Ⅳ遺跡に挙げられる様な、7・8世紀に属する35基の古墳群と共に鉄滓や蕨手刀・馬具などの鉄製品が出土している例もあり、この土地が旧くから鉄との関連の要所であったことが窺える。要因には、山田湾を囲む周辺の丘陵部に宮古花崗岩層と称される岩脈が存在し、これらから形成される真砂土により良質な砂鉄が供給されていたことによるものである。遺跡の分布状況をみると、古代の集落遺跡は海岸線に向かって張り出した小起伏山地の末端となる尾根の斜面部と、その間の谷を流れる河川や沢によって形成された小規模な平野に立地しているものが多く、鉄生産に関係する遺跡に関しても同じく尾根の鞍部や斜面に立地する遺跡が広く分布するようである（山田町教委2002）。

また、縄文時代の集落遺跡も同様に尾根の斜面ないし緩斜面に立地するものが多く、大きな集落では沢田Ⅰ～Ⅳ遺跡（68～71）、浜川目沢田Ⅰ～Ⅳ遺跡（105～108）、岡木戸Ⅰ～Ⅳ遺跡（72～74・80）などが挙げられる。平地や緩傾斜地の少ない山田町内においては居住に際しての選定地は限定されるため、縄文時代～古代にかけての複合遺跡が多くなる傾向がみられるようである。

2　クク井遺跡周辺の遺跡

本遺跡は船越半島の西側、地形分類上で言う山麓地の緩斜面上に位置する。今では陸続きとなっている山田・船越両湾により形成された沖積地を挟み、旧船越村域である船越半島と半島西側の海岸線付近の地形環境は同様の様相を呈しており、上述の通り、山田町内において遺跡分布と地形条件は密接に関係することが分かっている。このことから、本遺跡の性格と地形条件を照らし合わせると、半島西側の海岸線付近からも縄文時代の集落や古代の集落ないし製鉄関連遺構を有する遺跡の調査事例が報告されていることが分かった。以下に、半島西側の海岸線から山ノ内Ⅲ遺跡（30）、湾台Ⅱ・Ⅲ遺跡（33･34）、まだ本報告には無いが焼山遺跡（37）、船越半島側からも田の浜館跡（23）を例に挙げ、本遺跡との関連を勘案して調査事例に触れておきたい。

山ノ内Ⅲ遺跡は山田町船越第２地割に所在する。立地は、山麓地の緩斜面に位置し、標高は55～72ｍである。確認された遺構は縄文時代の竪穴住居跡21棟と古代の竪穴住居跡３棟、その他に土坑・炉跡・製鉄炉・炭窯などが検出されており、遺構内からは中期の縄文土器、９世紀末～10世紀中葉の土師器、鉄滓、羽口、鉄製品、砂鉄が出土している。山ノ内Ⅲ遺跡では、二次堆積ではあるが縄文土器の出土量が多く早期末～晩期まで確認されており、周辺立地が長らく居住に適した環境であったことが推察される。また、出土遺物の中に鉄製品は少なく、製錬滓・大鍛冶滓が出土しており、鍛造

剥片は検出されていない。そのことから、鍛錬鍛冶は行われていない奈良時代末～平安時代の製鉄遺跡が存在したと考えられている。

湾台Ⅱ・Ⅲ遺跡は山田町船越第５地割に所在する。立地は、山麓地の緩斜面に位置し、標高は 40 ～ 60 mである。湾台Ⅱ遺跡での検出遺構は、縄文時代中期の竪穴住居跡１棟、土坑８基、焼土遺構３基、集石遺構１カ所である。出土遺物は縄文土器、弥生土器、石器、羽口、鉄滓である。湾台Ⅲ遺跡での検出遺構は、平安時代の竪穴住居跡１棟、住居跡状遺構２基（鉄生産関連炉１基含む）、土坑１基、集石遺構１箇所である。出土遺物は、縄文土器、土師器、須恵器、石器、羽口、鉄滓等である。全体的に遺構数は少ないが、山田町での複合遺跡の立地の傾向や、10 世紀代に位置付けられる製鉄関連炉の検出から、古代の製鉄関連遺跡が明らかとなるなど、今後の沿岸部での遺跡の傾向を知る上で、貴重な資料となる。

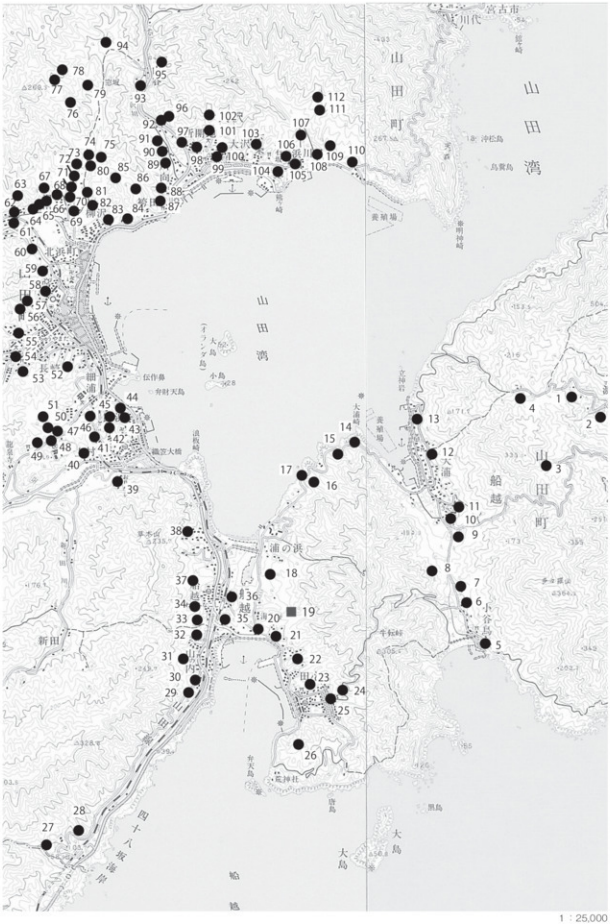
焼山遺跡は山田町船越６地割他に所在し、南側には湾台Ⅲ遺跡と隣接する。立地は、山麓地谷間の斜面地に位置し、標高は約 40m である。検出遺構は、製鉄炉９基、鍛冶工房跡２棟とそれに伴う鍛冶炉２基、工房の可能性がある竪穴住居跡１棟、炭窯５棟である。遺構埋土中及び、周辺遺構外からは鉄滓、羽口、鉄製品、砂鉄、鍛造剥片等が出土している。平安時代の鉄生産遺構群で、この地で燃料を生産し、砂鉄を原料とする製鉄・鍛冶を営んでいたことが窺える貴重な遺跡である。（岩埋文 2014）

田の浜館跡は山田町船越第 12 地割他に所在する。遺跡の登録上は中世城館とされているが、これに関連する遺構は確認されていない。調査成果としては、標高 20 ～ 58m 前後に立地する２本の丘陵尾根の、谷間の斜面地から製鉄炉３基とこれに伴う炭窯６基の古代の製鉄関連遺構が確認されている。

（澤目）

第１表　周辺の遺跡

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	浦磯Ⅰ	散布地	縄文	57	長崎Ⅰ	複合	縄文・中世
2	浦磯Ⅱ	散布地	縄文	58	間谷Ⅴ	複合	縄文
3	滝貴沢	散布地	縄文	59	間谷Ⅳ	複合	縄文
4	バッコ坂	散布地	縄文	60	間谷Ⅲ	複合	縄文
5	小谷鳥	散布地・製鉄跡	縄文・不明	61	関の沢Ⅰ	複合	縄文
6	杭の子	散布地	縄文	62	関の沢Ⅴ	複合	縄文
7	野倒沢Ⅰ	集落跡・製鉄跡	縄文・不明	63	関の沢Ⅵ	複合	縄文
8	野倒沢Ⅱ	散布地・製鉄跡	縄文・不明	64	関の沢Ⅱ	複合	縄文
9	マダノキ沢Ⅰ	散布地	縄文	65	関の沢Ⅲ	散布地	縄文
10	マダノキ沢	散布地・製鉄跡	縄文・不明	66	関の沢Ⅳ	複合	縄文・末期古墳
11	畠中	散布地・製鉄跡	縄文・不明	67	沢田Ⅵ	散布地	縄文
12	川平貝塚	貝塚・製鉄跡	縄文・不明	68	沢田Ⅰ	集落跡	縄文～古代
13	梅園	散布地	縄文	69	沢田Ⅳ	複合	縄文・中世
14	大浦崎	貝塚・生産跡(製塩？)	縄文・不明	70	沢田Ⅱ	複合	縄文・古代・中世
15	糸質沢	散布地・生産跡(製塩？)	縄文・不明	71	沢田Ⅲ	散布地	縄文
16	白石沢	散布地	縄文	72	関木戸Ⅲ	複合	縄文
17	白石浜	散布地・生産跡(製塩？)	縄文・不明	73	関木戸Ⅰ	散布地	縄文
18	新道貝塚	貝塚・製鉄跡	縄文・不明	74	関木戸Ⅳ	複合	縄文
19	**クク井**	**散布地**	**縄文**	75	天井関木戸Ⅸ	複合	縄文
20	船越御所	散布地・城館跡	縄文・中世	76	天井関木戸Ⅴ	複合	縄文
21	岩ヶ沢	集落跡	縄文	77	天井関木戸Ⅲ	複合	縄文
22	早川	集落跡・製鉄跡	縄文・不明	78	天井関木戸Ⅰ	複合	縄文
23	田の浜館	城館跡	中世	79	関木戸Ⅴ	複合	縄文
24	大洞Ⅰ	散布地	縄文	80	関木戸Ⅱ	散布地	縄文
25	大洞貝塚	貝塚・集落跡	縄文	81	柳沢Ⅳ	散布地	縄文
26	小田の御所	散布地・城館跡	縄文・中世	82	柳沢Ⅲ	複合	縄文・古代
27	大沢川	散布地	縄文	83	柳沢Ⅱ	複合	縄文・中世
28	畳平	散布地	縄文	84	柳沢Ⅰ	複合	縄文
29	滝の沢	散布地	縄文	85	山の神Ⅰ	散布地	縄文
30	山ノ内Ⅲ	集落跡・製鉄跡	縄文・古代	86	神田Ⅲ	散布地・製鉄跡	縄文
31	山ノ内Ⅱ	集落跡・製鉄跡	縄文・古代	87	神田Ⅰ	散布地	縄文
32	船越西館	散布地・城館跡・製鉄跡	縄文・中世・不明	88	神田Ⅱ	散布地・製鉄跡	縄文
33	湾台Ⅱ	散布地・製鉄跡	縄文・弥生・古代	89	川向Ⅰ	散布地・製鉄跡	縄文
34	湾台Ⅲ	散布地・製鉄跡	縄文・古代・不明	90	川向Ⅱ	散布地・製鉄跡	縄文
35	湾台Ⅰ	集落跡	縄文	91	川向Ⅲ	散布地・製鉄跡	縄文
36	船越館	散布地・城館跡	縄文・中世	92	新開地Ⅱ	散布地・製鉄跡	縄文
37	焼山	製鉄跡	不明	93	山谷	散布地・製鉄跡	縄文
38	長林	散布地・製鉄跡	縄文・不明	94	山谷Ⅳ	散布地	縄文
39	草木	複合	縄文	95	山谷Ⅷ	散布地・製鉄跡	縄文
40	上村	複合	縄文	96	雲南沢	散布地・製鉄跡	縄文
41	上	集落跡	縄文	97	新開地Ⅰ	散布地・製鉄跡	縄文
42	織笠Ⅴ	複合	縄文・中世	98	新開地	散布地	縄文
43	跡浜Ⅱ	散布地	縄文	99	紅山A	散布地	縄文
44	跡浜Ⅰ	散布地	縄文	100	紅山B	集落跡	縄文・弥生
45	織笠Ⅵ	複合	古代	101	大洞	散布地・製鉄跡	縄文
46	織笠Ⅳ	散布地	縄文	102	寺ヶ沢	散布地・製鉄跡	縄文
47	後山Ⅰ	複合	縄文	103	下条	散布地	縄文
48	後山Ⅱ	散布地	縄文	104	猫石坂	散布地・城館跡？	縄文・中世？
49	後山Ⅲ	複合	縄文	105	浜川目沢田Ⅰ	散布地	縄文
50	織笠Ⅲ	散布地	縄文	106	浜川目沢田Ⅱ	集落跡	縄文
51	織笠Ⅰ	複合	縄文	107	浜川目沢田Ⅲ	集落跡	縄文
52	長野Ⅲ	複合	縄文	108	浜川目沢田Ⅳ	散布地	縄文
53	魚洞Ⅲ	散布地	縄文	109	寒円	集落跡	縄文
54	魚洞Ⅳ	散布地	縄文	110	サイナイ沢	散布地	縄文
55	小沢Ⅱ	散布地	縄文	111	赤石沢Ⅲ	散布地	縄文
56	長崎Ⅱ	複合	縄文・中世	112	赤石沢Ⅱ	散布地・製鉄跡	縄文



第２図　周辺の遺跡

Ⅳ　調査の経過・方法

1　野外調査について

第Ⅰ章に記した通り、本調査に先立ち、平成 26 年、山田町教育委員会が試掘調査を実施し、その結果を踏まえ、委託者との協議を経て調査区が設定されている。

平成 27 年 4 月 6 日（月）より調査を開始した。調査員 5 名、野外作業員 35 名体制でスタートし、4 月 16 日以降、調査員は 3 名に変更、野外作業員は随時増減しつつも、概ね 35 人体制で作業を進めた。また 7 月の調査終盤には、調査員 2 名、野外作業員 15 名へと変更している。

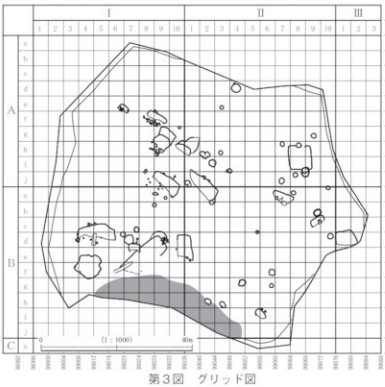
調査はまず、重機（バックホー 0.45㎥、キャリアダンプ 6 t）を用いた表土除去を行い、その後、人力による遺構検出作業から行った。

検出した遺構は、規模や性格により、適宜に 4 分法と 2 分法を選択し、精査を行った。各遺構については平面と断面、また必要に応じ遺物出土状況の実測および、写真撮影を行った。遺構図の実測には、調査期間の短縮を考慮に入れ、デジタルカメラ（OLYMPUS　ToughTG - 3）を用いた写真解析測量を活用した（撮影は調査員が行い、解析作業および図化作業を（株）リッケイに委託した）。また調査区の地形測量などには CUBIC 社製遺構実測ソフト「遺構くん」と光波トランシットを用いている。調査区については 40 × 40m 四方の大グリッド、4 × 4 m 四方の小グリッドを設定し（第 3 図）、遺構の位置や遺物の取り上げに際し、用いている。

写真撮影は主に、デジタルカメラ 1 台（キャノン EOS60D）と 35㎜カメラ 1 台（モノクローム）を使用し、同アングルのデジタル写真・銀塩写真両方撮影している。また 6 月 26 日にラジコンヘリ機を用いて、上空から遺跡全景の写真撮影を行った（株式会社　リッケイに委託）。

平成 27 年 6 月 20 日（土）町民、地元住民を対象とした現地説明会を開催。約 80 名が来訪した。

平成 27 年 7 月 2 日（木）に委託者、県教育委員会、山田町教育委員会立ち会いの下、終了確認を受けた。以降、残務を片付けつつ、7 月 15 日（水）に調査を終了し、撤収した。



第 3 図　グリッド図

2　室内整理について

平成27年7月21日から平成28年3月31日の期間に室内整理作業を行った。7月から10月までは、室内作業員を中心に遺物水洗・注記・土器接合、復元の基礎整理を行い、11月以降はその続きを調査員2名、室内作業員4名体制で継続した。

室内作業では遺物の仕分け、遺物実測・拓本、図面トレース、図版作成、収納を作業員が分担した。調査員は、原稿執筆、遺物観察表作成、実測図や図版のチェックを行った。遺物の写真撮影は当センターの写場において写真技師が行った。撮影にはデジタルカメラ（キャノン EOS60D）を用いている。

遺構図版作成は、（株）リッケイに業務委託し、野外調査時に作成した図面を基に、調査員の指示で遺構図版作成を行った。なお遺構図版の作成には Adobe 社「IllustratorCS6」を使用し、デジタルにて図版を作成した。

なお本報告書作成にあたって、各遺構名を野外調査時から変更しており、本報告書に記された遺構名を優先する。遺構名の変更については第2表の通りである。（須原）

第2表　遺構名変更表

新遺構名	旧遺構名	時代
1号住居	S106	縄文時代前期
2号住居	SX05	縄文時代前期
3号住居	SX09	縄文時代前期
4a号住居	SX03	縄文時代
4b号住居	SX03（旧期）	縄文時代
5号住居	SX04（旧期）	縄文時代
6号住居	S108	縄文時代中期
7号住居	S110	縄文時代
8号住居	S109	縄文時代
1号土坑	SK34	縄文時代
2号土坑	SK05	縄文時代
3号土坑	SK33	縄文時代
4号土坑	SK06	縄文時代
5号土坑	SK07	縄文時代
6号土坑	SK09	縄文時代
7号土坑	SK10	縄文時代
8号土坑	SK36	縄文時代
9号土坑	SK38	縄文時代
10号土坑	SK31	縄文時代
11号土坑	SK20	縄文時代
12号土坑	SK32	縄文時代
13号土坑	SK23	縄文時代
14号土坑	SK21	縄文時代
15号土坑	SK29	縄文時代
16号土坑	SK30	縄文時代

新遺構名	旧遺構名	時代
9号住居	S102	平安時代
10号住居	S103	平安時代
11号住居	S105	平安時代
1号工房	S101	平安時代
2号工房	SX01	平安時代
3号工房	SX04	平安時代
4号工房	SX06	平安時代
5号工房	S104	平安時代
1号性格不明	SX08	平安時代
17号土坑	SK28	平安時代
18号土坑	SK25	平安時代
19・20号土坑	SK04	平安時代
21号土坑	SK24	平安時代
22号土坑	SK02	平安時代
23号土坑	SK01	平安時代
24号土坑	SK15	平安時代
25号土坑	SK35	平安時代
26号土坑	SK14	平安時代
27号土坑	SK26	平安時代
28号土坑	SK27	平安時代
29号土坑	SK16	平安時代
30号土坑	SK17	平安時代
31号土坑	SK18	平安時代

新遺構名	旧遺構名	時代
2号性格不明	S107	近世以降
32号土坑	SK37	近世以降
33号土坑	SK13	近世以降

3　出土した縄文時代・古代・近世以降の遺物について

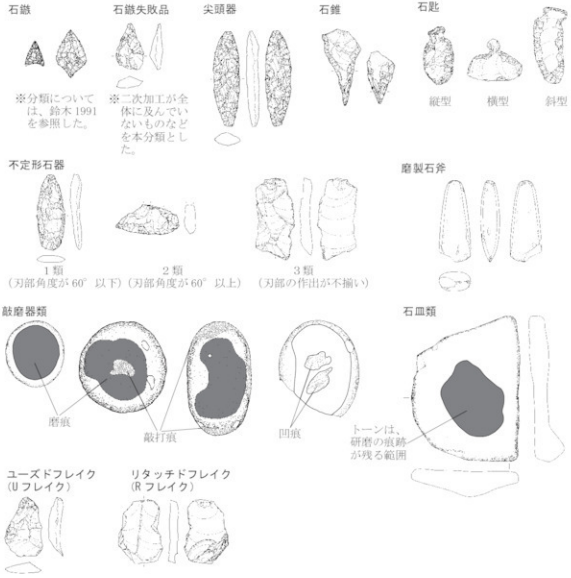
遺構内外から縄文時代の遺物（縄文土器、土製品、石器、石製品）と古代の遺物（土師器、須恵器、土製品、石製品、支脚、羽口、鉄製品、鉄滓）が、また遺構外からは近世以降の遺物（陶磁器、銭貨）が出土している。全て時代別、種類別に分類し、属性観察を行った。以下はその概略である。

縄文土器・土製品

前期（前葉～後葉）と中期（前葉～中葉）の縄文土器が出土している。各出土土器については、『縄文土器大観』や『総覧　縄文土器』を元に、土器型式の分からない「前期初頭～前葉」を除き、大木1～5式、また大木8a・大木8b式に分類し、本文中に記した。また土製品は円盤形土製品が出土している。

石器・石製品

石鏃、尖頭器、石錐、石匙、不定形石器（削器・掻器を一括）、磨製石斧、敲磨器類（磨石・敲石・凹石を一括）、石皿類に分類し、また製品でないものは、フレイク（剥片）、使用痕のあるフレイク（ユーズドフレイク、以降Uフレイク）、二次加工のあるフレイク（リタッチドフレイク、以降Rフレイク）



第4図　石器について

に分類した。また石製品は玦状耳飾り・円盤形石製品である。

土師器・須恵器・土製品・支脚

器形の特徴から平安時代の範疇に収まると推定する土師器・須恵器が出土している。またカマド燃焼面から棒状・筒状の土製品が出土し、支脚とした。特徴や時期については第Ⅵ章参照。他の土製品は粘土塊である。

鉄製品

刀子・鉄釘・鉄斧に分類した。鉄製品については実測・写真撮影後、保存処理を施している。

陶磁器・銭貨

いずれも小片であるが、器種や時期判断が概ね可能な陶磁器片を掲載した。また銭貨は寛永通宝１枚である。　（須原）

4　出土した古代の鉄生産関連遺物について

平安時代の竪穴住居跡や鍛冶工房跡から鉄生産関連遺物として羽口と鉄滓が出土している。

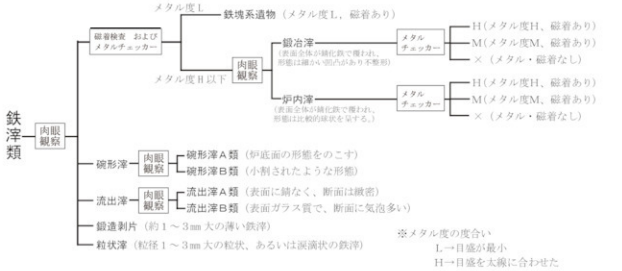
羽口

土管状の状態で鍛冶炉と鞴を繋ぐ土製の送風管である。本遺跡から出土した羽口は全て使用済みで、先端部には鉄滓が付着し、体部は被熱により赤～灰色に還元している。

鉄滓

鍛冶を行う際、鉄原料から排出される不純物をさす。鉄の含有や形状から鉄塊系遺物・鍛冶滓・炉内滓・椀形滓・流出滓に分類し、また鍛冶滓・炉内滓・椀形滓・流出滓については特殊金属探知器（メタルチェッカー）を用い、鉄含有量からさらに細分した。

その分類については第５図に示した。分類に際しては肉眼観察を基準とした上で、強力磁石（ビックアップ）で磁着性を、メタルチェッカーで鉄含有量（メタル度）を測量することで細分をしている。なお、各鉄滓については基準となるものを選び、写真図版53・54に示している。　（須原）



第５図　鉄滓の分類について

Ⅴ　調査の概要・基本土層

1　調査の概要（第７図）

調査区は不整な多角形を呈した範囲で南北約 80 m、東西約 85 m を測る。標高は最も高い所で 32m、最も低い所は 21m である。

調査区内の地形は、北東から南西に向けての比較的急な斜面地である。ただし調査区北端から北東側の標高 32 m前後、調査区中央の標高 27 m前後、調査区南西端の標高 24 m前後の３箇所は、緩やかな平坦地が形成されている。この平坦地周辺で縄文時代・平安時代の遺構・遺物が見つかっている。

地形についてもう少し言及すると、最も高い調査区北側は、東から西へと下がる狭小な丘陵頂部の一部であり、調査区中央はその丘陵中腹斜面地である。ただし植杉等を目的とした後世の造成により、調査区北側はほぼ水平に削平されており、検出できた遺構はいずれも残存状況が悪い。また調査区中央、調査区南西側は、急な斜面であり、堆積した土砂が下方（南側）へと動いている可能性が高く、それを起因として、上記２箇所の平坦面から検出した遺構はいずれも上部や南側が消失している。

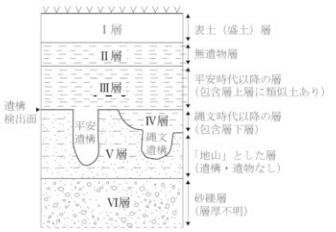
縄文時代の遺構は、調査区北西側の斜面上方（ＩＡ９ｈグリッド周辺）と調査区南西端（ＩＢ７ｆグリッド周辺）の２箇所を中心に分布する。縄文時代前期後葉（大木４～５式期）の竪穴住居跡（大型住居）６棟、縄文時代中期後葉（大木８ｂ式期）の竪穴住居跡２棟、前期･中期の土坑 15 基であり、また調査区南端の斜面地では前期前葉（大木２ａ～２ｂ式期の範疇）の遺物を中心とした包含層１箇所を確認した。出土遺物は縄文土器が大コンテナ 9.5 箱（縄文時代前期・中期）、石器大コンテナ３箱で、特筆すべき点として玦状耳飾り８点が出土している。各遺構内外から出土した遺物量については第３表に示した。

平安時代の遺構は調査区北東側の平坦面（ⅡＡ８ｉグリッド周辺）、斜面中央（ⅡＢ１ａグリッド周辺）、調査区南西端（ＩＢ４ｄグリッド周辺）の３箇所に分布する。10 世紀代の竪穴住居跡３棟、鍛冶工房跡５棟、土坑 11 基を検出した。竪穴住居跡の床面にはカマドとは別に、焼けの良い焼土が残っていることが多い。鍛冶工房跡には複数基の鍛冶炉が付属し、その周辺からは羽口や鉄滓等が出土している。また鍛冶炉には底面に椀形滓が残っていたものも見受けられ、鍛冶の操業を窺わせる事例を確認した。出土遺物は土師器、須恵器、羽口が大コンテナ 15 箱分であり、ほかに鉄製品（鉄斧など）、鉄滓大コンテナ１箱がある。遺構から出土した土器等の遺物については第３表、鉄滓の出土量については第９表に示した。

他に近世以降の土坑２基、性格不明遺構１基が検出し、また遺構外から陶磁器や銭貨が出土している。

2　基本土層（第６図）

調査区は北から南に向く高低差のある比較的急な斜面地が大きく占めており、堆積様相が良好ではない箇所が多い。したがって各所で基本土層を確認したわけではない。ただし、掘り下げ時には土層を確認し、概ね第６図の



第６図　基本土層

通りの土層であることを観察した。

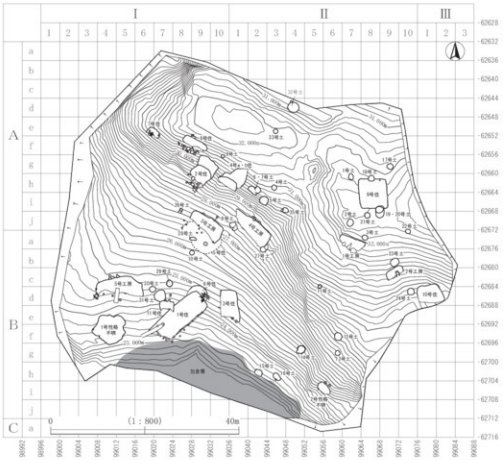
Ⅰ層は現表土で、概ね調査区全体に堆積する。黄褐色のシルト～砂層で、約 50cm 堆積する。

Ⅱ層は灰褐色を呈するシルト層で、30 ～ 80cm 堆積する。調査区南側の低い場所に堆積している。遺物は混入しないので、堆積した時代は不明。Ⅲ層との境界が明瞭であり、おそらく近世以降と推測する。概ね緩やかに堆積しているが、部分的に細砂がラミナを形成しており、ラミナの形成の有無で２細分（Ⅱａ層、Ⅱｂ層）した。

Ⅲ層は黒褐色を呈するシルト層で、10cm 前後堆積する。調査区北～中央で検出した平安時代の遺構埋土に類似しており、古代以降に堆積したものと捉えられるが、調査区南端の包含層ではこの層より縄文土器片が多く出土した。

Ⅳ層は暗褐色を呈するシルト層で、調査区南端、包含層や縄文時代の遺構埋土で確認した。10cm 前後堆積する。層上位にのみ縄文土器片が混じる。本来この層上面が平安時代の遺構検出面となるものと推測する。ただし平安時代の遺構が分布する調査区北側から中央にかけて、Ⅳ層の堆積は見受けられず、類似土が縄文の遺構埋土で確認できたのみである。

Ⅴ層は黄褐色を呈するシルト層で、やや砂質である。無遺物層であり、主にこの層上面にて遺構を検出した。Ⅴ層より下は基盤層（風化花崗岩により形成された層）で、遺構・遺物共になく、したがってこれ以上の掘り下げは行っていない。　（須原）



第７図　遺構配置図

第３表　出土遺物一覧

遺構名	縄文土器・土師器・須恵器(g)					羽口・支脚・土製品(g)			
	埋土上位	埋土下位	床面	炉内/カマド	柱穴・溝内	埋土上位	埋土下位	床面	炉内/カマド
1号住居	7168.8	17345.5	527.9		1356.9	22.4			
2号住居	3285.8	1678.7	1500.7		26.6				
3号住居	1511.9	4171.5	873.6	433.0	142.2			110.1	
4a・b号住居	10665.7		420.3	284.7					
5号住居	1616.1			17.6					
6号住居	75.1	217.8	246.2						
7号住居	867.7								
8号住居		30.9							
9号住居	552.4	910.6	271.9	217.5	27.5	113.2	98.3		887.0
10号住居		170.8	118.0				217.3		
11号住居		1149.6	79.1	2038.5	242.9		52.5		1718.3
1号工房		46.9	49.8		4.7		102.9	3195.8	1630.5
2号工房		65.9	16.5						
3号工房	1938.0		4.5	499.7		92.8			134.5
4号工房		333.8	46.5	5.0		297.4	1027.4	1467.3	856.7
5号工房	20.4	159.4			111.4		38.9		
1号性格不明	113.3					5.2			
2号性格不明									
1号土坑	47.6								
2号土坑	12.5						116.1		
3号土坑	19.6								
4号土坑	3638.9								
5号土坑	1100.1								
6号土坑	491.1								
7号土坑	859.5								
8号土坑									
9号土坑	4.7								
10号土坑									
11号土坑	37.8								
12号土坑									
13号土坑	1637.0								
14号土坑	639.3								
15号土坑	548.6								
16号土坑	399.8								
17号土坑									
18号土坑	70.5								
19号土坑	170.2								
20・21号土坑	247.1					26.3			
22号土坑	210.7					30.7			
23号土坑	253.5								
24号土坑	17.1								
25号土坑	224.9								
26号土坑	23.8								
27号土坑	4.9								
28号土坑									
29号土坑									
30号土坑	295.8								
31号土坑	98.7								
32号土坑	728.1								
33号土坑	507.6					149.6			
34号土坑									
柱穴	8.4								
遺構外(Ⅰ～Ⅱ層)	876.3								
遺構外(Ⅱ～Ⅲ層)	54361.9							64.3	
遺構外(Ⅱ層)	1323.5								
遺構外(Ⅲ～Ⅳ層)	211.3							57.9	
遺構外(Ⅲ層)	5632.3								
遺構外(Ⅳ層)	5072.2								
遺構外(Ⅴ層上面)	3043.4								
出土地点不明	318.7							120.6	

石器(点)																			
石鏃	尖頭器	石錐	石匙	楔形石器	不定形石器	磨製石斧	敲磨器類		石皿	砥石	Rフレ	Uフレ	フレイク	石核	軽石製石製品	石製品	鉄床石
76	3	2	9	8	27	1	21				26	43	417			3	
2				3	2		4				1	1	35				
11					6		1	3	1		4	5	69				
1					1							1	5				
													10				
1					1								1				
				1				4					9				
1								1				1					
1			1					1				1	3		1		
									1							2	4
6						1		4	1	1	2	2	12			1	1
								1							1	1	
1								4								1	1
		1						3				1	7			1	
													1				
											1		2				
													1				
									2								
													2			1	
1					2								3				
1																	
												1	1				
					1			1					5				
								1				1	2				
													1				
												1	8				
													3				
												1	2				
1					1			1					2				
													2				
									1				1				
								2					4				
22	3	3	6	3	22	3	1	10			15	27	158			2	
			1							1	1		2				
		2						5									
6					2			3			3	3	34				
3		2	1	1	6			4	3		3	3	28	1		2	
4	1		1	1	5			3		2	1	2	14			1	
					2	1		2				1	3				

Ⅵ　検出遺構・出土遺物

1　縄　文　時　代

（1）竪　穴　住　居　跡

1号住居跡（第８～17図、写真図版３・31～33・40～42）

［位置・検出状況］調査区南端、ＩＢ９ｄ～ＩＢ７ｆグリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出した。平成26年度の試掘調査で、北壁の一部と１列に並ぶ地床炉が確認されていた。遺構は北側の残りは良好であるが、南側半分は床面が残存するが、壁は確認できなかった。おそらく後世の土砂崩落によって消失したものと推測する。

［その他の遺構との重複］６号住居跡と重複し、本遺構の方が旧い。また平安時代に比定される11号住居跡と重複し、11号住居跡により本遺構の西壁の一部が削平されているのを確認した。

［平面形］隅丸長方形を呈する、大型住居である。

［規模］長軸1320cm・短軸510cm・深さ100cm

［埋土］遺構の南側は消失しているが,残存する範囲では11層（３～13層）からなる。黄褐色シルト層（４層）と黒褐色シルト層（５・７層）、暗褐色シルト層とが互層を呈しているのが特徴である。概ねレンズ堆積をしており、自然堆積と推測する。また床面直上層の10層には８×２ｍの範囲で炭化物が水平に堆積していた。

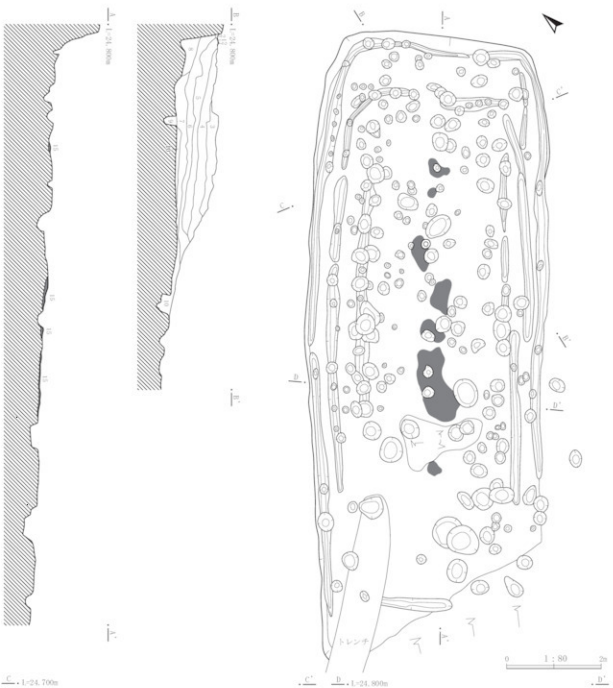
［床面・壁］炉を検出したⅤ層面を床面と判断した。概ね平坦である。壁は北壁と東西両壁の一部を確認した。ほぼ直立気味である。

［炉］住居床面の中央に、住居の長軸と並行して７箇所の地床炉を確認した。平面形はいずれも歪な不整形で、長軸方向にやや長い形態のものが多い。焼成は強く、床面下３～８cmが被熱により明赤褐色に還元している。

［附属施設］柱穴200個を確認した（第９図）。比較的大きな柱穴群が地床炉を挟んで、長軸方向に大きく２列に並行し、その周辺に小さな柱穴が付属する。また小柱穴が床面中央に地床炉を切る状態で長軸方向に並んでいる。

壁溝は３重に巡る。最も内側の壁溝は長軸方向２列のみ確認した。柱穴に切られており、最も旧い時期に比定されると推測する。それよりも外側の壁溝は、南側を除きほぼ全周するが柱穴と重複している。東側の壁溝がやや途切れ気味である。最も外側の壁溝は南側の一部を除き、全周しており、柱穴との重複が少ない。これらの点から、本遺構は２回以上の建て替え（拡張）が行われたことが推測される。

［出土遺物］縄文土器が重量26.399g分出土している。埋土下位から床面上にかけて出土するものが多く、概ね大木４～５式に比定される土器群である。33点図示した。１は深鉢の大型破片で胴部は寸胴、口縁部は大きく開く形態である。頭部と胴部に刺突文を加えた隆帯が付される。口唇部直下の内面にも波状を呈した隆帯が付されている。３も同様な隆帯である。６は緩やかに外反する形態の深鉢で、口縁部から胴部にかけ貼付隆帯による格子状、また「X」字状文が描かれている。８は深鉢の胴部片で、側面を打ち欠き、整形している。円盤形土製品と推測するが、かなり大型である。９～23が地文のみの深鉢である。形態が復元できた９・10では口唇部に押圧文が巡らせ波状口縁とし、鋸歯状や



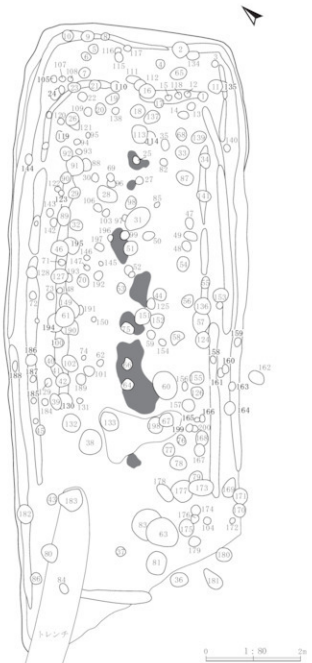
1. 明赤褐色土（5YR5/6）　粘性弱　しまり密　6号住居埋土。炭化物微量。
2. 褐色シルト（10YR4/4）　粘性やや強　しまりやや密　6号住居埋土。炭化物微量含む。
3. にぶい黄褐色シルト（10YR6/4）　粘性弱　しまり密　地山土。
4. にぶい黄褐色シルト（10YR5/4）　粘性やや強　しまり密　炭化物少量、暗褐・中期土器・陶磁器片混じり。
5. 黒褐色シルト（10YR3/2）　粘性強　しまりやや密　地山土。炭化物少量、地山ブロック微量含む。
6. 暗褐色シルト（10YR3/3）　粘性やや強　しまり密　炭化物少量。地山ブロック少量含む。
7. 黒褐色シルト（10YR3/2）　粘性強　しまり密　炭化物微量。地山ブロック中量含む。
8. にぶい黄褐色（10YR4/3）　粘性強　しまり密　炭化物少量、焼土粒微量。地山ブロック少量含む。
9. にぶい黄褐色（10YR5/3）　粘性やや強　しまりやや密　炭化物微量、地山ブロック少量含む。
10. 褐色シルト（7.5YR4/6）　粘性強　しまりやや緩　炭化物が層状に広がる。焼土粒微量含む。
11. 黒褐色シルト（10YR2/3）　粘性やや強　しまり密　炭化物・焼土粒微量。地山ブロック微量含む。
12. 暗褐色シルト（10YR3/3）　粘性強　しまりやや密　焼床土。炭化物微量、白色粒子微量含む。
13. 黒褐色シルト（10YR3/2）　粘性やや強　しまり密　焼床土。暗褐色シルトブロック少量、地山ブロック少量含む。
14. 褐灰色シルト（10YR4/1）　粘性やや強　しまり密　堆積埋土。炭化物微量、地山ブロック中量含む。
15. 明赤褐色土（5YR5/8）　粘性やや弱　しまり密　地床炉の燃焼面。質熱土強い、表面はやや硬化。炭化物微量含む。

第８図　１号住居跡１

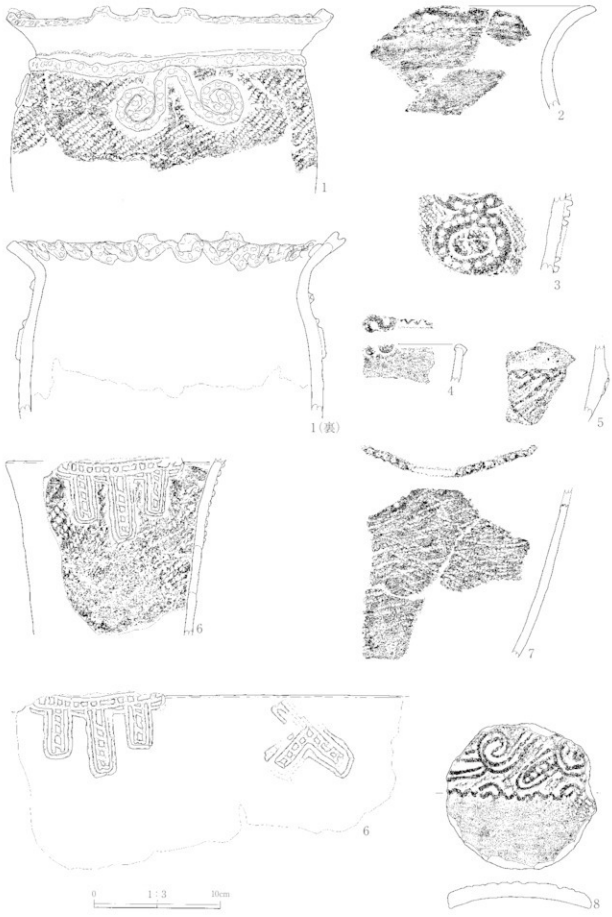
1号住居跡柱穴一覧

柱穴名	底面標高 (m)	深さ (cm)
1	23.293	30.7
2	23.291	30.9
3	23.469	13.1
4	23.477	12.3
5	23.398	20.2
6	23.268	33.2
7	23.394	20.6
8	23.463	13.7
9	23.451	14.9
10	23.295	30.5
11	23.504	5.6
12	23.324	27.6
13	23.384	21.6
14	23.400	20.0
15	23.337	26.3
16	23.300	30.0
17	23.307	29.3
18	23.434	16.6
19	23.361	23.9
20	23.192	41.8
21	23.266	33.4
22	23.254	34.6
23	23.257	34.3
24	23.329	27.1
25	23.340	26.0
26	23.178	42.2
27	23.439	16.1
28	23.490	10.9
29	23.215	28.5
30	23.503	6.3
31	23.381	11.9
32	23.099	40.3
33	23.334	25.6
34	22.978	62.3
35	23.446	15.3
36	22.727	68.2
37	23.184	21.4
38	22.826	77.4
39	22.868	59.1
40	22.832	66.8
41	22.885	61.7
42	23.171	22.3
43	22.883	51.1
44	22.754	24.8
45	22.923	47.4
46	22.953	54.1
47	23.317	18.1
48	23.137	36.3
49	23.285	21.2
50	23.137	36.3
51	23.306	13.9
52	23.294	20.6
53	23.346	15.3
54	23.265	29.4
55	23.337	16.3
56	22.730	73.7
57	22.810	69.4
58	22.941	55.9
59	22.954	51.6
60	22.468	93.5
61	23.010	49.9
62	23.200	30.0
63	22.834	66.8
64	23.148	35.3
65	23.357	26.1
66	23.218	18.3
67	23.019	38.1
68	23.172	42.5
69	23.506	9.3
70	23.067	43.7
71	23.229	27.1
72	23.059	44.1
73	23.176	32.3
74	23.294	20.8
75	23.022	47.5
76	22.864	50.8
77	22.975	42.5
78	22.991	40.9
79	22.784	61.6
80	23.159	24.1
81	23.048	35.7
82	23.456	14.3
83	23.063	39.1
84	22.969	49.1
85	23.401	9.9
86	23.413	28.7
87	23.217	38.3
88	22.971	62.3
89	23.078	48.1
90	23.028	57.2
91	23.050	55.0
92	23.179	42.1
93	23.409	19.1
94	23.423	17.7
95	23.461	13.9
96	23.492	8.0
97	23.398	11.2
98	23.421	7.5
99	23.302	16.4
100	22.816	68.4

柱穴名	底面標高 (m)	深さ (cm)
101	23.164	23.6
102	22.906	59.4
103	23.400	10.6
104	22.997	40.3
105	23.412	18.8
106	23.460	4.0
107	23.430	17.0
108	23.493	10.7
109	23.480	12.6
110	23.485	11.5
111	23.457	14.7
112	23.496	10.2
113	23.541	5.9
114	23.561	3.9
115	23.399	20.1
116	23.559	4.1
117	23.539	6.1
118	23.313	28.7
119	23.403	19.7
120	23.398	20.2
121	23.409	19.1
122	23.331	16.9
123	23.327	17.3
124	22.811	68.9
125	23.142	33.8
126	22.699	70.1
127	22.962	53.8
128	23.096	41.1
129	22.877	52.3
130	23.128	27.2
131	23.232	16.8
132	22.899	50.1
133	22.753	64.1
134	23.535	6.5
135	23.484	11.6
136	22.811	66.4
137	23.540	6.0
138	23.433	16.3
139	23.456	14.4
140	23.252	34.8
141	23.035	46.1
142	23.404	9.6
143	23.329	17.1
144	23.309	29.1
145	23.402	9.8
146	23.422	7.8
147	23.401	9.9
148	23.354	14.6
149	23.206	29.4
150	23.200	30.0
151	22.947	55.3
152	22.913	48.7
153	23.172	37.8
154	23.234	26.6
155	22.913	48.7
156	22.968	43.4
157	22.880	52.0
158	22.932	56.8
159	23.030	47.0
160	22.944	45.6
161	22.903	49.7
162	23.142	23.8
163	23.037	36.3
164	22.949	45.1
165	22.726	67.7
166	22.823	57.7
167	22.790	61.0
168	23.014	38.6
169	22.782	61.8
170	22.818	58.1
171	22.994	40.6
172	22.972	42.8
173	22.693	70.7
174	22.632	76.8
175	22.721	67.9
176	22.891	50.9
177	22.881	51.9
178	22.868	53.2
179	22.712	68.9
180	22.802	59.8
181	22.817	58.3
182	23.138	26.2
183	22.740	66.0
184	23.196	29.4
185	23.139	26.1
186	23.080	42.0
187	23.087	31.2
188	23.194	20.6
189	23.298	14.1
190	23.303	29.7
191	23.406	8.4
192	23.390	11.0
193	22.964	53.6
194	23.193	30.7
195	23.390	11.0
196	23.481	1.9
197	23.505	9.1
198	22.998	40.2
199	22.824	57.6
200	22.725	67.7

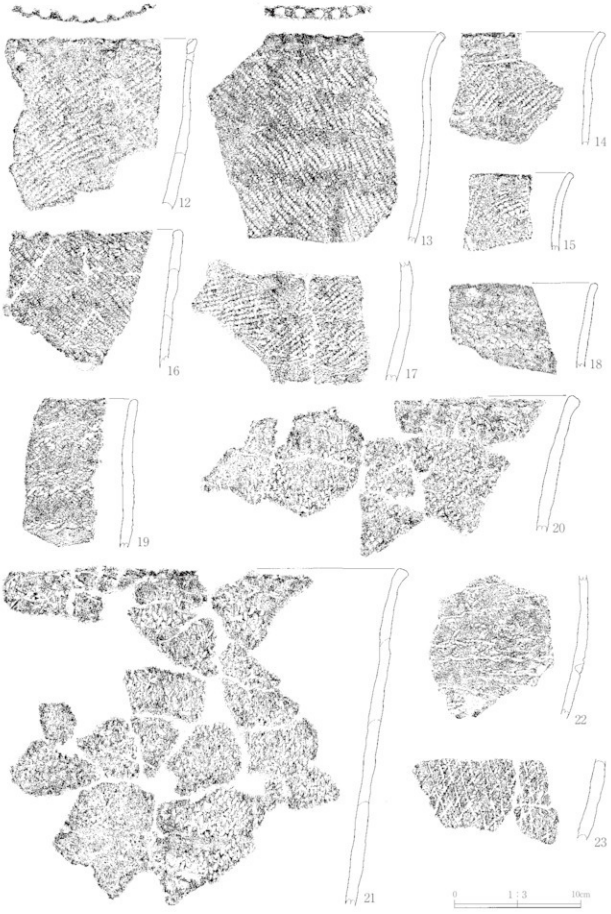


第９図　１号住居跡２



第10図　1号住居跡出土遺物1

第11図　1号住居跡出土遺物2

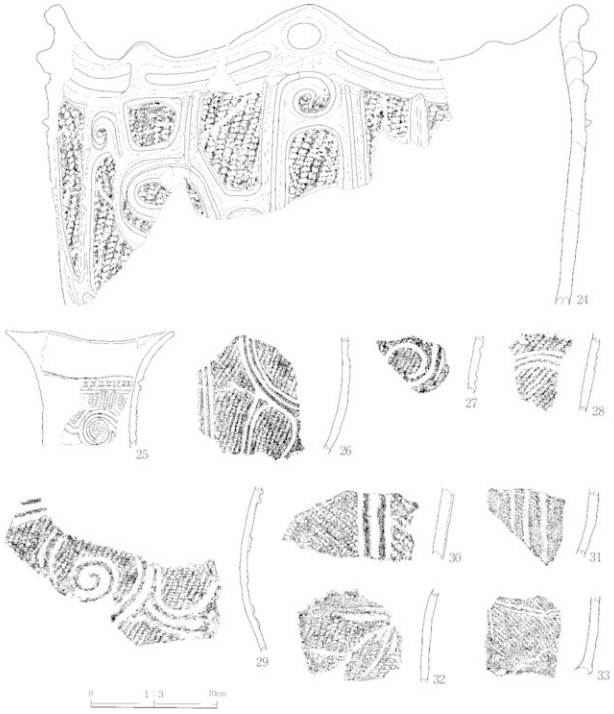


第12図　1号住居跡出土遺物3

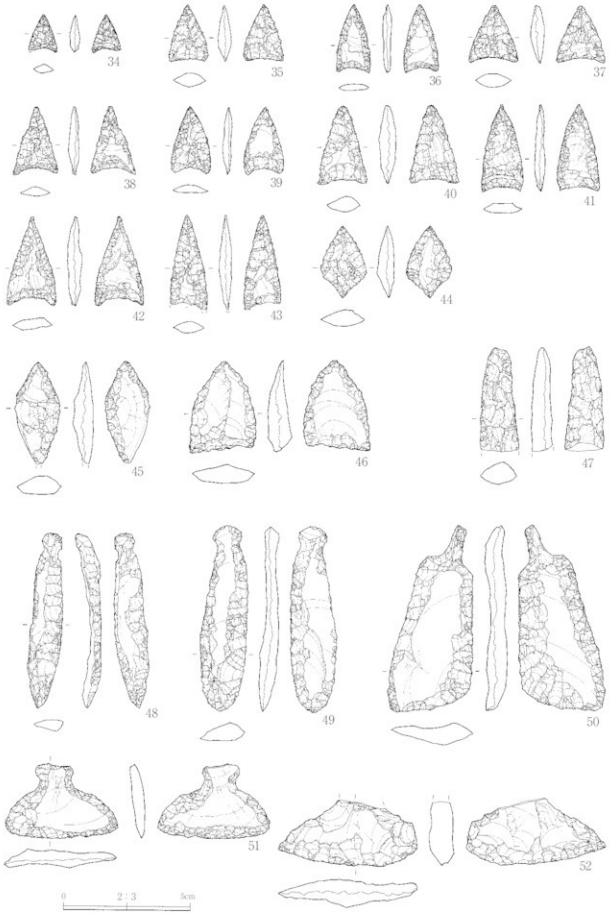
波状を呈する隆帯が付される。該期の土器群と考える。また中期に比定される土器も出土している。24は大木８ｂ～９式、25～33は大木８ｂ式である。隣接する６号住居跡は中期後葉に比定されるので、そこからの流れ込みの可能性が高い。

石器は石鏃（34～46）、尖頭器（47）、石匙（48～51）、不定形石器（52～57）、Ｕフレイク（59・61）、Ｒフレイク（58・60・62）、フレイク（63・64）、敲磨器類（65～67）、磨製石斧（68～70）、石皿（71）である。また石製品は６点（72～77）で、全て玦状耳飾りである。

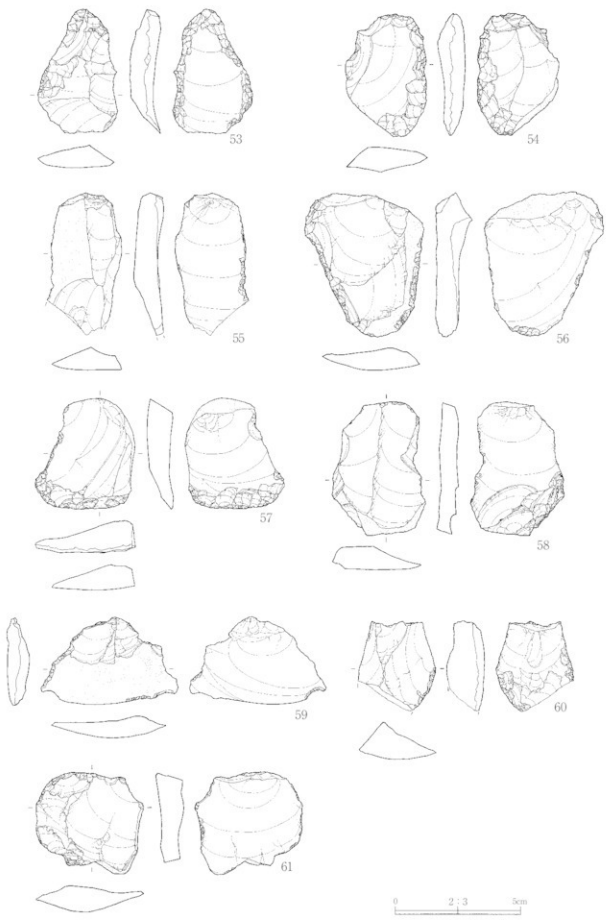
［時期］遺構の形態と埋土下位から出土した土器の年代から縄文時代前期後葉（大木５ａ式期）と判断した。なお本遺構の床面直上から採取した炭化物を試料とし、放射性炭素年代測定（ＡＭＳ測定）を行っており、4990 ± 30yrBP という結果を得ている。（須原）



第13図　１号住居跡出土遺物４

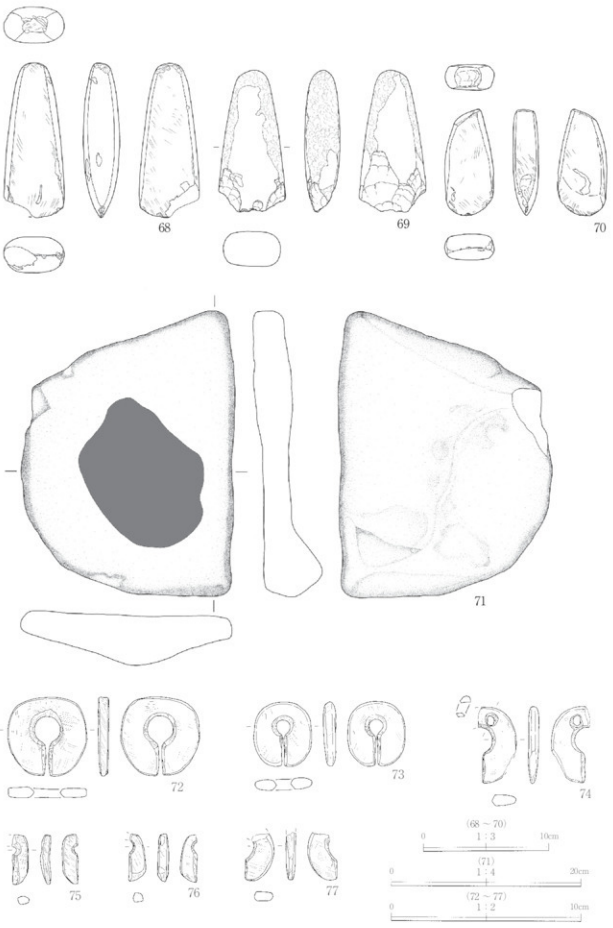


第14図　1号住居跡出土遺物5



第15図　1号住居跡出土遺物6

第16図　1号住居跡出土遺物7



第 17 図　1 号住居跡出土遺物 8

２号住居跡（第 18・19 図、写真図版４・33・42）

［位置・検出状況］調査区南側、ＩＡ９ｇ～ＩＡ９ｈグリッドに位置する。Ⅴ層上面で暗褐色シルトのプランで検出した。本遺構は調査区北西部の小高い丘陵平坦面端部から斜面にかけて位置しており、斜面は後世の崩落でⅤ層土が消失し、それに伴い本遺構の南側も消失している。

［その他の遺構との重複］なし。

［平面形］隅丸長方形を呈する、大型住居である。

［規模］長軸（350）cm・短軸 410cm・深さ 40cm

［埋土］遺構の南側は消失しているが、残存する範囲で９層確認した（１～４・６～ 10 層）。ただし１～４層は北側の遺構外から流入した土（Ⅱ層類似土）であり、厳密には本遺構に伴わない埋土である。地山に類似する黄褐色～にぶい黄褐色シルト（７～ 10 層）を主体とし、わずかだが暗褐色シルトが混じる堆積様相は、周辺の地形が崩落し、地山土ごと埋没していったことが推測できる。

［床面・壁］炉を検出したⅤ層面を床面と判断した。概ね平坦である。南側は消失している。壁は北壁と東西両壁の一部を確認した。北壁はやや広がりながら立ち上がり、東西壁はほぼ直立気味である。

［炉］住居床面の中央に、住居の長軸と並行して３箇所の地床炉を確認した。平面形はいずれも歪な不整形で、長軸方向にやや長い形態のものが多い。規模では炉１が最も大きく、140 × 60cm を測る。いずれの炉も焼成は弱く、床面下約５cm が被熱により還元しているが、褐色を呈するにとどまる。

［附属施設］柱穴が床面 23 個、南側の床面が消失した範囲で６個、合わせて 29 個確認した。配列はやや不規則だが、地床炉を挟んで、長軸方向に並行しているようにも見受けられる。

壁溝は北壁際で確認した。１条のみで北西の一部は２重になる。拡張があったかは定かではない。また床面の東側には短軸方向に短い溝が付属する。用途は不明である。

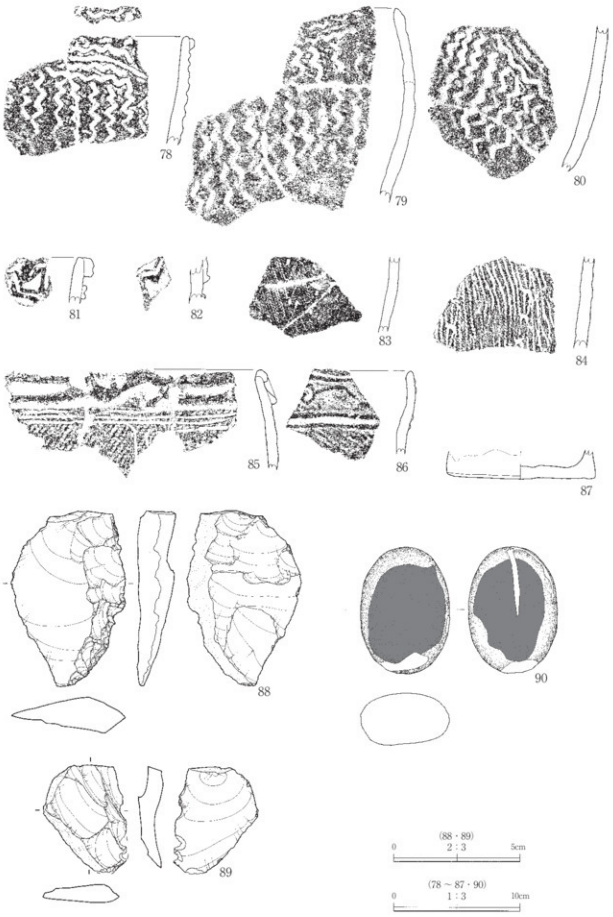
［出土遺物］縄文土器が重量 6491.8g 分出土している。出土量は比較的多いが、その多くは遺構外からの流れ込みの可能性がある。ただ埋土下位から床面上の土器は概ね大木５式の範疇に収まり、まとまりがあると言える。10 点図示した。78 ～ 80 は口縁部から胴部にかけての破片で、やや太い沈線で連続する波状文が描かれている。大木５a 式の範疇に含まれるものと推測する。81・82 は小片であるが、沈線文を加えた隆帯が付され、大木５a 式と判断する。83･84 は単軸絡条体１類を施文された胴部片で、大木５a 式か。85・86 は埋土上位からは出土しており、大木８a 式に比定される土器片である。前述の通り、埋土上位は遺構外からの流入土であり、これらの土器も流れ込みで混入した可能性が高い。

石器は 48 点出土している（石鏃、楔形石器、不定形石器、敲磨器類、Ｒフレイク、Ｕフレイク、フレイク。第３表）。比較的少ない。２点図示した。88 は不定形石器で、素材となるフレイクの片面のみ二次加工を施し、刃部を作出している。89 はＲフレイクで、最終剥離面に不連続な微細剥離とやや大きい押圧剥離が施されている。

［時期］遺構の形態と埋土下位から出土した土器の年代から縄文時代前期後葉（大木５a 式期）と判断した。（須原）

1. 褐色シルト（10YR4/6）	粘性弱	しまり密	崩落土。炭化物少量、白色粒子少量含む。
2. にぶい黄褐色シルト（10YR5/4）	粘性弱	しまり密	崩落土。炭化物微量、白色粒子微量含む。
3. 黄褐色シルト（10YR5/8）	粘性やや強	しまり密	崩落土。炭化物微量、地山ブロック中量含む。
4. 黄褐色シルト（10YR5/6）	粘性やや弱	しまり密	地山土が崩落でブロック状に堆積した層。炭化物少量含む。
5. 褐色焼土（7.5YR4/6）	粘性やや弱	しまりやや密	炉燃焼部。焼成弱く、淡く還元するのみである。
6. 暗褐色シルト（10YR3/4）	粘性やや弱	しまりやや密	炭化物微量、地山ブロック少量、白色粒子微量含む。
7. にぶい黄褐色シルト（10YR4/3）	粘性やや弱	しまり密	1層類似の崩落土。1層より明るい。地山ブロック中量含む。
8. 暗褐色シルト（10YR3/4）	粘性やや強	しまり密	炭化物微量、白色粒子少量含む。
9. 明黄褐色シルト（10YR6/6）	粘性弱	しまり密	炭化物微量、2層土ブロック少量、地山ブロック中量含む。
10. 黄褐色シルト（10YR5/6）	粘性弱	しまり密	崩落土。地山ブロック中量含む。

第18図　2号住居跡



第19図　2号住居跡出土遺物

3号住居跡（第20～22図、写真図版3・34・42）

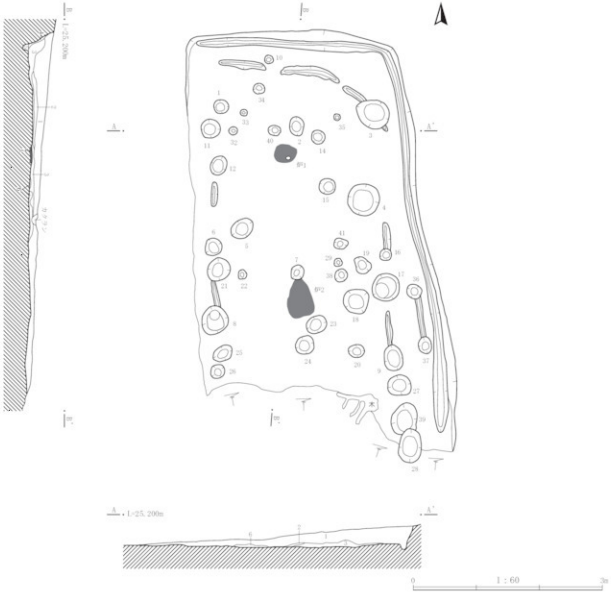
［位置・検出状況］調査区南側、ⅠB10d～ⅡB1eグリッドに位置する。Ⅴ層上面で褐色シルトのプランで検出した。本遺構は北側の残りは良好である。南側半分は床面が残存するが、壁は確認できなかった。おそらく後世の土砂崩落によって消失したものと推測する。

［その他の遺構との重複］なし。

［平面形］隅丸長方形を呈する、大型住居である。

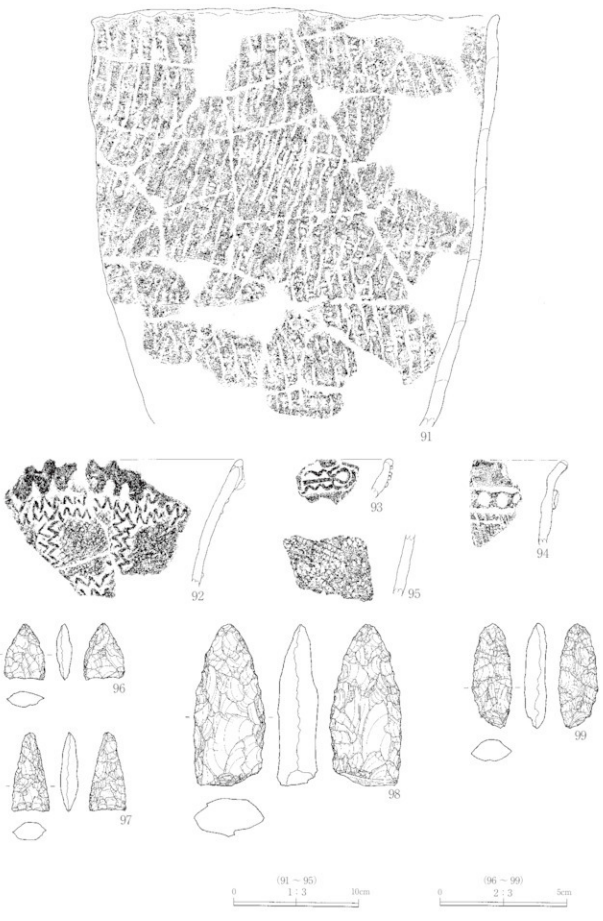
［規模］長軸（680）cm・短軸（405）cm・深さ25cm

［埋土］遺構の南側は消失しているが、残存する範囲から6層確認した。褐色シルトを主体とし、黄褐色や灰褐色を基調とし、地山ブロックが混じる堆積様相で、周辺地形の崩落により、地山土ごと埋没していったことが推測できる。

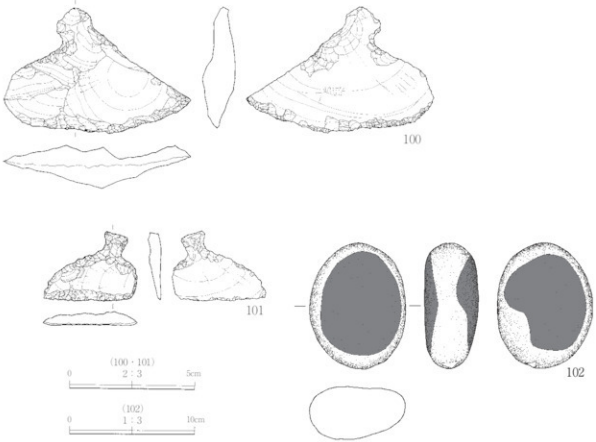


1. 褐色シルト（10YR4/6）　粘性やや弱　しまり密　　炭化物微量、地山ブロック微量、白色粒子少量含む。上部に焼土ブロック少量偏在。
2. 明黄褐色シルト（10YR6/6）　粘性やや強　しまり密　　炭化物微量、風化花崗岩粒少量含む。
3. 褐灰シルト（10YR4/1）　粘性やや強　しまり密　　炭化物少量、地山ブロック微量含む。
4. 黄橙色シルト（10YR7/8）　粘性強　しまり密　　焼落土、炭化物微量、3層土ブロック少量含む。
5. 灰黄褐色シルト（10YR4/2）　粘性強　しまりやや密　　焼壁塊土、炭化物微量、地山ブロック少量含む。
6. 明黄褐色シルト（10YR6/6）　粘性強　しまり密　　炭化物微量、暗褐色シルトブロック中量含む。
7. 赤褐色焼土（5YR4/6）　粘性やや強　しまり密　　炉1焼壁塊、被熱弱く、薄く赤色化するのみ。

第20図　3号住居跡



第 21 図　3号住居跡出土遺物 1



第22図　3号住居跡出土遺物2

[床面・壁]炉を検出したV層面を床面と判断した。概ね平坦である。南側・東側の一部が消失している。壁は北壁と両壁の一部を確認した。いずれもやや広がりながら立ち上がる。

[炉]住居床面の中央に、住居の長軸と並行して2箇所の地床炉を確認した。平面形はいずれも歪な不整形で、長軸方向にやや長い形態のものが多い。規模では炉2の方が大きく、55×40cmを測る。どちらの炉も焼成は弱く、床面下約3cmが被熱により還元しているが、赤褐色を呈するにとどまる。

[附属施設]柱穴41個確認した。配列はやや不規則だが、地床炉を挟み、比較的大きな柱穴が長軸方向に2列並行している。

壁溝は北壁から西壁際に2重に巡っている。外側の壁溝は壁に沿って切れ間なく巡るが、内側の壁溝は断続的で、また壁にやや沿わず、楕円形状に巡る。したがって本遺構は建て替え（拡張）を1回行い、またその際、遺構の平面形が楕円形から長方形へと変更した可能性がある。

[出土遺物]縄文土器が重量71322g分出土している。概ね大木5a式に比定されるものであるが、形態復元までできた土器は91のみで他は小片である。5点図示した。91は胴部から口縁部にかけて直立する深鉢である。口唇部はやや波状を呈し、口縁部から胴部に縦位の単軸絡条帯1類のみ施文される。粗製であるが、大木5a式の範疇であろうと判断した。92は口唇部直下に太い鋸歯状の突起が付され、胴部には細い貼付隆帯で2段の波状文を描いている。93も貼付隆帯によって曲線的な文様が描かれている。94は口縁部下に横位の幅広な隆帯が巡る。この隆帯には棒状工具を押し付けた押圧が加えられる。いずれも大木5a式の範疇と捉えている。

石器は100点（石鏃、尖頭器、石錐、石匙、不定形石器、Rフレイク、Uフレイク、フレイク。第3表）

出土しており、２号住居跡と比べると、豊富である。７点図示した。96・97は石鏃であるどちらも平基鏃である。98は尖頭器で、片側端部が欠損する。やや幅広で先端もわずかに丸みを帯びる。99も尖頭器であるが、小型である。100・101は横型の石匙である。両者は大きさが異なるが、刃部の作出方法は類似する。102は敲磨器類で扁平な２面に磨痕が見受けられる。

［時期］遺構の形態と埋土下位から出土した土器から縄文時代前期後葉（大木５a式期）と判断した。（須原）

４号ａ・ｂ住居跡（第23～25図、写真図版６・７・34・42・43）

［位置・検出状況］調査区中央の急斜面上、ⅠA10h・ⅡA 1g・ⅡA 1hグリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出した。当初は１棟の竪穴住居跡と捉え、本遺構内をブロックごとに区切り、斜面の上方側・中間・斜面の下方側の３箇所から同時に掘り下げた。その結果、斜面の上方～中間と斜面の下方では、平坦面が階段状にずれており、異なる２面があることが分かった。これにより、斜面の上方～下方にかけて設けたベルトの土層断面の観察から、上段と下段で２棟の竪穴住居跡が存在することを確認した。本遺構の南側壁の立ち上がりは、斜面の土砂崩落により失われている。

［他の遺構との重複関係］本遺構は２時期に分けており、上段に位置する４号ａ住居跡と下段に位置する４号ｂ住居跡とする。２棟は重複しており、４号ａ住居跡が新しく、４号ｂ住居跡が旧い。

［平面形］４号ａ住居跡は不整な隅丸長方形を呈し、４号ｂ住居跡は隅丸方形を呈する。

［規模］４号ａ住居跡：長軸（372）cm、短軸462cm、深さ50cm／４号ｂ住居跡：長軸（180）cm、短軸（447）cm、深さ47cm

［埋土］10層からなる。１～３層は斜面崩落土の流れ込みにより堆積した層である。１・２層は暗褐色シルト、３層は地山起源とみられる褐色シルトが主体となる。４～９層が４号ａ住居跡堆積層であり、そのうち８層が壁溝堆積層、９層が炉１被熱層に分けられる。10層が４号ｂ住居跡堆積層である。４号ａ・ｂ住居跡ともに褐色シルトが主体となる。４号ａ住居跡は堆積状況から自然堆積とみられる。４号ｂ住居跡は単層で、黒色・暗褐色シルトをブロック状ないし層状に含み、地山シルトブロックを全体的に含む堆積状況から人為堆積と判断した。

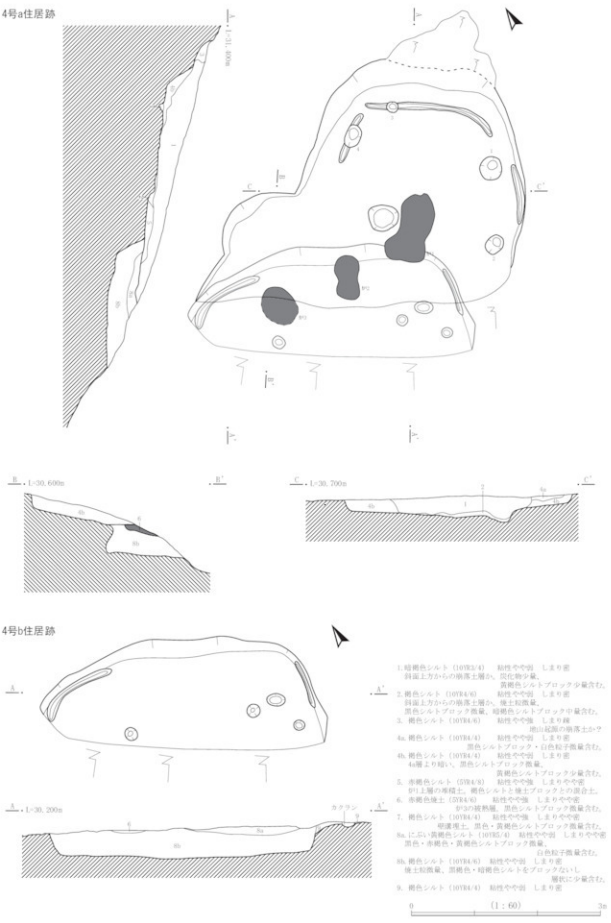
［床面］４号ａ住居跡は、被熱痕を検出した面を床面とし、全体的に概ね平坦であるが、床面中央付近はやや窪む。４号ｂ住居跡は、概ね平坦である。

［壁］４号ａ・ｂ住居跡ともに、やや外へと広がるが、概ね直立気味に立ち上がる。南壁は斜面の土砂崩落により消失しており、北・東・西壁の３方が残存する。また４号ａ住居跡の北壁の一部は、斜面崩落の際の土砂流入により壊されている。

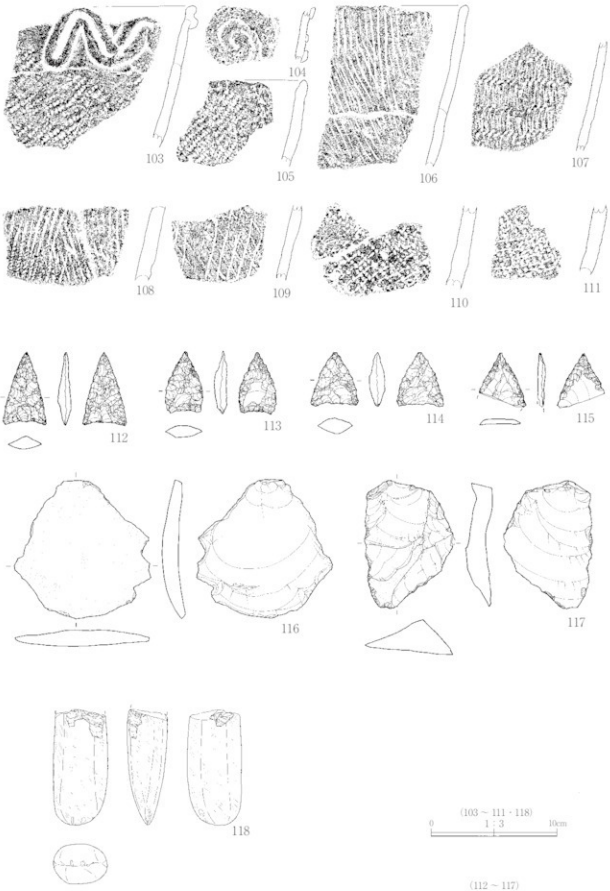
［付属施設］４号ａ住居跡床面から、炉を３箇所確認した。炉１は109×54cmの楕円形を呈し、被熱は強く、床面下６cmほど赤色に還元しており表面の硬化は著しい。炉２は70×39cmの楕円形を呈し、被熱は弱いが、床面下６cmほど赤色に還元している。炉３は66×50cmの楕円形で、被熱は弱いが、床下９cmほど赤色に還元している。

柱穴は４号ａ住居跡で５個、４号ｂ住居跡で４個確認しており、４号ａ住居跡では配置は比較的壁際に沿うように位置するが、４号ａ・ｂ住居跡とも主柱配列の推定は難しい。（澤目）

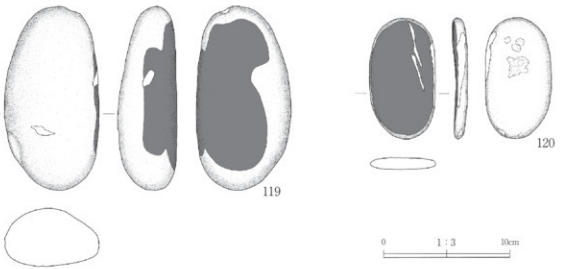
［出土遺物］縄文土器が重量11370.7g分出土している。比較的出土量は多い方であるが、小片がほとんどである。９点図示した。103・104は文様が認められる数少ない資料である。103は口縁部に波状を呈した幅広の隆帯が付される。隆帯には沈線が加えられている。大木５a式と判断した。104は渦巻を描く隆帯である。大木５式の範疇か。106～111は深鉢の胴部片で、地文のみ。106～109は縦位の単軸絡条体が施文され、大木５式の範疇であろうと推測する。110・111は組紐が施文される。大



第 23 図　4 号 a・b 住居跡



第24図　4号a・b住居跡出土遺物1



第25図　4号a・b住居跡出土遺物2

木5式の範疇か。

石器は100点（石鏃、不定形石器、磨製石斧、石皿、Rフレイク、Uフレイク、フレイク。第3表）出土している。そのほとんどは埋土中から出土しており、厳密には本遺構に伴うものと言えるか定かではない。9点図示した。112～114は石鏃で、いずれも平基鏃である。115は石鏃失敗品である。基部が欠損、二次加工が全体に及んでいない。116･117はフレイクである。116は背面に自然面が残る。118は磨製石斧で、基部が欠損する。体部に厚みがあり、丸い棒状を呈する形態である。119・120は敲磨器類である。どちらも楕円形で、119は厚みのある礫を素材とし、磨痕のみ、120は偏平な礫を素材とし、磨痕と敲打痕とが確認できる。

[時期]出土した土器の年代から縄文時代前期後葉(大木5a式期)と判断した。（須原）

5号住居跡（第26・27図、写真図版7・34・43）

[位置・検出状況] 調査区中央の緩斜面上、ⅠA8j・ⅠA9j・ⅠB8～10aグリッドに位置する。当初は基本土層が残存した面と捉えていたことから、明確なプラン検出は行っておらず、後に設置した土層ベルト断面から残存範囲を示すに至っている。本遺構は、3号鍛冶工房跡床面精査中に本遺構の堆積土にあたる土中から土器片が出土していたことと、掘削後に床面から不明瞭ながら被熱の痕跡が確認できたことから竪穴住居跡と判断した。本遺構埋没後に3号鍛冶工房跡が構築されたことと、斜面の土砂崩れないし近世以降に植林のための削平を受けて壁の立ち上がりはほぼ失われている。

[他の遺構との重複] 3号鍛冶工房跡と重複し、本遺構の方が旧い。

[平面形] 不明である。

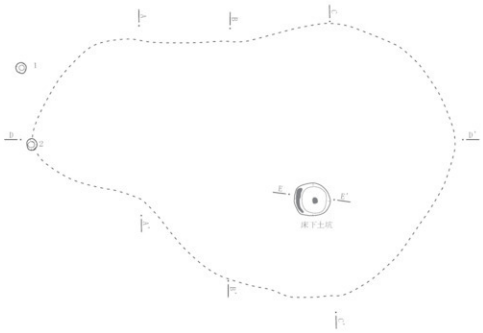
[規模] 長軸（895）cm、短軸（577）cm、深さ15cm

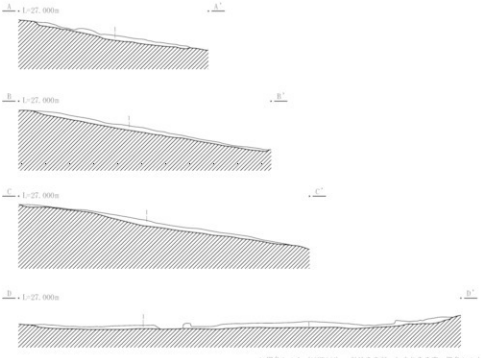
[埋土] 単層で褐色シルトが主体となる。堆積状況から自然堆積とみられる。

[床面] 地山を床面とし、概ね平坦である。

[壁] 壁としての立ち上がりは不明瞭で、ベルト断面で確認した限りでは、緩やかに大きく広がりながら立ち上がる。

[付属施設] 被熱痕を3箇所で確認した。全箇所とも被熱は極めて弱く、1～2cmの厚さの中にまば





床下土坑

第 26 図　5号住居跡

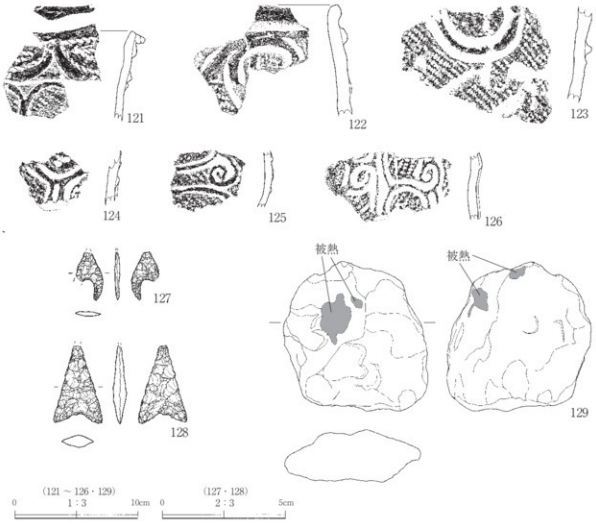
らに薄く赤味を帯びる。範囲が不明瞭であるため、図示していない。

床下土坑を１基確認した。規模は 77 × 70cm の円形を呈し、深さは床面から８cm である。底面には部分的に、わずかに被熱を受けた痕跡があり赤味を帯びている。埋土中から遺物は出土していない。（澤目）

［出土遺物］前述の通り本遺構は、４号鍛冶工房跡に大きく壊されているため遺物が少ない。

縄文土器は重量 1633.7g 分が出土しているが、いずれも小片である。６点図示した。121 は深鉢の口縁部片で隆帯脇に縄文原体押圧文が施文される。大木８a 式の古段階と判断した。122 ～ 126 は大木８ｂ式の深鉢口縁部片ないし胴部片である。122・123 は口縁部から胴部にかけて隆帯による大きな渦巻文が付され、124 ～ 126 は胴部に隆帯による小渦巻文やそれを連結する隆帯が見受けられる。大木８ｂ式でも新しい時期に含まれると判断した。

石器は 28 点（石鏃、礫器、敲磨器類、石皿、Ｒフレイク、Ｕフレイク、フレイク。第３表）出土している。縄文土器同様、比較的少なく、また遺構に伴うと言えるか判断が難しいものもある。３点図示した。127・128 は石鏃である。127 は基部の片方が欠損するが、円基鏃である。円基鏃は本遺跡での出土は数が少ない。128 は凹基鏃である。129 は床下土坑脇に差し込まれていた礫で、不整な楕円形を呈し、偏平である。幅広の両面には被熱し、赤色に還元している箇所が多数見受けられた。用途は不明であるが、床下土坑が炉であれば、炉石であるかもしれない。



第 27 図　５号住居跡出土遺物

［時期］遺構自体の形態も不明であり、炉も見つかっていないので、詳細は不明であるが、出土した土器から縄文時代中期後葉（大木８ｂ式期）と判断した。（須原）

６号住居跡（第 28・29 図、写真図版８・34）

［位置・検出状況］調査区南側、ＩＢ９ｄグリッドに位置する。すでに平成 27 年度の試掘調査において石囲炉が確認されており、本調査前から、本遺構の存在は分かっていた。ただし、試掘調査時に本遺構と本遺構に重複する１号住居跡とについて、その状態や重複関係を調べるためと考えられる試掘トレンチが設定され、両遺構ともほぼ中央部分が掘り抜かれている。そのため本遺構は床面と炉の一部とが消失している。また本遺構の北東端には巨木の木根が生えており、著しく本遺構を破壊している。これらの理由から、本遺構の残存状態は非常に悪く、炉とその周辺の床面、壁を検出したにすぎない。

［その他の遺構との重複］１号住居跡と重複し、本遺構の方が新しい。

［平面形］不正な楕円形である。

［規模］長軸（175）cm・短軸（548）cm・深さ 22cm

［埋土］残存する範囲で２層確認した。ただし１層はⅡ層類似土で遺構外から流入し、さらに遺構の南側遺構外へと流出している。従って本遺構に伴われる埋土は床面上にわずかに残存する２層のみである。

［床面・壁］炉を検出したⅤ層面を床面と判断した。概ね平坦で、南側へとわずかに傾斜する。

壁は全体の北側半分が残存するが、上部は消失し、床面近くの立ち上がりのみが残存する。やや大きく広がりながら立ち上がる。

［炉］石囲炉である。床面のほぼ中央に位置する。平面形は楕円形で、62 × 44cm を測る。炉の焼成は弱く、床面下約５cm が被熱により還元しているが、淡い赤褐色を呈するにとどまる。また燃焼面は水平でなく、やや歪である。炉石は 15cm 大の凝灰岩を利用するが、平面形は不揃いである。炉の掘り方は炉石よりもわずかに大きく掘り込み、炉石を設置、褐色シルトで埋めている。炉の南角は炉石がなく、また掘り方も確認できなかった。

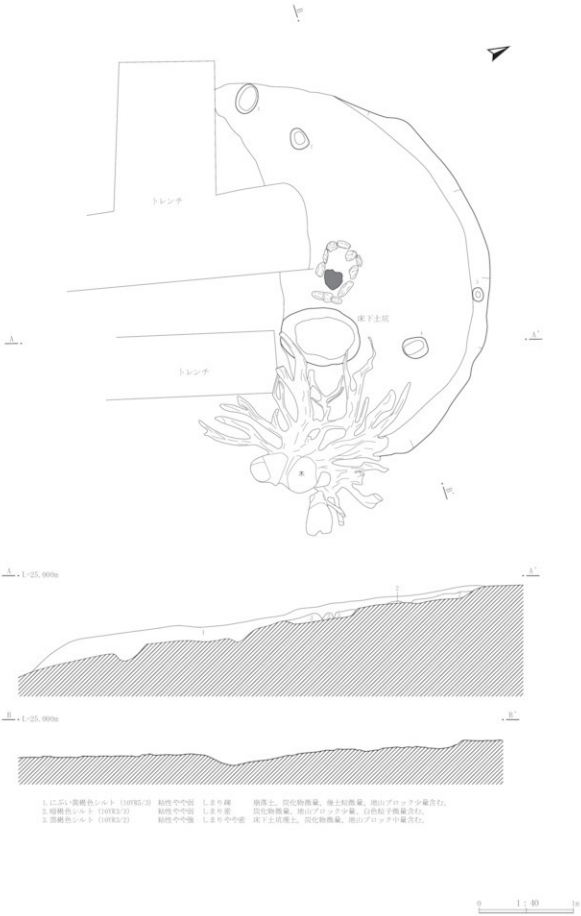
［附属施設］柱穴４個確認した。配列は不規則で、配列は不明である。

炉の南東側に 84 × 62cm 楕円形を呈する床下土坑１基が付される。深さは約 10cm で、用途は不明である。

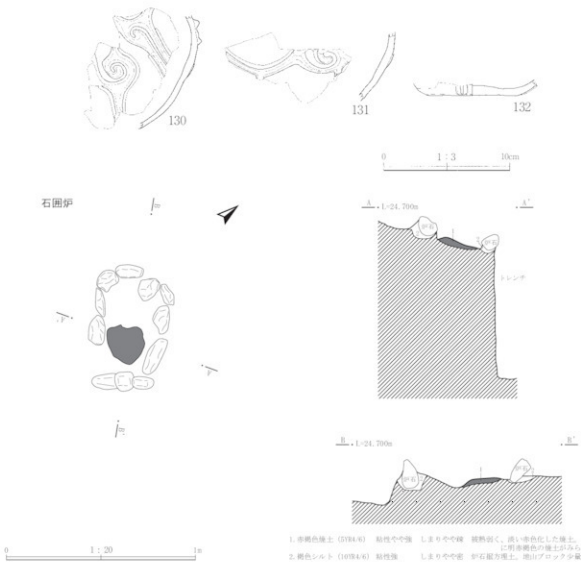
［出土遺物］遺構の残りが悪いため、遺物も極端に少ない。縄文土器は重量 539.1g 分が出土している。文様の分かる３点を図示した。130 ～ 132 は床面上から出土した深鉢の胴部片、底部片で、文様も確認できる。130・131 は隆帯による小渦巻文が見受けられる。132 はわずかだが胴部から縦に垂下する隆帯が残っている。いずれも大木８ｂ式の新しい段階の範疇に含まれる。

図示していないが、石器は８点（石鏃、不定形石器、Ｕフレイク、フレイク。第３表）出土している。ただし、上述の通り、埋土はほとんどが流入土であり、これらの石器が遺構に伴うと言えるか定かではない。

［時期］検出した炉の状態と出土遺物の時期から、縄文時代中期後葉（大木８ｂ式期）と判断する。（須原）


B
A
A'
B'
トレンチ
トレンチ
床下土坑
木
1
2
3
4
A
A'
B
B'
1.25.000m
1.25.000m
1. にぶい黄褐色シルト（10YR5/3）　粘性やや弱　しまり緩　崩落土、炭化物微量、焼土粒微量、地山ブロック少量含む。
2. 暗褐色シルト（10YR3/3）　粘性やや弱　しまり密　炭化物微量、地山ブロック少量、白色粒子微量含む。
3. 黄褐色シルト（10YR3/2）　粘性やや強　しまりやや密　床下土坑埋土、炭化物微量、地山ブロック中量含む。
0
1：40
1m

第28図　6号住居跡1



第 29 図　6 号住居跡 2・出土遺物

7 号住居跡（第 30 図、写真図版 9・34・43）

［位置・検出］調査区西端南斜面上部、ⅠA6e・ⅠA7e グリッドに位置する。検出面はⅤ層である。斜面下方の南側は削平を受け消失している。

［その他遺構との重複］なし。

［平面形］方形である。　［規模］長軸 282cm・短軸（140cm）・深さ 36cm

［床面］木痕による攪乱を受けているが全体的にほぼ平坦でしまっている。

［壁］緩く内湾しながら立ち上がり上部でやや外反する。

［埋土］埋土は 4 層からなる。主に炭化物、黄褐色シルトのブロックを含む褐色シルトで占められている。堆積状況から、自然堆積の様相を呈している。

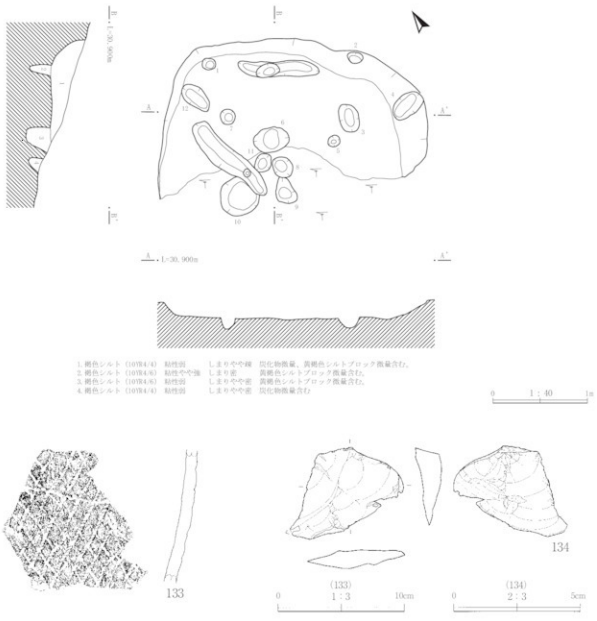
［付属施設］炉は検出されていない。時期から判断して、削平された斜面下方側にあった可能性もある。床面から柱穴が 12 個検出されている。平面形が円形のものは 6 個である。規模が最も大きい南西側のものは径 36cm・深さ 5 cm で、それ以外は径 12 ～ 24cm、深さが 8 ～ 21cm である。平面形が楕円

形のものは5個である。規模は長径25～36cm・短径14～26cm・深さ14～24cmである。柱穴の埋土は、炭化物を含む褐色シルトが主体である。形態、位置から柱穴配置を考えたが解らなかった。北壁際に壁溝が検出されている。規模は長さ87cm・幅20cm・深さ16cmである。また西壁からやや中央部寄りにある溝は規模が長さ78cm・幅19cm・深さ9cmである。壁溝・溝の埋土は炭化物を含む褐色シルトが主体をなしている。（光井）

［出土遺物］遺構の残りが悪く、出土遺物は少ない。縄文土器が重量867.7g分出土している。133は深鉢の胴部片で単軸絡条体5類が施文される。大木5a式の範疇と判断した。

石器はフレイク10点（第3表）のみ出土している。1点図示した。134はフレイクで、単一剥離面を打面とする。打面の脇に自然面が残っている。

［時期］出土した土器の年代から縄文時代前期後葉（大木5a式期）と判断した。（須原）



第30図　7号住居跡・出土遺物

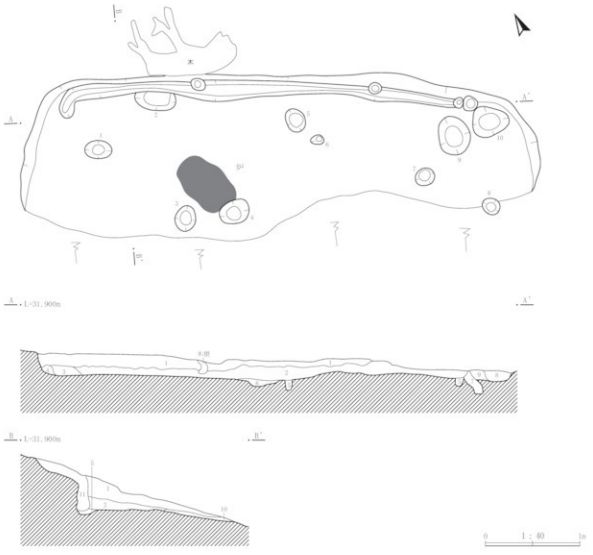
８号住居跡（第 31 図、写真図版 10）

［位置・検出状況］調査区北側、ＩＢ８ｆ・ＩＡ９ｆグリッドに位置する。本遺構は調査区北西部の平坦面端部から斜面にかけて立地するが、本来は南西方向にもっとのびていたものと推測する。それが、後世に立地する斜面地が崩れ、それに伴い本遺構も大半が消失し、北端の一部のみが残存したものと考える。精査時は遺物もわずかなので、どのような遺構か判断に悩んだが、床面上に地床炉と推測する焼土の広がりを確認し、また隣接する２号住居跡の時期を考慮し、本遺構を縄文時代の竪穴住居跡と推測した。

［その他の遺構との重複］なし。

［平面形］遺構の北壁周辺のみ検出したに過ぎないが､隅丸の長方形を呈する所謂大型住居と推測する。

［規模］長軸（175）cm・短軸（548）cm・深さ 22cm



1.	灰黄褐色シルト（10YR4/2）	粘性やや強	しまり密	炭化物微量、地山ブロック少量、白色粒子微量含む。
2.	にぶい黄褐色シルト（10YR4/3）	粘性やや弱	しまりやや疎	炭化物微量、地山ブロック中量含む。
3.	黒褐色シルト（10YR3/2）	粘性強	しまり密	炭化物微量、地山ブロック少量含む。
4.	明黄褐色シルト（10YR6/8）	粘性強	しまりやや密	地山の崩落土、暗褐色シルトブロック少量含む。
5.	灰黄褐色シルト（10YR4/2）	粘性やや弱	しまりやや疎	柱穴・壁溝埋土、炭化物微量、地山ブロックやや多く含む。
6.	明黄褐色シルト（10YR6/8）	粘性強	しまり密	柱穴埋土か、地山に類似、炭化物微量、暗褐色シルトブロック少量含む。
7.	灰黄褐色シルト（10YR5/2）	粘性強	しまり密	炭化物微量、地山ブロック中量含む。
8.	暗褐色シルト（10YR3/3）	粘性やや弱	しまり密	炭化物微量、地山ブロック微量、白色粒子微量含む。
9.	明黄褐色シルト（10YR7/6）	粘性やや弱	しまり密	炭化物微量含む。
10.	褐色シルト（10YR4/6）	粘性強	しまりやや疎	炭化物微量、地山ブロック中量含む。
11.	明黄褐色シルト（10YR6/6）	粘性強	しまりやや密	壁（斜面）崩落土、炭化物微量含む。

第 31 図　８号住居跡

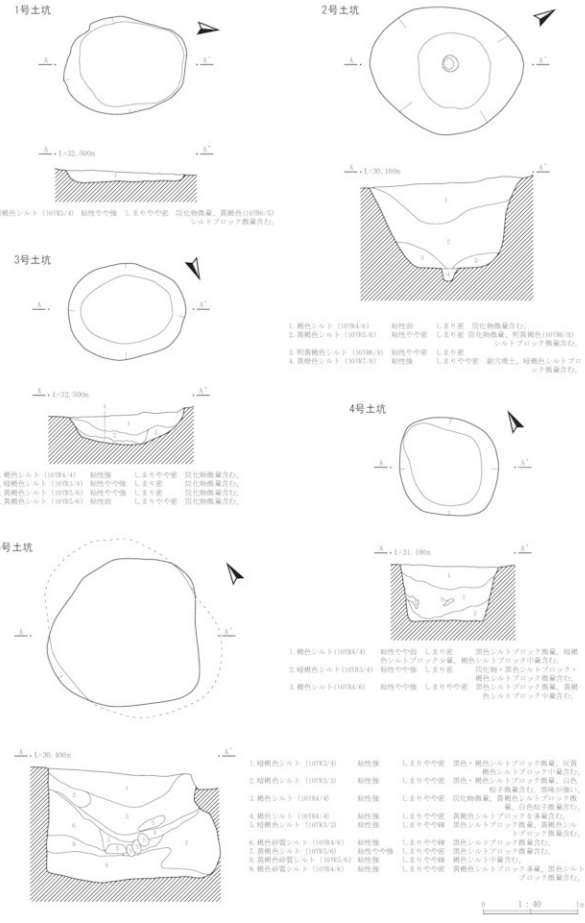
［埋土］残存する範囲で 11 層確認した。埋土上位は灰黄褐色シルト（１層）、埋土下位はにぶい黄褐色シルト（２層）を主体とし、どちらも地山（Ｖ層）に類似しており、周辺地形の崩落により、地山土ごと埋没していったことが推測できる。
［床面・壁］炉を検出したＶ層面を床面と判断した。概ね平坦であるが、東側はやや歪である。
［炉］住居床面の中央からやや西寄りで地床炉を１箇所確認した。炉の軸方向は住居の長軸よりややずれている。平面形は歪な不整形で 62 × 44cm を測る。炉の焼成は弱く、床面下約５cm が被熱により還元しているが、赤褐色を呈するにとどまる。
［附属施設］柱穴 10 個確認した。配列は不規則で、配列は不明である。
　壁溝は北壁際で確認した。
［出土遺物］縄文土器が重量 30.9g 分出土しているが、小片のみで図示していない。また石器３点（石鏃、不定形石器、フレイク。第３表）が出土しているが図示していない。
［時期］出土遺物が極端に少なく、時期判断の根拠がないが、遺構の形態と隣接する２号住居跡の時期から判断して縄文時代前期後葉（大木５a 式期）頃と判断した。　（須原）

（２）土　　坑

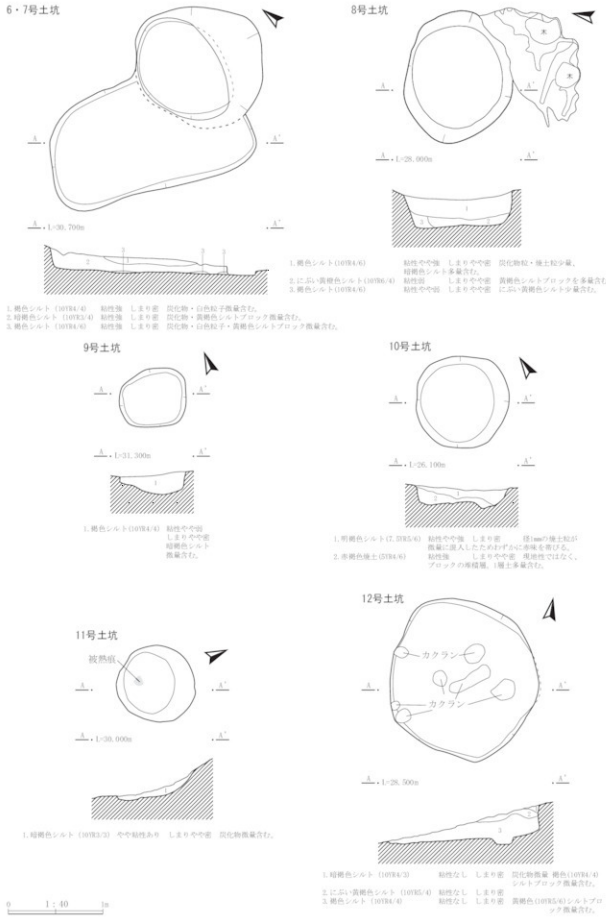
本遺構から検出した 34 基の土坑のうち、出土遺物や埋土の堆積様相から、１～ 16 号土坑を縄文時代に帰属するものと判断した。（第 32 ～ 34 図、第４表、写真図版 11 ～ 14）。ただしどの遺構も出土遺物は少なく、またその遺物自体も流れ込みによる混入の可能性があるものもあるので、詳細な時期は不明である。各土坑の属性については第４表に記した通りである。ここでは検出した土坑を集中する範囲ごとにそれらの特徴について記す。

第４表　土坑（縄文時代）一覧

遺構名	位置（グリッド）	平面形	長さ×幅(cm)	深さ(cm)	重複関係	底面・断面	埋土様相	性格
1号土坑	ⅡA7h	楕円形	132×103	13	無	底面はほぼ平坦。 壁は内湾しながら立ち上がる。	1層である。 暗褐色シルト主体。	不明
2号土坑	ⅡA7j	円形	161×134	95	無	底面は平坦。 壁は大きく広がりながら立ち上がる。	3層である。 褐～黄褐色シルト主体。	貯蔵穴
3号土坑	ⅡB8a	楕円形	124×103	32	無	底面は皿状に浅く窪む。 壁は内湾しながら立ち上がる。	4層である。 褐～黄褐色シルト主体。	不明
4号土坑	ⅡA3h	円形	105×103	57	無	底面はほぼ平坦。 壁は直立気味に立ち上がる。	3層である。 褐色シルト主体。	貯蔵穴
5号土坑	ⅡA2i～ ⅡA3i	不整な円形	160×157	117	無	底面はほぼ平坦。 壁はオーバーハング～直立気味。	9層である。 褐～暗褐色シルト主体。	貯蔵穴
6号土坑	ⅡA2h～ ⅡA2i	不整な円形	136×126	80～90	7号土坑（古）	底面はほぼ平坦で、中央まわずかにくぼむ。 壁はオーバーハング～直立気味。	不明。 褐色シルト主体か。	貯蔵穴
7号土坑	ⅡA2h～ ⅡA2i	楕円形	218×122	20～35	6号土坑（新）	底面はほぼ平坦。 壁は外へと広がりながら直立する。	3層である。 褐色シルト主体。	不明
8号土坑	ⅡA1j	楕円形	141×114	30	無	底面はほぼ平坦。 壁は外へと広がりながら直立する。	3層である。 褐色シルト主体。	不明
9号土坑	ⅠA10g	隅丸方形	71×62	22	無	底面は皿状に浅くくぼむ。 壁は直立気味である。	1層である。 褐色シルト主体。	不明
10号土坑	ⅠB8b～ ⅠB9b	ほぼ円形	95×97	18	無	底面は凹凸あり。 壁は緩やかに広がりながら立ち上がる。	2層である。 明褐色シルト主体で、埋土下位に焼土塊が堆積。	不明
11号土坑	ⅡB5c～ ⅡB5d	ほぼ円形	90×81	15	無	底面は凹凸あり（木痕？）。 壁は緩く内湾気味に立ち上がる。	1層である。 暗褐色シルト主体で焼土粒・炭化物が混じる。	不明
12号土坑	ⅡA6f	ほぼ円形	168×163	36	無	底面はほぼ平坦。 壁は直立気味でわずかに外反する。	2層である。 褐色シルトを主体。	不明
13号土坑	ⅡB6g	不整な円形	59×54	8	無	底面はほぼ平坦。 壁はオーバーハングする。	2層である。 暗褐色シルトを主体。	不明
14号土坑	ⅡB4g	ほぼ円形	168×156	22	無	底面はほぼ平坦。 壁はわずかに外傾する。	1層である。 黒褐色シルト主体で、埋土上位に炭化物や貝類が混じる。	貯蔵穴
15号土坑	ⅡB2h	ほぼ円形	開口165×(120) 底面175×(120)	21	無	底面は平坦。 壁は大きくオーバーハング。	2層である。暗褐～黒色シルト主体。	貯蔵穴
16号土坑	ⅡB3h	楕円形	192×120	38	無	底面はほぼ平坦。 壁は大きく広がりながら立ち上がる。	不明。暗褐色シルト主体か。	貯蔵穴？



第 32 図　土坑（縄文時代）1

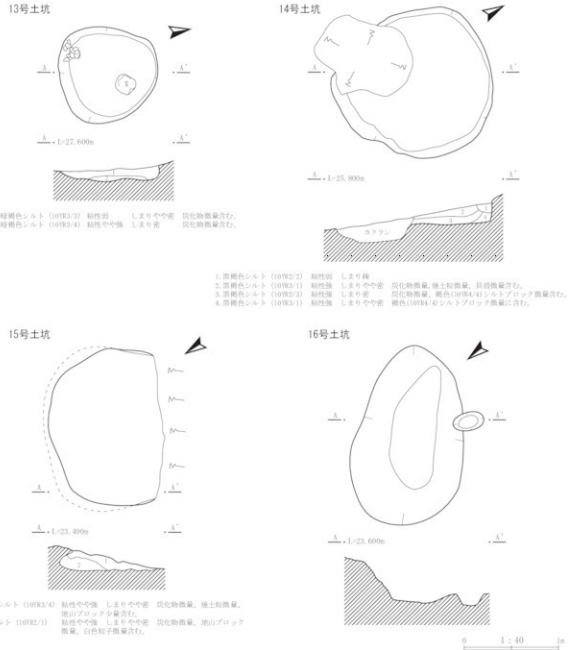


第 33 図　土坑（縄文時代）2

土坑群は、調査区北東側（ⅡＡ７ｉグリッド周辺、１～３号土坑）、調査区北側から中央の斜面（ⅡＡ２ｇ～ⅠＢ８ｂグリッド周辺、４～11号）、また調査区南東側（ⅡB4gグリッド周辺、12～16号）の３箇所に集中する。特に調査区北側から中央の斜面は４～８号住居跡が分布する場所でもあり、４～11号土坑はこれらの遺構群との関連が高い。平面形は円形、楕円形である。９号土坑のみは隅丸方形を呈するが、特に他の土坑と差異があるわけでは無いと推測する。

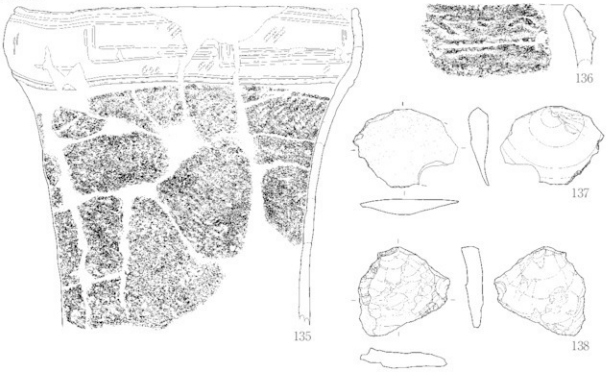
規模は概ね100～150cm前後の範囲に収まり、最も大きい７号土坑が218×122cm、最も小さい13号土坑は59×54cmである。、深さは８～90cmの範囲であるが、遺構上面が消失し、実際の深さが分からない土坑も多い。

土坑の性格は形態から類推するしかなく、判然としない土坑が多い。ただし２・４～６・14・15号土坑が遺構の断面形から貯蔵穴と判断した。いずれも壁が直立気味かオーバーハングして立ち上がる、

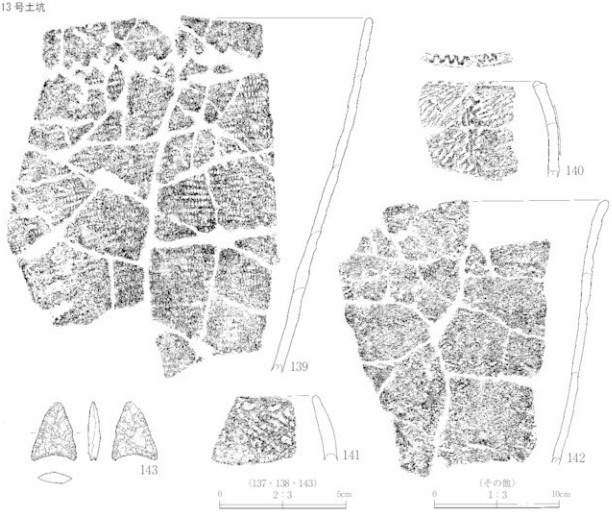


第34図　土坑（縄文時代）３

4号土坑



13号土坑



第35図　土坑出土遺物（縄文時代）1

所謂フラスコ状土坑である。4～6号土坑は周辺に縄文時代の竪穴住居跡が位置しており、これらに伴われる貯蔵穴の可能性が高い。その他の貯蔵穴は周辺に竪穴住居跡が位置せず、単独の貯蔵施設と言える。他に16号土坑は斜面の崩落により、遺構のほとんどが消失しているが、残存する範囲の断面形から貯蔵穴の可能性が高いと考えている。

出土遺物は8・10・12号土坑を除き、全ての土坑で縄文土器が出土している（第35・36図・第3表・写真図版34・35・43）。なかには大型破片も出土しているが、概ね小片で、また出土状況に特徴がなく、遺構に伴われるのか、流れ込みかは定かではない。石器は2～4、6、7、13、15、16号土坑で出土している（第3表）。

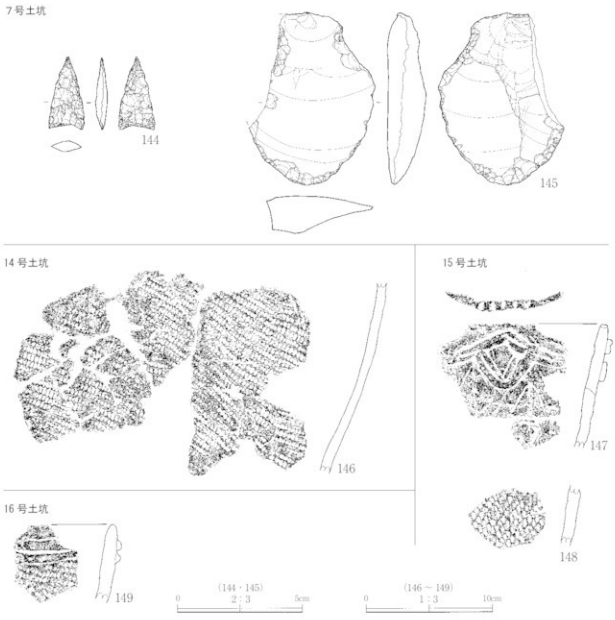
第35・36図に15点図示した。135～138は4号土坑から出土した。135は大木8a式の深鉢で、キャリパー形である。口縁部は摩滅が激しくわずかにしか文様が確認できないが、薄い隆帯により、クランク状文が施文されたと考えられる。隆帯はほとんど剥離しており、その痕跡をとどめている。胴部は地文のみ。136も大木8a式の深鉢口縁部片で、隆帯による波状文が横位に巡る。137・138はフレイクである。これらの遺物から4号土坑は大木8a式期と推定する。139～143は13号土坑から出土した。139～142は大木5a式の深鉢で139・142は外へと開く形態、140・141は口縁部が内湾する形態である。口唇部や口縁部に沈線や隆帯による鋸歯状文が横位に巡る。143は石鏃で形態がやや左右非対称である。144・145は7号土坑から出土している。144は石鏃で、平基鏃である。145は不定形石器で、やや厚みがあり、縁辺の両側から刃部を作出している。146は14号土坑から出土した。深鉢の胴部片で、大型の土器であることが想定される。地文（斜行縄文）のみであり、大きさと文様の特徴から大木8a式の胴部片と推測する。147・148は15号土坑から出土している。147は波状口縁の波頂部周辺の破片で口唇部に刻みが連続する。口縁部には隆帯が巡る。大木5a式と推測する。148は胴部片で、胎土中に繊維が混入しており、前期前葉頃と判断した。したがって両者は時期が異なっており、15号土坑に流れ込んだものの可能性がある。149は深鉢の口縁部片で口唇部直下に2条の隆帯が横位に巡っている。隆帯断面の特徴から大木8a式の可能性が高い。

（3）遺構外出土遺物（第38～48図、写真図版35～39・43～46）

縄文時代の遺構外からも遺物が出土しており、特に調査区南端ⅠB5gからⅡB4jグリッドまでの約320㎡の範囲（以下、「包含層」第37図。）のⅢ、Ⅳ層で遺物が出土している。

包含層は1号住居跡や15、16号土坑より南側に位置し、調査区内で最も低い、標高21m以下の緩斜面地である。この範囲に約10～20cmⅢ、Ⅳ層が堆積する。Ⅲ層は黒褐色を呈し、縄文時代よりむしろ古代の遺構埋土に類似する。周辺の斜面地は傾斜に沿って、堆積土が動いており、またそのために周辺の縄文時代の遺構は南側を消失している。したがってⅢ層は縄文時代以降に動いて堆積した可能性が高い。したがってⅢ層中の遺物は現地性を留めておらず、土砂の堆積によって流入した可能性が高いと推測する。そのことを裏付けるかのように、包含層中からは周辺の遺構とは異なる時期の縄文土器が多く、またそのほとんどが破片であり、形態が復元できたものは少なかった。

包含層出土を中心に114点の縄文土器を図示した（第38～46図）。150～175は前期前葉に比定される土器である。150～159は胎土に繊維が多量に混入する。口唇部への刻み(150)結節回転縄文(151)、非結束羽状縄文（152）など文様にいくつか特徴が見いだせるが、土器型式判断のメルクマールになる文様は見いだせない。前期初頭から前葉の範疇か。161～175は胎土に繊維が混入するが、微量である。横位の結節回転縄文が多段で施文される土器が多い（166など）。大木2a～2b式の範疇か。



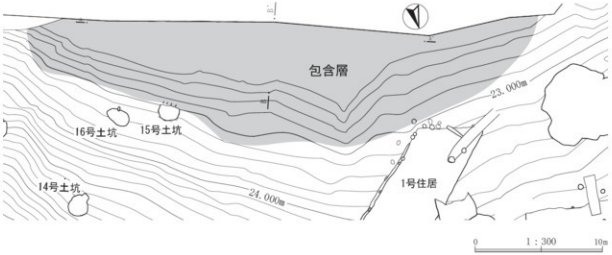
第 36 図　土坑出土遺物（縄文時代）2

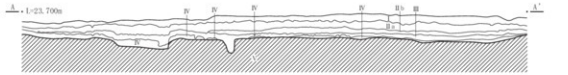
176 ～ 195 は胎土の繊維混入が微量であるが、詳細な時期は不明。平縁（176 ～ 178）のほかに、突起が付くもの（179）や口唇部に押圧を巡り、波状口縁を形成するもの（180 ～ 182）などが認められるので、前期後葉頃の可能性が高い。196 ～ 238 は大木５a 式に比定される土器である。196 は形態が分かる数少ない土器で、胴部は球状、口縁部は大きく外反する。胴部には格子状の貼付隆帯が施文される。197 ～ 203 も貼付隆帯によって文様が描かれている。204 ～ 212 は貼付隆帯の幅が広く、その隆帯上に刺突や沈線が施される。また口唇部には鋸歯状（205）や円文（207・209・210）の隆帯が付されるものが見受けられる。217 ～ 238 も大木５式の範疇と考えているが、地文となる縄文のみが施文される一群である。口唇部には台状に張り出すもの（217 ～ 219 など）や、波状（223 など）、鋸歯状（229 など）の隆帯が付されるものが見受けられる。232 ～ 236 は前期後葉に比定される胴部片で、該期の特徴である単軸絡条体第５類が施文される。239 ～ 246 は前期の底部片である。

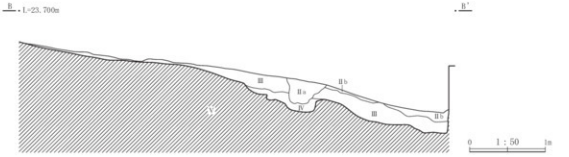
わずかではあるが、中期の土器も出土しており、17 点図示した。247 ～ 249 は大木８a 式に比定され、

なかでも新しい段階の範疇と考える。247は粗製か。248はキャリパー形の深鉢で、口縁部には沈線による波状文が横位に巡る。250～256は大木８ｂ式に比定される。小片が多く、詳細は不明であるが、文様から大木８ｂ式の新しい段階の範疇に含まれるものと推定する。259も大木８ｂ式か。その他は地文のみの粗製で詳細な時期は不明である。

包含層及び、遺構外からも石器や石製品が出土している。内訳については第３表に記した。58点図示した。264～276は石鏃である。平基鏃が多く、特に基部がわずかに窪む264のような形態の石鏃が多い。一方、268のような凹基鏃は少ない。274は有茎鏃だが茎部が欠損している。275は石鏃失敗品と判断した。277～280は尖頭器である。277幅広いで先端が丸く作出しているが、厚みや断面形から尖頭器の範疇に含まれると判断した。281～284は石錐である。いずれも素材となるフレイクの

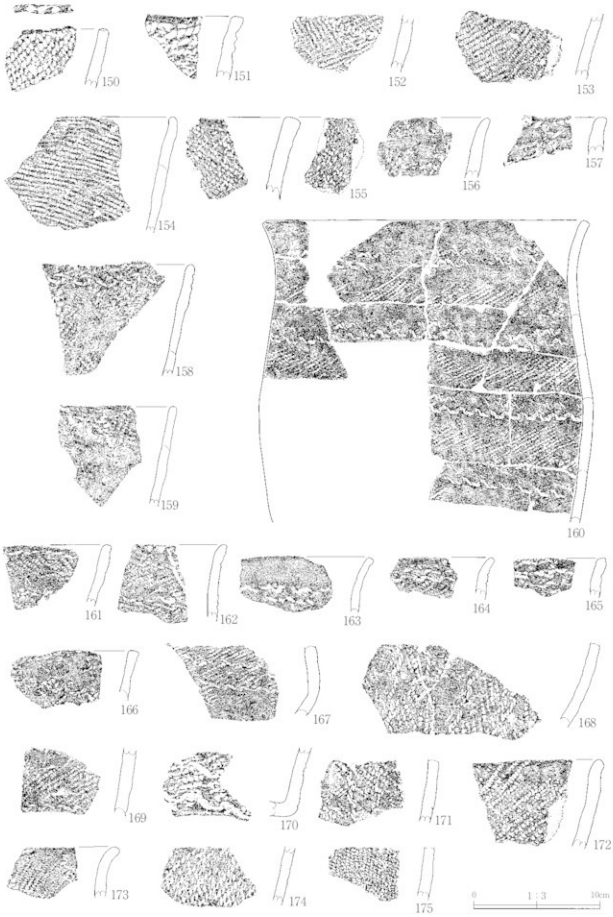




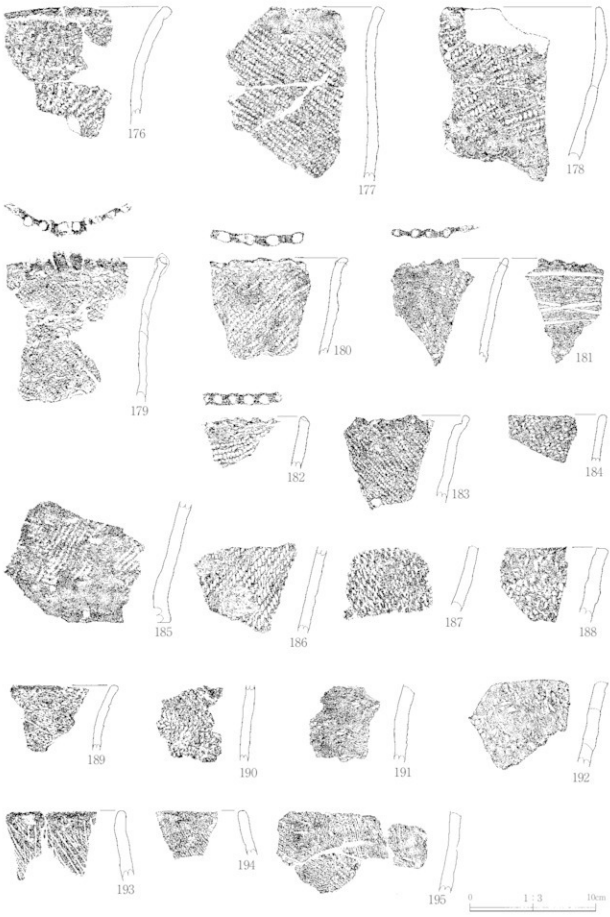


Ⅰ．灰黄褐色シルト（10YR4/2）　粘性弱　しまりやや緩　粒子やや粗　表土。層下位に黄褐色シルトが約５cm層状に堆積（水田の床土？）
Ⅱa．黒褐色シルト（10YR3/1）　粘性強　しまりやや緩　粒子やや粗　耕作土（１層より古い）。炭化物・焼土粒微量含む。
Ⅱb．暗褐色シルト（10YR3/4）　粘性やや強　しまりやや緩　粒子やや粗　耕作土。土質はⅡa層土に類似するが、Ⅱa層より明るめ。
Ⅲ．黒色シルト（10YR2/1）　粘性やや強　しまりやや緩　粒子やや粗　炭化物微量、礫少量含む。古代の遺構埋土に類似。ただしこの層から出土する遺物はほとんど縄文時代。
Ⅳ．暗褐色シルト（10YR3/3）　粘性やや強　しまりやや強　粒子細　炭化物微量含む。縄文時代の遺構埋土に類似するが、各層中にはほとんど遺物の混入が見受けられない。
Ⅴ．明黄褐色砂質シルト（10YR6/8）　粘性弱　しまりやや緩　粒子粗　地山。層状上面で遺構を検出した。径10～30cmの角礫が少量混入。

第37図　包含層

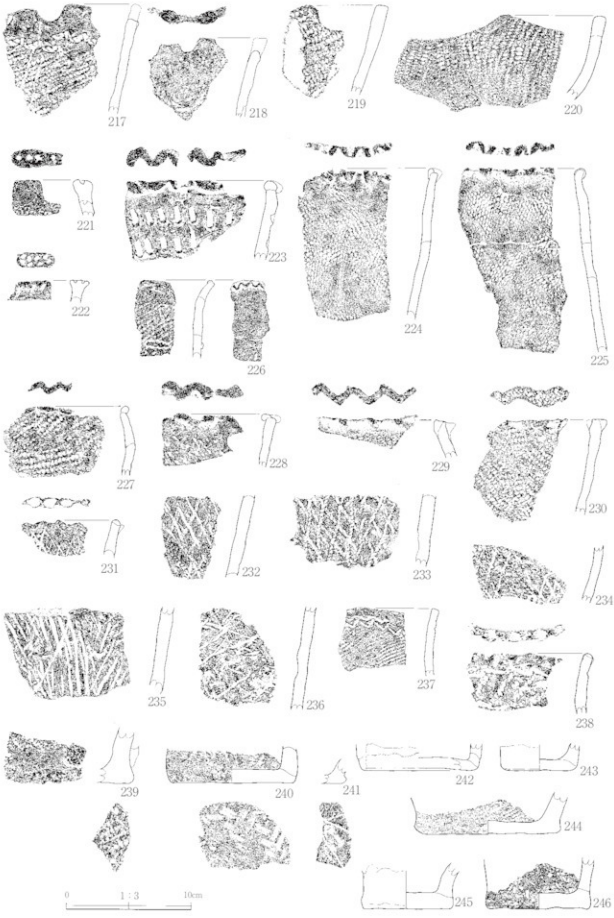


第 38 図　遺構外出土遺物（縄文時代）1



第 39 図　遺構外出土遺物（縄文時代）2

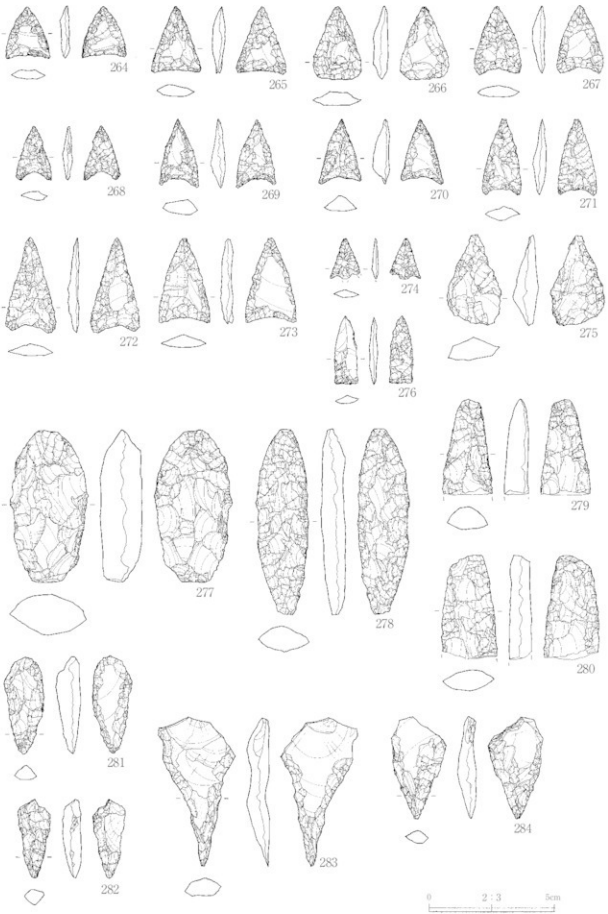
第 40 図　遺構外出土遺物（縄文時代）3



第 41 図　遺構外出土遺物（縄文時代）4

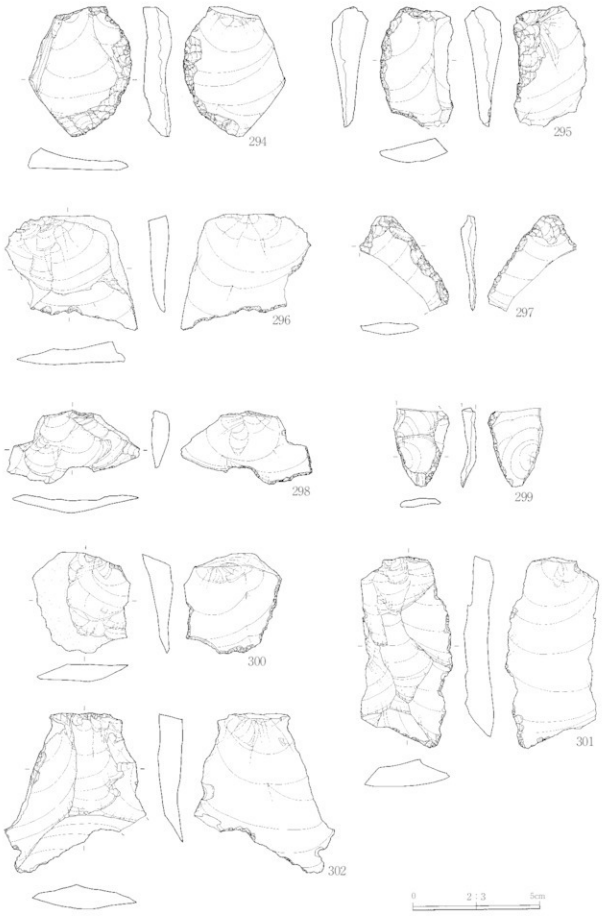
第 42 図　遺構外出土遺物（縄文時代）5

一端を鋭利に作出するが、281・282 のように錐としては幅広のままのものも見受けられる。283 も錐部の形態がやや歪である。285 ～ 288 は石匙である。285・286 は縦型、287・288 は横型で、289 は斜型で刃部は縦に長い。290 ～ 295 は不定形石器である。290・291・293 は縁辺部全周を両面から二次加工を施しており、形態も左右対称に整えられている。293 はあまり見ない形態である。292・294・295 は素材となるフレイクの縁辺部の一部にのみ二次加工を施し、刃部を作出している。296 ～ 302 はＵフレイクと判断した。いずれもフレイクの縁辺の一部に微細剥離が連続している。303 ～ 307 はリタッチドフレイクとした。フレイクの最終剥離面に不連続あるいは不規則な二次加工が施されるものである。304 や 305 の二次加工は刃部を作出しているようにも見受けられるが、不定形石器と比較すると、刃部とは言い切れない。308 ～ 310 はフレイクである。311 ～ 317 は敲磨器類である。磨痕・

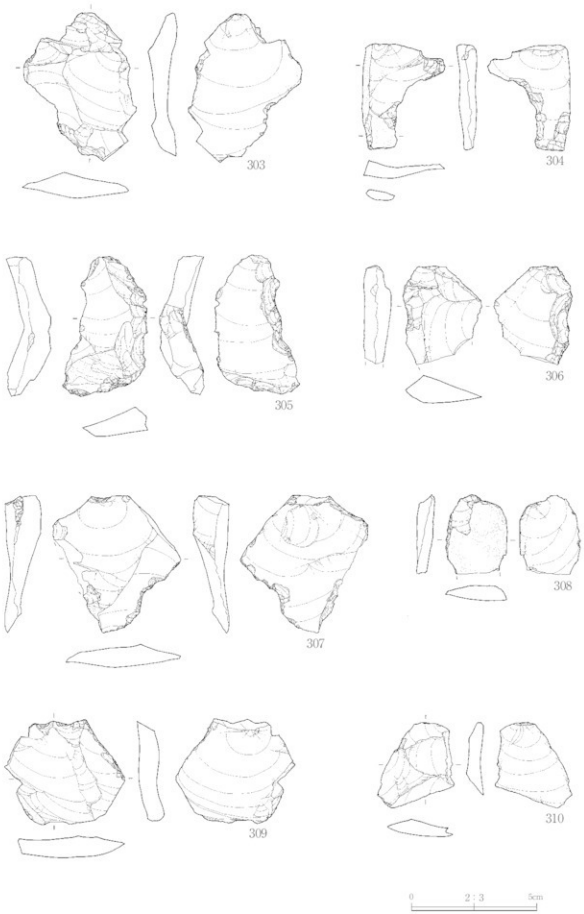


第 43 図　遺構外出土遺物（縄文時代）6

第 44 図　遺構外出土遺物（縄文時代）7

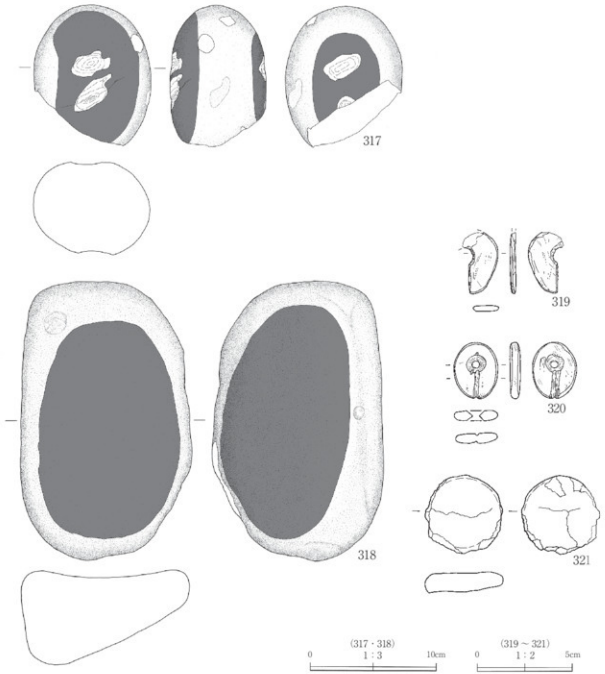


第 45 図　遺構外出土遺物（縄文時代）8



第 46 図　遺構外出土遺物（縄文時代）9

第 47 図　遺構外出土遺物（縄文時代）10



第 48 図　遺構外出土遺物（縄文時代）11

敲打痕が認められるものが多い。318 は石皿である。大型の礫の一面のみを使用し、その裏面は自然面のままである。そのため、石皿にしては形態が歪である。

319・320 は玦状耳飾りである。出土位置からみて 1 号住居跡からの流れ込みの可能性が高い。320 は製作途中の玦状耳飾りで、穿孔はされているが、溝は途中である。321 は石製円盤である。

第５表　遺物観察表（縄文時代）
縄文土器

掲載番号	図版番号	写図番号	出土地点・層位	器種	残存部位	外面文様	内面文様・調整	外面色調 内面色調	焼成	胎土混入物	土器型式	煤コゲ	備考
1	10	31	1号住居 床直	深鉢	口～胴上1/2	唇:3個の台状突起 円形刺突文 口:無文 頸:隆帯(＋円形刺突文) 胴:横位の結節回転縄文(RL)→隆帯(＋円形刺突文)による渦巻文	口:隆帯(＋円形刺突文)による波状文 口～胴:ナデ	浅黄橙 橙	不良	砂(多)	大木5a	無し	
2	10	31	1号住居 埋土下位	深鉢	口縁部片	口:無文	ナデ	灰黄褐 明黄褐	やや不良	白・長	大木4～5a	無し	
3	10	31	1号住居 埋土下位	深鉢	胴部片	胴:縦位の結節回転縄文(RL)→円形刺突文＋貼付隆帯(横位直線・円文)	ナデ	にぶい褐 にぶい赤褐	やや不良	砂・白	大木5a	無し	
4	10	31	1号住居 埋土下位	深鉢	口縁部片	唇:貼付隆帯(波状文・S字状文) 口:無文	ケズリ→ナデ	灰黄褐 にぶい黄橙	不良	白(微)・長	大木4～5a	無し	
5	10	31	1号住居 埋土中	深鉢	胴部片	胴:縄文(LR縦？)→貼付隆帯による波状文	ナデ？	黒褐 黒褐	不良	砂・長	大木5a？	無し	
6	10	31	1号住居 埋土下位	深鉢	口～胴上	唇:台状突起(欠損) 口～胴:縄文(LR縦)→貼付隆帯による梯子状文	ナデ	灰黄褐 にぶい褐	不良	白・長(微)	大木4～5a	内外面胴部	
7	10	32	1号住居 埋土下位	深鉢	口～胴部片	唇:竹管状工具による刺突文 口～胴:縄文(LR縦・横 擬似的に網目状に見せている？)	ナデ	褐 褐	不良	砂・長(微)	大木5a	無し	
9	11	31	1号住居 埋土下位	深鉢	口～胴下2/3	唇:工具による押圧で山形を形成・上面波状の突起(沈線伴う) 口～胴:斜位の単軸絡条体1類(R 軸は縄？)	ナデ	橙 灰黄褐	やや不良	砂・雲(微)	大木5a	内面胴部	
10	11	31	1号住居 埋土下位	深鉢	口～胴下2/3	唇:工具による押圧で山形を形成 口～胴:縄文(RL縦 結節部残存)	ナデ	橙 黒褐	不良	白・長(微)	大木5a？	外面胴部	
11	11	31	1号住居 埋土下位	深鉢	胴～底部1/3	胴:無文 底:指頭による整形痕	ナデ	明赤褐 明赤褐	不良	砂(多)・長	前期後葉	無し	
12	12	32	1号住居 埋土下位	深鉢	口～胴部1/4	唇:内外面から押圧 口～胴:縄文(LR横 口縁部に結節部残存)	ケズリ→ナデ	黒褐 にぶい褐	不良	砂(多)・長(多)	前期後葉	外面口～胴 内面胴	
13	12	32	1号住居 埋土上位	深鉢	口～胴部片	唇:棒状工具による押圧 口～胴:縄文(RL横 結節部残存)	指頭による整形→ナデ	にぶい黄褐 明黄褐	やや不良	砂・雲(微)	前期後葉	無し	
14	12	32	1号住居 埋土下位	深鉢	口縁部片	口～胴:縄文(LR横)	ナデ	赤褐 明赤褐	良好	砂(多)・白(微)	前期後葉	無し	
15	12	32	1号住居 埋土下位	深鉢	口縁部片	口:縦位にケズリ→縄文(LR横・斜)	ナデ	にぶい褐 にぶい橙	やや不良	砂	前期後葉	無し	
16	12	32	1号住居 埋土上位	深鉢	口縁部片	唇:口縁部を肥厚させ、波状の突起 口～胴:0段多条(RL横・結節部残存)	ナデ	黒褐 黒褐	不良	砂・長(微)	前期後葉	外面口縁	
17	12	32	1号住居 埋土中	深鉢	胴部片	胴:縄文(LR縦・斜)	ナデ	明赤褐 明赤褐	不良	砂(多)・雲(微)	中期？	無し	
18	12	32	1号住居 埋土下位	深鉢	口縁部片	口:横位の結節回転縄文(LR)	ナデ	にぶい黄橙 にぶい黄橙	良好	砂(多)・雲(微)	前期後葉	無し	
19	12	32	1号住居 埋土下位	深鉢	口～胴部片	口～胴:横位の結節回転縄文(LR)	指頭による整形→ナデ	にぶい褐 橙	良好	砂(多)・雲(多)	前期後葉	無し	
20	12	32	1号住居 埋土下位	深鉢	口～胴部片	口～胴:多軸絡条体	ナデ	赤褐 赤褐	不良	砂(多)・白(微)	大木5a？	無し	21と同一個体
21	12	32	1号住居 埋土下位	深鉢	口～胴部片	口～胴:多軸絡条体	ナデ	赤褐 赤褐	不良	砂(多)・白(微)	大木5a？	無し	20と同一個体
22	12	32	1号住居 埋土下位	深鉢	口縁部片	口～胴:横位の結節回転縄文(LR)	指頭による整形→ナデ	黒褐 にぶい黄橙	不良	砂(微)・雲(多)	前期後葉	無し	
23	12	32	1号住居 埋土下位	深鉢	胴部片	胴:単軸絡条体5類(L)	ナデ	橙 明赤褐	良好	白(微)・雲(微)	前期後葉	無し	
24	13	33	1号住居 埋土下位	深鉢	口～胴1/3	口:隆帯による区画文・円文 胴:縄文(RLR)→隆帯による渦巻文・区画文	ナデ	橙 橙	良好	砂	大木8b～大木9	無し	
25	13	33	1号住居 埋土上位	深鉢	口～胴部1/2	口:無文 胴上:隆帯＋刺突文 胴下:縄文(RL斜)→隆帯による渦巻文	ナデ	黒褐 黒褐	不良	砂	大木8b(新)	無し	
26	13	33	1号住居 埋土中	深鉢	胴部片	胴:縄文(RL斜)→沈線文(渦巻文)	ナデ	にぶい黄褐 にぶい黄橙	不良	白(微)	大木8b(新)	内面胴部	
27	13	33	1号住居 埋土中	深鉢	胴部片	縄文(RL縦)→沈線文(渦巻文)	ナデ	にぶい黄褐 にぶい黄褐	不良	白(微)	大木8b(新)	無し	
28	13	33	1号住居 埋土下位	深鉢	胴部片	胴:縄文(RLR縦)→沈線文(渦巻文)	ナデ	にぶい褐 灰褐	良好	砂	大木8b(新)	無し	
29	13	33	1号住居 埋土中	深鉢	胴部上半1/3	胴:縄文(RL縦)→隆帯による渦巻文	ナデ	黒褐 黒褐	不良	砂(微)	大木8b(新)	内面胴部	
30	13	33	1号住居 埋土中	深鉢	胴部片	胴:縄文(RL縦)→隆帯	ナデ	明赤褐 橙	良好	砂	大木8b(新)	無し	
31	13	33	1号住居 埋土中	深鉢	胴部片	胴:沈線文	ナデ	橙 橙	やや良好	砂(多)・長(微)	中期？	無し	
32	13	33	1号住居 埋土上位	深鉢	胴部片	胴:縄文(RL横)→沈線文(渦巻文)	ナデ	褐 黒褐	不良	砂・長(微)	大木8b(新)	内面胴部	
33	13	33	1号住居 埋土下位	深鉢	胴下片	胴:縄文(LR縦)→沈線	ナデ	橙 にぶい黄褐	不良	白(微)・雲(微)	中期？	無し	
78	19	33	2号住居 埋土上位	深鉢	口～胴部片	唇:鋸歯状隆帯(＋沈線)口:横位に沈線、波状沈線(3条) 胴:縦位に波状沈線(器面全体)	ナデ	にぶい黄褐 明黄褐	やや良好	砂	大木5a	無し	
79	19	33	2号住居 床面上	深鉢	口～胴部片	口:横位に波状沈線(2条) 口～胴:縦位に波状沈線(器面全体)	ナデ	橙 橙	不良	砂・長	大木5a	無し	
80	19	33	2号住居 床面上	深鉢	口～胴部片	口:横位に波状沈線(2条？) 口～胴:縦位に波状沈線(器面全体)	ナデ	灰黄褐 橙	やや不良	砂・長	大木5a	無し	
81	19	33	2号住居 床面上	深鉢	口縁部片(断片)	口:突起・鋸歯状の貼付隆帯(＋沈線)	ナデ	黒褐 にぶい褐	やや良好	砂・雲	大木5a	無し	
82	19	33	2号住居 床面上	深鉢	口縁部片(断片)	口:縦位に鋸歯状の貼付隆帯(＋沈線)	ナデ	黒褐 にぶい褐	やや良好	砂・雲	大木5a	無し	
83	19	33	2号住居 埋土下位	深鉢	胴部片	胴:単軸絡条体1A類(RL・RL斜)	ナデ	明赤褐 明赤褐	やや良好	砂(多)・雲	前期(大木5？)	無し	
84	19	33	2号住居 埋土上位	深鉢	胴部片	胴:単軸絡条体1類(r)	ナデ	橙 橙	良好	砂(多)・長	前期(大木5？)	無し	
85	19	33	2号住居 埋土下位	深鉢	口～胴部片	口:横S字状隆帯＋横位に隆帯1条 、横位に沈線(3条) 胴:縄文(RL縦)→沈線	ナデ	にぶい褐 にぶい赤褐	不良	砂(多)・雲	大木8a(新)	無し	
86	19	33	2号住居 埋土上位	深鉢	口縁部片	口:隆帯による区画、縄文？(磨滅、LRか)→隆帯 胴:縄文(LR縦)	ナデ	明赤褐 にぶい黄褐	やや不良	砂(多)・雲	大木8a(新)	無し	
87	19	33	2号住居 埋土下位	深鉢	底部片	底部:無文	ナデ？	明赤褐 にぶい黄橙	不良	白・長	前期	底部内面	
91	21	34	3号住居 埋土下位	深鉢	口～胴下	唇:内外に押圧し上面観波状 口～胴:単軸絡条体1類(L)	ナデ	黄橙 にぶい黄橙	不良	砂・雲(微)	大木5a？	無し	

※胎土　砂：砂粒・白：白色粒子・雲：雲母・長：長石

掲載番号	図版番号	写図番号	出土地点・層位	器種	残存部位	外面文様	内面文様・調整	外面色調 内面色調	焼成	胎土混入物	土器型式(時期)	煤コゲ	備考
92	21	34	3号住居 床面上	深鉢	口縁部片	唇:鋸歯状の隆帯(突起)　口～胴:縄文(LR斜・縦)→貼付隆帯による連続山形文(2条単位で横位・縦位)	ナデ	明黄褐 にぶい黄褐	やや不良	白・長	大木5a	無し	
93	21	34	3号住居 埋土下位	深鉢	口縁部片	唇:波状の貼付隆帯　口:貼付隆帯	ナデ	にぶい黄褐 にぶい黄橙	やや不良	白・長	大木5a	無し	
94	21	34	3号住居 埋土下位	深鉢	口縁部片	口:無文、胴部との境に押圧文を施した横位の隆帯　胴:単軸絡条体1類(R縦)	ナデ	橙 橙	良好	砂・雲	大木5a	無し	
95	21	34	3号住居 埋土下位	深鉢	胴部片	胴:羽状縄文(LR・RL横)	ナデ?(全面コゲ付着)	にぶい黄橙 黒褐	不良	白・長	前期?	内外面	
103	24	34	4号住居 埋土中	深鉢	口縁部片	口:波状の隆帯(+沈線)　胴:縄文(LR横)	ナデ	黄橙 橙	やや不良	砂・雲	大木4	無し	
104	24	34	4号住居 1層	深鉢	胴部片	胴:単軸絡条体1類(R)→隆帯による渦巻文	ナデ	黒褐 褐	不良	砂・雲	大木4	無し	
105	24	34	4号住居 埋土中	深鉢	口縁部片	口～胴:縄文(RL横)	ナデ	にぶい黄褐 橙	不良	砂・長	大木5a?	内面	
106	24	34	4号住居 埋土中	深鉢	口縁部片	口～胴:単軸絡条体1A類(R)	ナデ?(内面激しい剥落)	橙 橙	良好	砂	大木4	無し	
107	24	34	4号住居 埋土中	深鉢	胴部片	胴:単軸絡条体3類(r)	ナデ	にぶい褐 橙	やや良好	白・長	大木5a?	無し	
108	24	34	4号住居 1層	深鉢	胴部片	胴:縦位の単軸絡条体1類(L)	ナデ	黄橙 明黄褐	不良	砂(多)・雲	大木5a?	無し	
109	24	34	4号住居 1層	深鉢	胴部片	胴:単軸絡条体5類(RL縦)	ナデ	にぶい黄褐 にぶい褐	やや良好	白・長	大木5a?	外面コゲ	
110	24	34	4号住居 埋土中	深鉢	胴部片	胴:組紐(RL?)	ナデ	赤褐 赤褐	不良	砂	大木5a?	無し	
111	24	34	4号住居 埋土中	深鉢	胴部片	胴:組紐	ナデ?	赤褐 明赤褐	不良	砂・白	大木5a?		
121	27	34	5号住居 床面下	深鉢	口縁部片	口:隆帯による楕円形区画文→縄文原体押圧文(LR)　胴:縄文(LR縦)→隆帯	ナデ	にぶい褐 明赤褐	やや不良	白・雲	大木8a(古)	無し	
122	27	34	5号住居 埋土中	深鉢	口縁部片	口:隆帯　口～胴:縄文(LR斜)→隆帯による渦巻文	ナデ	明褐 にぶい黄橙	やや不良	砂	大木8b(新)	無し	
123	27	34	5号住居 床面下	深鉢	胴部片	胴:縄文(RL横)→隆帯(渦巻文?)	ナデ?(内面激しい剥落)	にぶい黄橙 橙	良好	砂・白	大木8b(新)	無し	
124	27	34	5号住居 埋土中	深鉢	胴部片	胴;縄文(LR?)→隆帯による渦巻文	ナデ	にぶい黄橙 にぶい褐	不良	砂・白	大木8b(新)	無し	
125	27	34	5号住居 埋土中	深鉢	口縁部片 (口唇部欠損)	胴:縄文(RL横)→隆帯による区画・渦巻文	ナデ	明赤褐 橙	良好	白・雲	大木8a～8b-1	無し	
126	27	34	5号住居 埋土中	深鉢	胴部片	胴:縄文(RL斜)→隆帯による渦巻文	ナデ	明赤褐 灰黄褐	不良	砂	大木8b～9	無し	
130	29	34	6号住居 埋土中	深鉢	胴部片	胴:隆帯による渦巻文	ナデ	橙 褐灰	不良	白(微)	大木8b(新)	外面コゲ	
131	29	34	6号住居 埋土中	深鉢	胴部片	胴:隆帯による渦巻文	ナデ	明黄褐 褐灰	不良	白(微)・長(微)	大木8b(新)	無し	
132	29	34	6号住居 埋土中	深鉢	底部片	胴:隆帯	ナデ	橙 にぶい黄橙	やや不良	白(微)	大木8b(新)	無し	
133	30	34	7号住居 埋土中	深鉢	胴部片	胴:単軸絡条体5類(L)	指頭による整形→ナデ	橙 にぶい橙	不良	砂(多)・長	大木5a	外面胴部	
135	35	35	4号土坑 埋土中	深鉢	口～胴下	口:沈線による区画、縄文(LR横?)→沈線によるクランク文　胴:縄文(LR縦)	ナデ	明褐 褐	不良	砂(多)・白(微)	大木8a(新)	無し	
136	35	34	4号土坑 埋土中	深鉢	口縁部片	口:隆帯による区画、隆帯による横位の波状文	ナデ	褐 褐	やや不良	砂・雲	大木8a(新)	内外面	
139	35	35	13号土坑 埋土下位	深鉢	胴部片	胴:縄文(LR横、結節部分残存)	ナデ	にぶい黄橙 にぶい黄褐	不良	砂・長(微)	大木4	無し	
140	35	34	13号土坑 埋土下位	深鉢	口縁部片	唇:貼付隆帯による波状文　口～胴:縄文(LR縦)→貼付隆帯(剥落激しく意匠不明)	ナデ	にぶい橙 橙	不良	白(微)・長(微)	大木4	内面胴部	
141	35	34	13号土坑 埋土下位	深鉢	口縁部片	口:縄文(RLR横)	ナデ	にぶい橙 橙	不良	白・長	前期後葉?	無し	
142	35	35	13号土坑 埋土下位	深鉢	口～胴部片	口:無文　胴上:沈線による鋸歯状文　胴:縄文(LR縦)	ナデ	明黄褐 にぶい黄褐	不良	砂・白	大木5a	無し	
146	36	35	14号土坑 埋土中	深鉢	胴部片	胴:縄文(LR縦)	ナデ	にぶい褐 褐	不良	砂・白	中期(大木8a?)	無し	
147	36	35	15号土坑 埋土中	深鉢	口縁部片	唇:台状突起(刻み)　口～胴:単軸絡条体5類(L)→口縁に沈線伴う隆帯	ナデ	黒褐 にぶい黄橙	不良	砂(多)	大木5a	無し	
148	36	35	15号土坑 埋土中	深鉢	胴部片	胴:縄文(LR横)	ナデ	橙 黒褐	不良	砂・白・繊維(多)	前期前葉	無し	
149	36	35	15号土坑 埋土中	深鉢	胴部片	胴:縄文(LR斜)→2条の隆帯	ナデ	橙 明黄褐	良好	砂・長	中期(大木8a?)	無し	
150	38	35	ⅡB2i Ⅲ層	深鉢	口縁部片	唇:押圧　口～胴:縄文(LR横)	ナデ	浅黄橙 浅黄橙	不良	白(微)・繊維(多)	大木2a	無し	
151	38	35	ⅡB2i Ⅲ層	深鉢	口縁部片	唇:平縁　口:横位の結節回転縄文(LR)	ナデ	灰白 にぶい黄橙	やや良好	砂・繊維(微)	大木2a	無し	
152	38	35	ⅡB2h Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:非結束羽状縄文(LR・RL)	ナデ	浅黄橙 にぶい黄橙	不良	白・長・繊維(多)	大木2a	無し	
153	38	35	ⅡB2h Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:縄文(0段多条LR縦・斜)	ナデ	橙 灰褐	不良	白・長・繊維(微)	大木2a	無し	
154	38	35	ⅡB1h Ⅲ層	深鉢	口縁部片	口～胴:縄文(0段多条RL)	ケズリ→ナデ	にぶい黄褐 にぶい黄橙	不良	白・雲・繊維(多)	大木2a	無し	
155	38	35	ⅡB2j Ⅲ層	深鉢	口縁部片	口:組紐	ナデ	暗赤褐 暗赤褐	不良	砂・雲	前期		
156	38	35	ⅡB6g Ⅴ層上面	深鉢	口縁部片	口:縄文(RL斜)?	ナデ	明赤褐 明赤褐	不良	砂・白・繊維(微)	前期		
157	38	35	ⅡB2i Ⅲ層	深鉢	口縁部片	口:縄文(l横)	ナデ、指頭整形	明赤褐 明赤褐	やや不良	砂	前期		
158	38	35	ⅡB1h Ⅲ層	深鉢	口縁部片	口～胴:横位の結節回転縄文・非結束羽状縄文(RL・LR)	ナデ	にぶい赤褐 橙	良好	砂・雲	大木2b?	無し	
159	38	36	ⅡB2h Ⅲ層	深鉢	口縁部片	口～胴:縄文(LR斜、結節部分残存)	ナデ	橙 にぶい黄橙	良好	砂(多)・雲(微)	前期前葉?	無し	
160	38	36	ⅡA3i Ⅲ層	深鉢	口～胴下1/3	口:無文　胴:横位の結節回転縄文(RL)	ナデ	にぶい橙 橙	良好	砂・白	大木2a～2b	無し	
161	38	35	ⅡB2i Ⅲ層	深鉢	口縁部片	口:横位の結節回転文(LR)	ナデ	灰黄褐 にぶい黄橙	やや良好	砂・長・雲	大木2a		
162	38	36	ⅡB2i Ⅲ層	深鉢	口縁部片	口:刻み・横位の結節回転文(RL)	ナデ	にぶい黄褐 にぶい黄褐	不良	白・雲	大木2a		
163	38	36	ⅡB3h Ⅲ層	深鉢	口縁部片	口:横位の結節回転縄文(RL)	ナデ	橙 明褐	不良	砂・雲	大木2a	無し	
164	38	36	ⅡB2h Ⅲ層	深鉢	口縁部片	口:横位の結節回転縄文(RL)	ナデ	にぶい黄橙 にぶい黄橙	不良	白(微)・雲(微)	大木2a	無し	

掲載番号	図版番号	写図番号	出土地点・層位	器種	残存部位	外面文様	内面文様・調整	外面色調 内面色調	焼成	胎土混入物	土器型式(時期)	煤コゲ	備考
165	38	36	ⅠA4f Ⅴ層上面	深鉢	口縁部片	口:横位の結節回転縄文(LR)	ナデ	にぶい黄橙 橙	やや良好	白(微)・雲(微)	大木2a	無し	
166	38	36	ⅡB4j Ⅲ層	深鉢	口縁部片	口:横位の結節回転縄文(LR)	指頭による整形痕→ナデ	橙 黄橙	不良	白(微)・繊維(微)	大木2a	無し	
167	38	36	ⅡB2j	深鉢	胴部片	胴:横位の結節回転縄文(RL)	ナデ	にぶい黄橙 にぶい黄褐	不良	白(多)・雲	大木2a～2b	無し	
168	38	36	ⅠB6g Ⅱ～Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:縄文(RL縦　結節部残存)	ナデ	にぶい黄褐 明黄褐	不良	砂・長	大木2a～2b	無し	
169	38	36	ⅡB2h Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:縄文(LR横, 結節部分残存)	指頭による整形痕→ナデ	褐灰 にぶい黄橙	不良	砂・白	大木2a～2b	無し	
170	38	36	ⅡB2i Ⅲ層	深鉢	底部片	胴:横位の結節回転縄文(LR)	ナデ	橙 明黄褐	やや不良	砂・白	大木2a～2b		
171	38	36	ⅡB7b Ⅴ層上面	深鉢	胴部片	胴:縦位の結節回転縄文(RL)	ナデ	にぶい黄橙 にぶい黄橙	やや不良	砂・白	大木2a～2b	無し	
172	38	36	ⅡB2h Ⅲ層	深鉢	口縁部片	口～胴:縄文(LR横)	ナデ	にぶい黄橙 にぶい橙	不良	砂・雲(微)	大木2a～2b	無し	
173	38	36	ⅡB3h Ⅲ層	深鉢	口縁部片	口:縄文(RL斜)	ナデ	にぶい褐 明黄褐	良好	白・雲(微)	大木2a～2b	無し	
174	38	36	ⅡB6f Ⅴ層上面	深鉢	胴部片	胴:単軸絡条体1A(R)	ナデ	黒褐 黒褐	不良	白・長(多量)	大木2a～2b		
175	38	36	ⅡA2d Ⅴ層上面	深鉢	胴部片	胴:縄文(LR斜)	ナデ	橙 にぶい黄褐	不良	白(微)・長(微)	前期後葉	無し	
176	39	36	ⅡB2j Ⅲ層	深鉢	口縁部片	口:縄文(LR横)	ケズリ・ナデ	にぶい黄橙 暗褐	不良	砂・雲(多量)	前期		
177	39	36	ⅡB2j Ⅲ層	深鉢	口～胴部片	脣:平縁　口:無文　口～胴:縄文(RL横)	ナデ	にぶい褐 にぶい褐	やや不良	白・雲・長	前期	無し	
178	39	36	ⅡB2j Ⅲ層	深鉢	口～胴部片	脣:平縁　口～胴:縄文(LR斜)	ナデ	にぶい黄褐 にぶい黄橙	不良	白(微)・雲(微)	前期	無し	
179	39	36	ⅡB2j Ⅲ層	深鉢	口～胴部片	脣:平縁　2単位の短い隆帯(突起)→円形の刺突文　口～胴:横位の結節回転縄文(LR)	ミガキ	灰黄褐 にぶい黄褐	不良	砂(多)	大木5a？	無し	
180	39	36	ⅡB2j Ⅲ層	深鉢	口縁部片	脣:緩い波状口縁(棒状工具による押圧文が巡る)　口～胴:縄文(LR横・口縁に結節部が残る)	ケズリ→ナデ	にぶい黄橙 にぶい黄橙	不良	砂・雲(微)	前期	無し	
181	39	36	ⅡB3j Ⅲ層	深鉢	口縁部片	脣:緩い波状口縁(棒状工具による押圧文巡る)　口～胴:縄文(LR横)	ケズリ(太い擦痕あり)	にぶい黄橙 にぶい黄橙	不良	砂(多)・雲(微)	大木4～5	無し	
182	39	36	ⅡB2i Ⅲ層	深鉢	口縁部片	脣:緩い波状口縁(棒状工具による押圧文巡る)　口:縄文(LR縦)	ナデ	灰黄褐 橙	不良	砂(多)・雲(微)	前期	無し	
183	39	36	ⅡB1h Ⅲ層	深鉢	口縁部片	脣:前後にひねり波状文形成　口～胴:縄文(RL横)	ナデ	橙 明黄褐	不良	砂・長	前期後葉	無し	
184	39	36	ⅡB1h Ⅲ層	深鉢	口縁部片	口:組紐	ナデ	明黄褐 明黄褐	不良	白(微)	前期	無し	
185	39	37	ⅡB2j Ⅲ層	深鉢	胴～底片	胴:縄文(RL縦)	指頭による整形痕→ナデ	にぶい橙 にぶい黄橙	不良	白・雲	前期後葉	無し	
186	39	37	ⅡB3h Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:縄文(LR横)	ナデ	にぶい黄橙 にぶい黄橙	やや不良	白・長	前期	無し	
187	39	37	ⅡB4g Ⅴ層上面	深鉢	胴部片	胴:組紐？	ナデ	橙 黒褐	不良	白・長	前期		
188	39	37	ⅡB3j Ⅲ層	深鉢	口縁部片	脣:平縁　口:組紐？	指頭による整形→ナデ	明赤褐 明赤褐	やや不良	砂(多)・白	大木2a～2b	無し	
189	39	37	ⅡB4g Ⅴ層上面	深鉢	口縁部片	口:結節回転縄文(RL)	ナデ	橙 橙	良好	白・雲	前期		
190	39	37	ⅡB4g Ⅴ層上面	深鉢	胴部片	胴:結束羽状縄文(l・r？)	ケズリ→ナデ	にぶい黄橙 浅黄	やや不良	砂・雲(微)	前期？	無し	
191	39	37	ⅡB3j Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:結節回転縄文(l？結節部のみ)	ナデ	にぶい黄褐 灰黄褐	不良	白・雲(微)・繊維(微)	大木2a～2b	無し	
192	39	37	ⅡB3h Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:組紐？	ケズリ→ナデ	にぶい赤褐 明赤褐	不良	砂・白	前期	無し	
193	39	37	ⅡB1h Ⅲ層	深鉢	口縁部片	口～胴:縦位の単軸絡条体1類(R)	指頭による整形痕→ナデ	橙 明黄褐	不良	砂・雲	大木5a	無し	
194	39	37	ⅡB3j Ⅲ層	深鉢	口縁部片	脣:平縁　口:単軸絡条体1A類(R・L斜)	ナデ	明赤褐 赤褐	やや良好	白(微)・雲(微)	前期？	無し	
195	39	37	ⅡB3j Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:単軸絡条体1A(L・R)	指頭による整形→ナデ	赤褐 にぶい赤褐	良好	砂・雲	粗製(前期)		
196	40	37	ⅡB2i Ⅲ層	深鉢	口～胴部1/3	脣:平縁　内面に向け貼付隆帯による波状文(2条)口:無文　胴:縄文(LR横)→貼付隆帯による梯子状文	ナデ→口縁に浅いミガキ	黒褐 黒褐	不良	白・長(多)	大木4		
197	40	37	ⅠB6g Ⅱ～Ⅲ層	深鉢	口～胴部片	脣:刺突　口～胴:単軸絡条体？→貼付隆帯による波状文・円文	ケズリ→ナデ	黒褐 にぶい褐	不良	砂・長	大木4	無し	
198	40	37	ⅡB5g Ⅴ層上面	深鉢	口縁部片	脣:波状の貼付隆帯　口:縄文(LR)→波状・梯子状の貼付隆帯	ナデ	暗褐 明褐	不良	砂・長	大木4		
199	40	37	ⅡB5g Ⅴ層上面	深鉢	口縁部片	脣:波状の貼付隆帯2条　口:縄文(LR)→波状・梯子状の貼付隆帯	ナデ	明黄褐 橙	不良	砂・雲	大木4		
200	40	37	ⅡB2j Ⅲ層	深鉢	口縁部片	脣:鋸歯状の貼付隆帯2条　口:縄文(LR横)	ナデ	黒褐 にぶい黄橙	やや不良	砂・長	大木4		
201	40	37	ⅡB4j Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:縄文(LR横)→貼付隆帯による波状文・刺突伴う隆帯による円文	ナデ	灰黄褐 黒褐	不良	白・雲	大木4	外面隆帯	
202	40	37	ⅠA4g Ⅴ層上面	深鉢	胴部片	胴:縦位の単軸絡条体？→貼付隆帯による連続山形文・波状文	ナデ	にぶい黄褐 にぶい黄橙	不良	白・長(多)	大木4	無し	
203	40	37	ⅡB2h Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:縄文(LR横)→波状隆帯による波状文(2条)	ナデ	にぶい黄橙 にぶい黄橙	不良	白・長	大木4	無し	
204	40	37	ⅠB8g Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:縄文(LR横)→隆帯(＋刺突)による区画・渦巻文	ナデ	にぶい橙 橙	やや良好	砂・長(多)	大木5a	無し	
205	40	37	ⅡB2j Ⅲ層	深鉢	口縁部片	脣:鋸歯状突起(刺突文)　口:縄文(LR横)→隆帯(刺突)	ナデ	黒褐 にぶい黄橙	不良	砂・長・雲	大木5a		
206	40	37	ⅡB1h Ⅲ層	深鉢	口～胴部片	脣:刻み　口～胴:単軸絡条体1類(R)→沈線を伴う隆帯による鋸歯状文(渦巻文)	ナデ	明黄褐 橙	やや良好	砂・長	大木5a	無し	
207	40	37	ⅡB2i Ⅲ層	深鉢	口縁部片	脣:円形突起　口:縄文→隆帯(＋沈線)	ナデ	明赤褐 明赤褐	やや良好	砂(多)	大木4		
208	40	37	ⅠB6g Ⅱ～Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:貼付隆帯(波状？)	ナデ	黒褐 灰褐	不良	白・長	大木5a	無し	
209	40	37	ⅡB6g Ⅴ層上面	深鉢	口縁部片	脣:突起(上向の渦巻文)　口:無文　胴:縄文(LR横)	ケズリ→ナデ	にぶい黄橙 にぶい黄橙	やや不良	白(微)・長(微)	大木4	内面胴部	

掲載番号	図版番号	写図番号	出土地点・層位	器種	残存部位	外面文様	内面文様・調整	外面色調 内面色調	焼成	胎土混入物	土器型式	煤コゲ	備考
210	40	37	ⅡB2i Ⅲ層	深鉢	口縁部片	脣:上面円形の突起　口:縄文(RL縦、結節部分残存)	ナデ	明赤褐 明黄褐	やや良好	砂・雲	大木5a		
211	40	37	ⅡA3i Ⅲ層	深鉢	口縁部片	口:縄文(RL)→波状の貼付隆帯	ナデ	橙 明黄褐	やや不良	砂	大木4		
212	40	37	ⅡB6e Ⅴ層上面	深鉢	口縁部片	口:単軸絡条体1類?(R)→波状の隆帯	ナデ	にぶい黄橙 浅黄	不良	白・長	大木4		
213	40	37	ⅡB2j Ⅲ層	深鉢	口縁部片	口:円形隆帯＋縄文・縄文(LR横)	ナデ	黄橙 明黄褐	不良	砂・雲	大木5a		
214	40	38	ⅡB2j Ⅲ層	深鉢	口縁部片	脣:突起(沈線伴う)、刻み　口:沈線による鋸歯状文(縦)	ナデ	橙 橙	良好	砂・雲	大木5a	無し	
215	40	38	ⅠB9f Ⅲ層	深鉢	胴部片	単軸絡条体4類(l)→刺突文＋隆帯	ナデ？	橙 明褐	不良	砂・雲	大木5a		内面にコゲ
216	40	38	ⅠB8g Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:単軸絡条体1類(R斜)→貼付隆帯による波状文	ナデ	にぶい橙 橙	やや良好	砂・雲	大木5a	無し	
217	41	38	ⅡB2i Ⅲ層	深鉢	口縁部片	脣:隅丸方形の突起　口:横位の結節回転縄文(RL)	ナデ	にぶい黄褐 橙	不良	砂・雲	大木4	無し	
218	41	38	ⅡB2j Ⅲ層	深鉢	口縁部片	脣:二叉の突起　口:無文	ナデ	灰黄褐 にぶい橙	やや不良	砂・雲・白	大木5a？		
219	41	38	ⅡB2h Ⅲ層	深鉢	口縁部片	脣:口縁部肥厚させ台状突起　口～胴:縄文(RL縦)	ナデ	にぶい褐 橙	不良	砂・雲	大木5a？	無し	
220	41	38	ⅡB2h Ⅲ層	深鉢	口縁部片	脣:波状口縁　口～胴:縄文(RL斜)	ナデ	明黄褐 黒褐	不良	砂・長(多)	前期	無し	
221	41	38	ⅡB2j Ⅲ層	深鉢	口縁部片	脣:突起(刺突文)　口:縄文(LR横？)	ナデ？	黒褐 にぶい黄橙	やや良好	砂・長	大木5a？		
222	41	38	ⅡB1h Ⅲ層	深鉢	口縁部突起破片	脣:上面楕円形突起に刺突文充填	ナデ？	にぶい赤褐 にぶい赤褐	良好	白・雲	大木5a	無し	
223	41	38	29号土坑 埋土中	深鉢	口縁部片	脣:貼付隆帯による波状文　口:角張った工具による刺突文	ナデ	黒褐 黒褐	やや不良	砂・長	大木4	無し	
224	41	38	ⅡB2i Ⅲ層	深鉢	口縁部片	脣:隆帯　口:縄文(LR斜)	ナデ	にぶい黄褐 明黄褐	やや良好	白・雲	大木4		
225	41	38	ⅡB2i Ⅲ層	深鉢	口～胴部片	脣:波状の貼付隆帯　口～胴:単軸絡条体？	ナデ	にぶい黄褐 橙	やや不良	白・雲(多)	大木4	無し	
226	41	38	ⅡB2h Ⅲ層	深鉢	口縁部片	口～胴:縄文(LR横　端部に結節部残る)　胴:貼付隆帯	口:貼付隆帯による波状文　口～胴:ナデ	にぶい黄橙 黒褐	不良	白(微)・雲(微)	大木4	無し	
227	41	38	ⅡB2i Ⅲ層	深鉢	口縁部片	脣:隆帯による波状文　口:縄文(LR横・斜)	ナデ	橙 にぶい黄橙	不良	砂・雲	大木5a		
228	41	38	ⅡB2j Ⅲ層	深鉢	口縁部片	脣:隆帯による波状文　口:縄文(LR横)	ナデ	橙 橙	やや不良	砂・雲	大木5a		
229	41	38	ⅠB8g Ⅲ層	深鉢	口縁部片	脣:隆帯による鋸歯状文　口:縄文(RL縦？)	ナデ	橙 橙	良好	砂・白	大木5a	無し	
230	41	38	ⅡB3h Ⅲ層	深鉢	口縁部片	脣:縄文(LR)を施した隆帯(上面波状)　口:縄文(LR縦)　胴:縄文(LR横)	指頭による整形痕→ナデ	橙 黒褐	不良	砂・長	大木5a	無し	
231	41	38	ⅡB1h Ⅲ層	深鉢	口縁部片	脣:押圧　口～胴:単軸絡条体5類(R)	ナデ	褐灰 赤褐	不良	白・長	大木5a	無し	
232	41	38	ⅡB3h Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:単軸絡条体5類(R)	ナデ	橙 黒褐	やや不良	砂・雲	大木5a	無し	
233	41	38	ⅡB2j Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:単軸絡条体5類(L)	ナデ	にぶい橙 にぶい黄橙	不良	白・長(微)	大木5a	無し	
234	41	38	31号土坑 埋土中	深鉢	胴部片	胴:単軸絡条体5類(R)	ナデ	橙 橙	不良	砂	大木5a	無し	
235	41	38	ⅠA4f Ⅴ層上面	深鉢	胴部片	胴:縦位の単軸絡条体1類(R)	ナデ？	橙 浅黄橙	良好	砂(微)・雲(微)	大木5a	無し	
236	41	38	32号土坑 埋土中	深鉢	胴部片	胴:単軸絡条体5類(L)	ナデ	橙 にぶい橙	良好	砂(多)・長	大木5a	無し	
237	41	38	ⅡB2j Ⅲ層	深鉢	口縁部片	脣:平縁　口:横位の結節回転縄文(RL)	ナデ	にぶい橙 橙	良好	砂・白・繊維(微)	前期	無し	
238	41	38	ⅡB2i Ⅲ層	深鉢	口縁部片	脣:押圧　口:縄文(LR横・結節部分残存)	ケズリ→ナデ	橙 にぶい黄橙	良好	砂(多)	前期	無し	
239	41	38	ⅠB8g Ⅲ層	深鉢	底部片	胴下:隆帯　底:網代痕	ナデ	橙 橙	良好	砂・雲	前期?	無し	
240	41	38	ⅡB2h Ⅲ層	深鉢	底部片	胴下:縄文(RL横)　底:網代痕	ケズリ	明赤褐 明赤褐	やや不良	砂・雲	前期	無し	
241	41	38	19・20号土坑	深鉢	底部片	底:木葉痕	不明	褐灰 にぶい黄橙	やや不良	砂(微)・長(微)	前期？	無し	
242	41	38	ⅡB2i Ⅲ層	深鉢	底部片	胴:無文(輪積痕？)	ナデ	明赤褐 明黄褐	やや良好	砂(多)・雲	前期？	無し	
243	41	38	ⅡB3h Ⅲ層	深鉢	底部片	胴:無文	指頭による整形痕→ナデ	にぶい黄橙 にぶい黄橙	不良	砂・長(微)	前期	無し	
244	41	38	ⅡB2j Ⅲ層	深鉢	底部	胴:縄文(RL縦) 底:網代痕	ナデ	明黄褐 にぶい黄橙	やや良好	砂・長	中期？	無し	
245	41	38	ⅠB3b Ⅴ層上面	深鉢	胴～底部1/3	胴:無文　底:網代？(磨滅激しい)	ナデ	明黄褐 明黄褐	不良	砂・長(微)	前期	無し	
246	41	38	ⅡB2h Ⅲ層	深鉢	胴～底部片	胴:縄文(？)　底:ナデ痕	ナデ	明褐 黒褐	やや良好	砂・雲(微)	前期	無し	
247	42	39	ⅡB6g Ⅱ～Ⅲ層	深鉢	口縁～胴上1/3	口～胴:ピッチリ縄文(L)→隆帯による渦巻き文	ケズリ→ナデ	明赤褐 黒褐	やや不良	砂・白	大木8b～9	無し	補修孔2箇所
248	42	39	ⅡB3j Ⅲ層	深鉢	口縁部片	口:2条の沈線による区画　縄文(LR横)→半裁竹管状工具による2条の沈線で横位の波状文	ナデ	にぶい橙 橙	不良	白(微)・雲(微)	大木8a(新)	無し	
249	42	39	ⅠA10j Ⅴ層上面	深鉢	口縁部片	口:縄文(RL横)→隆帯による渦巻文	ナデ	明赤褐 赤褐	やや良好	砂(多)	大木8b(新)	無し	
250	42	39	ⅡB6g Ⅱ～Ⅲ層	深鉢	口縁部片	口～胴:ピッチリ縄文(L)→隆帯による渦巻き文	ケズリ→ナデ	明赤褐 明褐	やや不良	砂・白	大木8b(新)	無し	
251	42	39	ⅡB2j Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:縄文(LR縦)→隆帯による渦巻文	ナデ	橙 にぶい黄橙	不良	砂・雲(微)	大木8b(新)	無し	
252	42	39	ⅠB3g Ⅱ～Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:縄文(LR縦)→隆帯による渦巻文	ナデ	灰褐 明赤褐	不良	砂・白	大木8b(新)	無し	
253	42	39	9号住居 埋土中	深鉢	胴部片	胴:隆帯(渦巻文？)	ナデ	橙 橙	やや不良	砂(多)・白(微)	大木8b(新)	無し	
254	42	39	ⅡB5g Ⅱ～Ⅲ層	深鉢	口～胴上1/4	口:無文　頸:横位の隆帯2条(下部に円形刺突文)　胴:隆帯による区画文	ナデ	黄橙 明黄褐	良好	砂	大木10(新)	無し	
255	42	39	31号土坑 埋土中	深鉢	胴部片	胴:縄文(LR縦)→隆帯(渦巻文？・区画文？)	ナデ	にぶい黄橙 にぶい黄褐	不良	砂	大木8b(新)	無し	
256	42	39	ⅡB2h Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:縄文(LR縦)→隆帯による渦巻き文	ナデ(ミガキに近い)	橙 にぶい黄褐	やや不良	砂・白	大木8b(新)	無し	

掲載番号	図版番号	写図番号	出土地点・層位	器種	残存部位	外面文様	内面文様・調整	外面色調 内面色調	焼成	胎土混入物	土器型式	煤コゲ	備考
257	42	39	ⅡB6g Ⅱ～Ⅲ層	深鉢	口～胴上2/3	口～胴:縄文(RL横)	ナデ	黒褐 黒褐	不良	砂	中期	無し	
258	42	39	ⅡB2i Ⅲ層	深鉢	口縁部片	唇:内外面から押圧(上面観波状)　口:無文　胴:縄文(RL横　結節部残存)	ナデ	橙 橙	やや良好	白・雲	前期後葉	無し	
259	42	39	ⅡA9i Ⅴ層上面	深鉢	胴部片	縄文(LR横)→沈線	ナデ	明黄褐 にぶい黄橙	やや良好	砂・雲	後期？	無し	
260	42	39	ⅡB2i Ⅲ層	深鉢	口縁部片	口:無文　　　胴:縄文(LR斜)	ナデ	橙 橙	やや良好	白・長	中期	無し	
261	42	39	ⅡB3j Ⅲ層	深鉢	口縁部片	唇:平縁　口:折り返し口縁→縄文(LR横)	ナデ	黒褐 黒褐	不良	白・長	中期？	無し	
262	42	39	31号土坑 埋土中	深鉢	胴部片	胴:縄文(LR縦)	ナデ	にぶい黄褐 にぶい褐	不良	砂・長(微)	中期？	無し	
263	42	39	ⅡB6i Ⅱ～Ⅲ層	深鉢	底部片	胴～底:縄文(LR縦)	ナデ	明赤褐 褐	やや不良	砂・白(微)	中期	無し	

土製品

掲載番号	図版番号	写図番号	出土地点層位	器種	残存状況	文様	時期	径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	色調	備考
8	10	31	1号住居 床面上	円盤形土製品	完形	貼付隆帯による波状文・格子状文	大木5a	11.7	1.1	199.3	にぶい黄褐	深鉢胴部片の転用

石器

掲載番号	図版番号	写図番号	出土地点・層位	種別	分類	残存状況	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質(産地)	備考
34	14	40	1号住居 埋土下位	石鏃	凹基無茎	完形	1.55	1.15	0.40	0.45	頁岩 (北上山地)	
35	14	40	1号住居 埋土下位	石鏃	平基無茎	完形	2.25	1.60	0.65	1.44	頁岩 (北上山地)	
36	14	40	1号住居 柱穴(26)内	石鏃	平基無茎	完形	2.70	1.40	0.35	1.16	頁岩 (北上山地)	
37	14	40	1号住居 埋土下位	石鏃	平基無茎	完形	2.30	1.95	0.55	1.75	頁岩 (北上山地)	
38	14	40	1号住居 埋土下位	石鏃	平基無茎	完形	2.75	1.80	0.40	1.27	頁岩 (北上山地)	
39	14	40	1号住居 埋土上位	石鏃	平基無茎	完形	2.70	1.60	0.35	1.18	頁岩 (北上山地)	
40	14	40	1号住居 埋土下位	石鏃	平基無茎	完形	3.15	2.00	0.70	2.71	頁岩 (北上山地)	
41	14	40	1号住居 埋土下位	石鏃	平基無茎	完形	3.50	1.65	0.40	2.10	頁岩 (北上山地)	
42	14	40	1号住居 床直	石鏃	平基無茎	完形	3.55	1.95	0.60	2.87	頁岩 (北上山地)	
43	14	40	1号住居 埋土下位	石鏃	凹基無茎	基部欠損	(3.75)	1.50	0.50	2.18	頁岩 (北上山地)	
44	14	40	1号住居 埋土下位	石鏃	尖基	完形	2.90	1.80	0.75	2.55	頁岩 (北上山地)	
45	14	40	1号住居 埋土下位	石鏃	失敗品	—	(4.10)	1.80	0.85	5.44	頁岩 (北上山地)	
46	14	40	1号住居 壁溝内	石鏃	失敗品	—	3.65	2.70	0.95	7.03	頁岩 (北上山地)	
47	14	40	1号住居 柱穴(34)内	尖頭器	—	先端部1/3残	(4.15)	(1.55)	(0.85)	5.78	頁岩 (北上山地)	
48	14	40	1号住居 埋土下位	石匙	縦型	完形	6.92	1.39	1.00	5.70	頁岩 (北上山地)	
49	14	40	1号住居 埋土下位	石匙	縦型	完形	7.39	1.90	0.75	8.98	頁岩 (北上山地)	
50	14	40	1号住居 埋土上位	石匙	縦型	完形	7.40	3.40	0.95	17.25	頁岩 (北上山地)	
51	14	40	1号住居 埋土上位	石匙	横型	完形	3.49	4.46	0.75	6.47	頁岩 (北上山地)	
52	14	40	1号住居 埋土下位	不定形	Ⅱ	4/5残	5.50	(2.65)	0.95	13.54	頁岩 (北上山地)	
53	15	40	1号住居 検出面上	不定形	Ⅰ	完形	4.95	3.20	1.25	12.22	頁岩 (北上山地)	
54	15	40	1号住居 埋土下位	不定形	Ⅰ	完形	4.90	3.25	1.10	15.82	頁岩 (北上山地)	
55	15	40	1号住居 埋土上位	不定形	Ⅰ	2/3残	(5.65)	(2.95)	1.15	16.88	頁岩 (北上山地)	
56	15	40	1号住居 埋土上位	不定形	Ⅰ	完形	5.75	4.75	1.45	28.17	頁岩 (北上山地)	
57	15	40	1号住居 埋土上位	不定形	Ⅰ	完形	4.40	4.00	1.30	17.67	頁岩 (北上山地)	
58	15	41	1号住居 埋土上位	Rフレイク	Ⅱb	—	5.30	3.75	1.10	19.59	頁岩 (北上山地)	

掲載番号	図版番号	写図番号	出土地点・層位	種別	分類	残存状況	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質(産地)	備考
59	15	41	1号住居埋土上位	Uフレイク	Ⅲb	－	5.45	3.45	0.90	11.38	真岩(北上山地)	
60	15	41	1号住居埋土上位	Rフレイク	Ⅱc	－	(3.60)	3.10	1.50	12.51	真岩(北上山地)	
61	15	41	1号住居ｅ43内	フレイク	Ⅲc	－	4.30	4.10	1.10	17.52	真岩(北上山地)	
62	16	41	1号住居埋土上位	Rフレイク	Ⅰb	－	3.50	3.10	1.05	8.16	真岩(北上山地)	
63	16	41	1号住居Pit26内	フレイク	Ⅱc	－	3.70	3.50	1.05	6.92	真岩(北上山地)	
64	16	41	1号住居埋土下位	フレイク	Ⅰb	－	(3.15)	2.30	0.80	4.26	真岩(北上山地)	
65	16	41	1号住居埋土下位	敲磨器類	Ⅰ	完形	126.98	72.45	46.53	645.99	花崗岩(北上山地)	
66	16	41	1号住居埋土下位	敲磨器類	Ⅰ＋Ⅲ	完形	106.75	95.65	73.32	973.95	花崗岩(北上山地)	
67	16	41	1号住居埋土下位	敲磨器類	Ⅰ＋Ⅲ	完形	183.80	84.27	51.72	1240.94	閃緑岩(北上山地)	
68	17	41	1号住居最上層	磨製石斧	－	刃部欠損	12.30	4.80	2.85	274.51	細粒花崗閃緑岩(北上山地)	
69	17	41	1号住居柱穴(14)内	磨製石斧	－	刃部欠損	11.30	5.30	2.80	255.51	ひん岩(北上山地)	
70	17	41	1号住居埋土上位	磨製石斧	－	完形	8.45	3.90	2.00	114.83	真岩(北上山地)	
71	17	42	1号住居床直	石皿	－	完形	303.00	225.50	71.74	5420.00	花崗岩(北上山地)	
88	19	42	2号住居床直	不定形	Ⅲ	完形	7.00	4.55	1.50	36.21	真岩(北上山地)	
89	19	42	2号住居埋土下位	Rフレイク	Ⅰb	－	(4.30)	3.35	1.00	9.98	真岩(北上山地)	
90	19	42	2号住居埋土下位	敲磨器類	Ⅰ	完形	100.27	71.12	42.34	461.35	花崗岩(北上山地)	
96	21	42	3号住居柱穴(9)内	石鏃	Ⅲ	完形	2.23	1.60	0.60	1.57	真岩(北上山地)	
97	21	42	3号住居南壁直内	石鏃	Ⅲ	完形	3.15	1.50	0.70	3.12	真岩(北上山地)	表面磨滅？
98	21	42	3号住居検出面上	尖頭器	－	先端～体部	6.45	2.85	1.60	30.53	真岩(北上山地)	
99	21	42	3号住居検出面上	尖頭器	－	完形	4.20	1.60	0.90	6.42	真岩(北上山地)	
100	22	42	3号住居南壁溝内	石匙	横型	刃部欠損	5.00	7.41	1.70	31.35	真岩(北上山地)	
101	22	42	3号住居壁溝(西端)	石匙	斜型	完形	2.79	3.70	0.50	3.38	真岩(北上山地)	
102	22	42	3号住居埋土下位	敲磨器類	Ⅰ	完形	100.52	76.04	42.40	457.13	花崗岩(北上山地)	
112	24	42	4号住居1層	石鏃	平基無茎	完形	2.90	1.75	0.50	1.64	真岩(北上山地)	
113	24	42	4号住居1層	石鏃	平基無茎	完形	2.50	1.55	0.50	1.54	真岩(北上山地)	
114	24	42	4号住居埋土下位	石鏃	平基無茎	完形	2.15	1.90	0.60	1.69	真岩(北上山地)	
115	24	42	4号住居1層	石鏃	失敗品	－	(2.15)	(1.85)	0.25	0.77	真岩(北上山地)	
116	24	42	4号住居埋土中	フレイク	Ⅱa	－	5.50	5.40	0.90	19.56	真岩(北上山地)	
117	24	42	4号住居埋土中	フレイク	Ⅲb	－	5.10	(3.50)	1.40	17.83	真岩(北上山地)	
118	24	42	4号住居埋土下位	磨製石斧	－	刃部～体部	(9.20)	4.30	3.15	211.63	凝灰岩(北上山地)	
119	25	43	4号住居埋土上位	敲磨器類	Ⅲ	完形	145.71	75.27	46.86	741.02	花崗閃緑岩(北上山地)	
120	25	43	4号住居埋土中	敲磨器類	Ⅰ＋Ⅲ	完形	95.92	52.06	9.18	72.17	凝灰岩(北上山地)	
127	27	43	5号住居埋土中	石鏃	円脚無茎	体部残存	1.90	(1.10)	0.20	0.28	珪質真岩(北上山地)	
128	27	43	5号住居埋土中	石鏃	凹基無茎	先端欠損	3.15	1.90	0.55	1.84	真岩(北上山地)	アスファルト付着
129	27	43	5号住居床面上	炉石	－	－	121.40	113.81	44.11	780.80	花崗斑岩(北上山地)	
134	30	43	7号住居埋土中	フレイク	Ⅱb	－	(4.55)	3.60	1.10	9.79	真岩(北上山地)	
137	35	43	4号土坑埋土上位	フレイク	Ⅱa	－	(4.15)	3.10	0.80	7.60	真岩(北上山地)	

掲載番号	図版番号	写図番号	出土地点・層位	種別	分類	残存状況	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質(産地)	備考
138	35	43	4号土坑 埋土上位	フレイク	Ⅲb	－	3.65	3.55	1.00	10.18	珪質頁岩 (北上山地)	
143	35	43	13号土坑 底面上	石鏃	凹基無茎	完形	2.35	1.80	0.50	0.89	頁岩 (北上山地)	
144	36	43	7号土坑 埋土中	石鏃	平基無茎	完形	2.90	1.45	0.45	1.31	頁岩 (北上山地)	
145	36	43	7号土坑 埋土中	不定形	Ⅰ	完形	6.90	(5.00)	1.55	39.51	頁岩 (北上山地)	
264	43	43	Ⅱ B2i Ⅱ～Ⅲ層	石鏃	平基無茎	完形	2.10	1.75	0.40	1.24	頁岩 (北上山地)	
265	43	43	Ⅱ B3h Ⅱ～Ⅲ層	石鏃	平基無茎	完形	2.70	2.00	0.55	1.86	頁岩 (北上山地)	
266	43	43	Ⅱ B2h Ⅱ～Ⅲ層	石鏃	平基無茎	完形	2.95	1.95	0.55	2.96	頁岩 (北上山地)	
267	43	43	Ⅰ B9h Ⅱ～Ⅲ層	石鏃	凹基無茎	完形	2.70	1.90	0.50	1.98	頁岩 (北上山地)	
268	43	43	31号土坑 埋土上位	石鏃	凹基無茎	完形	2.15	1.45	0.40	0.72	頁岩 (北上山地)	
269	43	43	Ⅰ A8e Ⅴ層上面	石鏃	凹基無茎	完形	2.75	1.55	0.60	1.71	頁岩 (北上山地)	
270	43	43	Ⅰ A8e Ⅴ層上面	石鏃	凹基無茎	完形	2.60	1.70	0.70	1.70	頁岩 (北上山地)	
271	43	43	Ⅱ B2i Ⅱ～Ⅲ層	石鏃	凹基無茎	完形	3.00	1.55	0.55	1.73	頁岩 (北上山地)	
272	43	43	Ⅱ B2h Ⅱ～Ⅲ層	石鏃	凹基無茎	完形	3.80	2.00	0.57	2.98	頁岩 (北上山地)	
273	43	43	Ⅰ B9h Ⅳ層	石鏃	凹基無茎	完形	3.40	2.00	0.50	2.52	頁岩 (北上山地)	
274	43	43	Ⅰ B8f Ⅱ～Ⅲ層	石鏃	平基有茎	茎部欠損	(1.60)	(1.20)	0.30	0.35	頁岩 (北上山地)	
275	43	43	Ⅱ B2i Ⅱ～Ⅲ層	石鏃	失敗品	－	3.60	2.15	1.05	6.60	頁岩 (北上山地)	
276	43	43	Ⅱ B2i Ⅱ～Ⅲ層	石鏃	平基無茎	完形	2.70	0.90	0.30	0.71	頁岩 (北上山地)	
277	43	43	Ⅱ B3h Ⅱ～Ⅲ層	尖頭器	－	完形	6.10	3.10	1.65	35.22	頁岩 (北上山地)	
278	43	43	Ⅰ B7g Ⅱ～Ⅲ層	尖頭器	－	完形	7.40	2.10	1.00	16.27	頁岩 (北上山地)	
279	43	43	Ⅱ B2j Ⅱ～Ⅲ層	尖頭器	－	1/2欠損	(3.80)	(2.00)	7.27	7.27	頁岩 (北上山地)	
280	43	43	Ⅱ A2g Ⅴ層上面	尖頭器	－	1/2欠損	(4.15)	2.20	0.90	9.95	頁岩 (北上山地)	
281	43	44	Ⅱ B2j Ⅱ～Ⅲ層	石錐	－	完形	3.85	1.60	1.00	5.32	頁岩 (北上山地)	
282	43	44	Ⅱ A5f Ⅴ層上面	石錐	－	完形	3.10	1.30	0.75	2.45	頁岩 (北上山地)	
283	43	44	Ⅱ B2i Ⅳ層	石錐	－	完形	5.95	3.05	0.90	10.14	頁岩 (北上山地)	
284	43	44	1号性格不明 埋土上位	石錐	－	完形	4.06	2.20	0.75	5.84	頁岩 (北上山地)	
285	44	44	Ⅱ A3i Ⅱ～Ⅲ層	石匙	縦型	完形	5.40	2.34	1.00	11.26	頁岩 (北上山地)	
286	44	44	Ⅱ A3i Ⅱ～Ⅲ層	石匙	縦型	完形	4.60	4.80	1.15	16.77	頁岩 (北上山地)	
287	44	44	Ⅱ B2i Ⅳ層	石匙	横型	完形	3.50	5.38	0.81	11.89	頁岩 (北上山地)	
288	44	44	Ⅱ B2j Ⅱ～Ⅲ層	石匙	横型	完形	3.90	5.10	0.95	14.85	頁岩 (北上山地)	
289	44	44	Ⅱ B2j Ⅱ～Ⅲ層	石匙	斜型	完形	7.11	3.15	1.02	18.42	頁岩 (北上山地)	
290	44	44	Ⅱ B2i Ⅱ～Ⅲ層	不定形	Ⅰ	－	4.95	3.20	1.25	20.51	頁岩 (北上山地)	
291	44	44	Ⅱ B2j Ⅱ～Ⅲ層	不定形	Ⅰ	－	7.10	2.70	1.05	17.67	頁岩 (北上山地)	
292	44	44	Ⅱ B3h Ⅱ～Ⅲ層	不定形	Ⅰ	－	3.50	2.45	0.90	7.78	頁岩 (北上山地)	
293	44	44	Ⅰ B10a Ⅴ層上面	不定形	Ⅰ	－	(4.95)	3.10	0.90	13.26	頁岩 (北上山地)	
294	45	44	Ⅱ B2j Ⅱ～Ⅲ層	不定形	Ⅰ	－	5.20	4.10	1.10	19.99	頁岩 (北上山地)	
295	45	44	Ⅱ A3d Ⅳ層	不定形	Ⅰ	－	(4.80)	2.90	1.45	13.52	頁岩 (北上山地)	
296	45	44	Ⅱ B2i Ⅱ～Ⅲ層	Uフレイク	Ⅰb	－	5.20	4.60	1.20	19.37	頁岩 (北上山地)	

掲載番号	図版番号	写図番号	出土地点・層位	種別	分類	残存状況	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質(産地)	備考
297	45	44	30号土坑埋土中	Uフレイク	Ⅲc	－	(3.80)	(3.50)	(0.60)	3.26	真岩(北上山地)	
298	45	44	ⅡB3h Ⅱ～Ⅲ層	Uフレイク	Ⅲb	－	5.25	2.95	0.90	7.58	真岩(北上山地)	
299	45	44	19・20号土坑埋土上位	Uフレイク	Ⅳd	－	(3.10)	(2.20)	(0.60)	3.02	真岩(北上山地)	
300	45	45	ⅡB2j Ⅱ～Ⅲ層	Uフレイク	Ⅰc	－	4.00	3.90	1.30	12.55	真岩(北上山地)	
301	45	45	ⅡB2j Ⅱ～Ⅲ層	Uフレイク	Ⅱc	－	7.60	3.65	1.30	32.96	真岩(北上山地)	
302	45	45	ⅠB9g Ⅱ～Ⅲ層	Rフレイク	Ⅱc	－	6.40	(5.60)	1.10	22.22	真岩(北上山地)	
303	46	45	ⅡB2j Ⅱ～Ⅲ層	Rフレイク	Ⅲc	－	5.90	4.50	1.40	18.79	真岩(北上山地)	
304	46	45	ⅠA9h V層上面	Rフレイク	Ⅰc	－	4.20	3.30	0.80	6.76	真岩(北上山地)	
305	46	45	ⅡB5g Ⅱ～Ⅲ層	Rフレイク	Ⅱc	－	5.60	3.40	1.75	19.33	真岩(北上山地)	
306	46	45	ⅡB3h Ⅱ～Ⅲ層	Rフレイク	Ⅱc	－	(3.90)	3.15	1.10	10.72	真岩(北上山地)	
307	46	45	ⅡB8g Ⅱ～Ⅲ層	Rフレイク	Ⅱc	－	5.50	5.10	1.40	22.01	真岩(北上山地)	
308	46	45	ⅡA2j V層上面	フレイク	Ⅱb	－	(3.15)	2.40	0.70	5.71	真岩(北上山地)	
309	46	45	ⅡB2j Ⅱ～Ⅲ層	フレイク	Ⅱc	－	4.80	4.20	1.30	18.60	真岩(北上山地)	
310	46	45	ⅡB8g Ⅱ～Ⅲ層	フレイク	Ⅱc	－	3.40	3.05	0.80	5.20	真岩(北上山地)	
311	47	45	ⅠB8f Ⅱ～Ⅲ層	敲磨器類	Ⅰ	完形	75.79	68.24	27.20	233.91	閃緑岩(北上山地)	
312	47	45	ⅠB8f Ⅱ～Ⅲ層	敲磨器類	Ⅰ＋Ⅲ	完形	95.98	75.79	45.36	501.99	花崗岩(北上山地)	
313	47	45	ⅡB3h Ⅱ～Ⅲ層	敲磨器類	Ⅰ	完形	150.32	71.71	40.75	738.82	閃緑岩(北上山地)	
314	47	46	出土地点不明	敲磨器類	Ⅰ	完形	164.00	75.77	59.26	1054.19	閃緑岩(北上山地)	
315	47	46	ⅡA7e Ⅳ層	敲磨器類	Ⅰ＋Ⅲ	完形	106.80	100.92	46.78	746.94	花崗岩(北上山地)	
316	47	46	ⅠA6j Ⅳ層	敲磨器類	Ⅰ＋Ⅲ	完形	132.31	74.20	37.52	601.22	細粒花崗閃緑岩(北上山地)	
317	48	46	ⅢB1a Ⅰ～Ⅱ層	敲磨器類	Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ	2/3残存	103.41	92.24	75.14	1000.61	花崗岩(北上山地)	
318	48	46	ⅡA5h Ⅳ層	石皿	－	完形	22.00	13.40	7.40	3100.00	花崗岩(北上山地)	

石製品

掲載番号	図版番号	写図番号	出土地点・層位	器種	残存状況	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	色調	石質(産地)	備考
72	17	41	1号住居床面上	玦状耳飾り	完形	41.87	41.62	5.10	16.85	黄灰	滑石(早池峰山周辺)	
73	17	41	1号住居埋土下位	玦状耳飾り	完形	34.43	30.84	6.58	10.18	暗灰	滑石(早池峰山周辺)	割れた状態で出土。接合した。
74	17	41	1号住居柱(63)内	玦状耳飾り	1/2残存	40.32	(19.76)	5.68	(5.82)	黄褐	滑石(早池峰山周辺)	体部に穿孔1箇所。
75	17	41	1号住居埋土下位	玦状耳飾り	1/2残存	26.27	(8.24)	(5.28)	(1.81)	オリーブ灰(半透明)	滑石(早池峰山周辺)	全体に研磨痕残る。
76	17	41	1号住居床面上	玦状耳飾り	1/2残存	(25.24)	(8.96)	(6.00)	(2.02)	灰	滑石(早池峰山周辺)	体部に穿孔1箇所。
77	17	41	1号住居床面上	玦状耳飾り	1/3残存	(25.44)	(15.33)	(5.36)	(2.98)	灰白	滑石(早池峰山周辺)	わずかに研磨痕残る。
319	48	46	ⅡB6g Ⅱ～Ⅲ層	玦状耳飾り	1/2残存	(32.34)	(18.61)	(3.18)	(2.57)	灰オリーブ	滑石(早池峰山周辺)	全体に研磨痕残る。
320	48	46	ⅠB8g Ⅱ～Ⅲ層	玦状耳飾り(未成品)	完形	29.89	23.36	5.44	5.34	灰	砂岩(北上山地)	穿孔あり。切れ目の作成が途中。
321	48	46	ⅠB4f Ⅱ～Ⅲ層	石製円盤	完形	40.56	40.54	11.76	26.15	明褐	花崗岩(北上山地)	

2 平 安 時 代

（1）竪 穴 住 居 跡

9号住居跡（第 49 ～ 52 図、写真図版 15・47・51）

［位置・検出］調査区東側の尾根中央部、ⅡＡ 8h・8i、ⅡＡ 9h・9i グリッドに跨り位置している。Ⅴ層上面で検出されている。北壁は後世に削平され消失しているが、貼り床されていたため平面形を把握できた。

［その他遺構との重複］18 号土坑、19・20 号土坑に切られており、本遺構が新しい。

［平面形］方形を呈する。　［規模］長軸 614cm・短軸 578cm・深さ 16cm

［床面］床面は大小の凹凸があるが、全体的にほぼ平坦である。中央部から北側半分を中心に、黒褐色シルト混じりの暗褐色シルト・褐色シルトで貼り床が施されている。

［壁］残存する南壁から、壁は外傾している。

［埋土］15 層からなる。主に炭化物、褐色シルトのブロックを含む黒褐色シルトで占められている。東壁際と西壁際の一部に焼土を伴う炭化材が検出されている。堆積状況から人為的に投げ込まれたものと考えられる。埋土の大半は自然堆積の様相を呈している。

［カマド］カマドは東壁中央部、南寄りに設けられている。カマドの構成礫であったと推定されるものが 12 個検出されているが、そのうち原位置を保っている礫は５個である。カマドは床を径 80 × 90cm、深さ４～ 10cm の規模で掘って、扁平な礫をカマドの袖石にして構築されている。カマドは東壁から 20cm 程度離してつくられている。カマドは底面に礫をやや前に開く「コ」の字形に配置し袖部の礫を幾分内傾させて埋置している。構成礫の大きさは長径 29 ～ 35cm・短径 15 ～ 26cm・厚さ９～ 12cm である。燃焼部壁寄りに支脚が３個東西と南に並んで検出されている。支脚は円柱状のものである。燃焼部の焼土は平面形がやや不整な楕円形で、規模が径 38 × 51cm・厚さ５cm である。カマド本体の規模は幅 80cm・長さ 115cm である。長い煙道は検出されていないが、燃焼部から続く壁際が緩やかな立ち上がりを示していることから、煙道の一部であったと推定される。

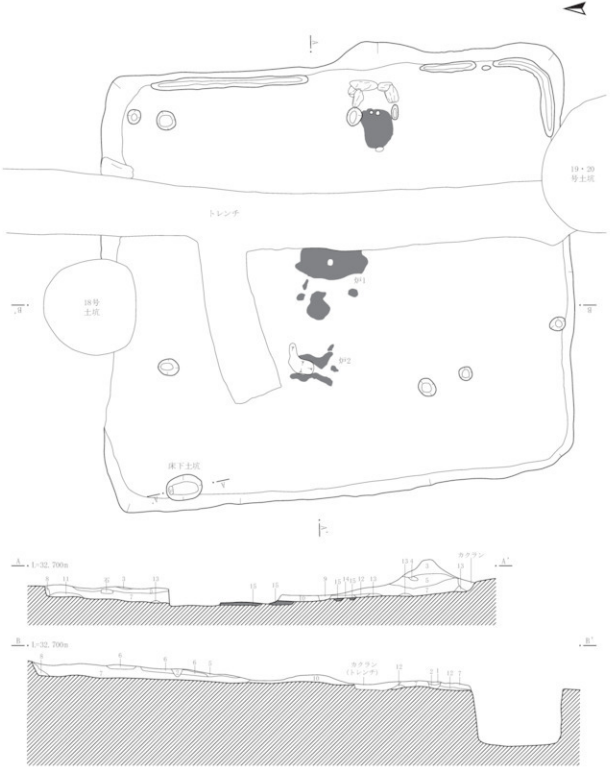
［付属施設］中央部周辺に炉が２基検出されている。炉１は中央部にあり東側が削平を受けている。焼土は形状が不整な楕円形、規模が径 92 × 98cm・厚さ６cm である。炉２は炉１の１m西側にあり一部撹乱を受けている。焼土は形状が不整形、規模が径 52 × 56cm・厚さ３cm である。鍛造剥片等は検出されていない。

柱穴状ピットが 10 個検出されている。規模は径 17 ～ 30cm、深さ６～ 44cm である。位置、規模から主柱穴を構成していたと考えられるものは、南壁中央部西寄りの柱穴（径 22cm、深さ 44cm）、北壁中央部西寄りの柱穴（径 25cm、深さ 30cm）と北東隅の柱穴（径 30cm、深さ 36cm）である。

東壁際にカマドを挟んで両端に壁溝が検出されている。北側のものは、長さ 210cm・幅 10 ～ 12cm・深さ５cm、南側のものは南東隅まで延びていて、長さ 245cm・幅８～ 11cm・深さ７cm の規模である。

北西隅近くの東壁際に、楕円形状の土坑が検出されている。規模は径 56 × 34cm・深さ 46cm である。底部は擂鉢状を呈している。埋土は炭化物、焼土粒を含む黒褐色～暗褐色シルトで占められている。貯蔵穴のような機能をしていたと考えられる。鉄製品が２点出土している。

［出土遺物］出土遺物は土器 1,979.9 g、支脚等の土製品 1,098.5 g、鉄製品２点、鉄滓 190.1 g である。

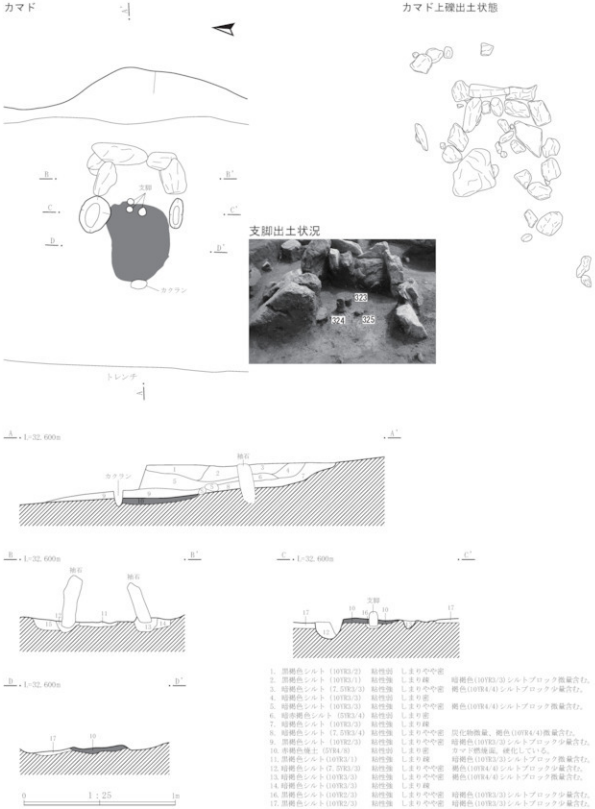


1. 黒褐色シルト（10YR2/3）　粘性弱　しまりやや密　炭化物少量、褐色(10YR4/4)シルトブロック微量含む。
2. 極暗褐色シルト（7.5YR2/3）　粘性やや強　しまりやや密　炭化物微量含む。
3. 黒褐色シルト（10YR2/3）　粘性弱　しまりやや密　炭化物微量、地山ブロック微量含む。
4. 暗褐色シルト（10YR3/3）　粘性弱　しまり　褐色粒
5. 黒褐色シルト（10YR2/2）　粘性やや強　しまり密　炭化物微量、地山ブロック微量含む。
6. にぶい黄褐色シルト（10YR5/4）　粘性弱　しまり密　黒褐色(10YR2/2)シルトブロック少量含む。
7. 黒褐色シルト（10YR3/2）　粘性弱　しまり密　炭化物微量、地山ブロック微量含む。
8. 暗褐色シルト（10YR3/3）　粘性弱　しまり密　炭化物微量、褐色(10YR4/4)シルトブロック少量含む。
9. 黒褐色シルト（7.5YR3/2）　粘性弱　しまり密　炭化物微量、焼土粒微量含む。
10. 極暗褐色シルト（7.5YR2/3）　粘性強　しまり密　炭化物微量、褐色(10YR4/4)シルトブロック微量含む。
11. 極暗褐色シルト（7.5YR2/3）　粘性強　しまり密　炭化物微量、地山ブロック微量含む。
12. 暗褐色シルト（10YR3/3）　粘性やや強　しまり密
13. 暗褐色シルト（10YR3/4）　粘性やや強　しまり密
14. 暗赤褐色シルト（5YR3/4）　粘性弱　しまり密　焼土粒少量含む。
15. 赤褐色焼土（5YR4/8）　粘性弱　しまり密　P1・2埋土

0　1：50　2m

第49図　9号住居跡1

322 は土師器甕形土器の底部片である。胴部内外面はヘラナデで調整されている。底部外面には木葉圧痕がみられる。図版に載せていないが小破片で土師器甕形土器の胴部片・底部片が出土している。胴部片は灰白色の色調で内外面がナデで調整されているものともう一つ橙色の色調で器壁 0.6cm とやや厚く、内外面に輪積み痕が残るナデで調整されたものがある。また底部破片で木葉痕を有するが、

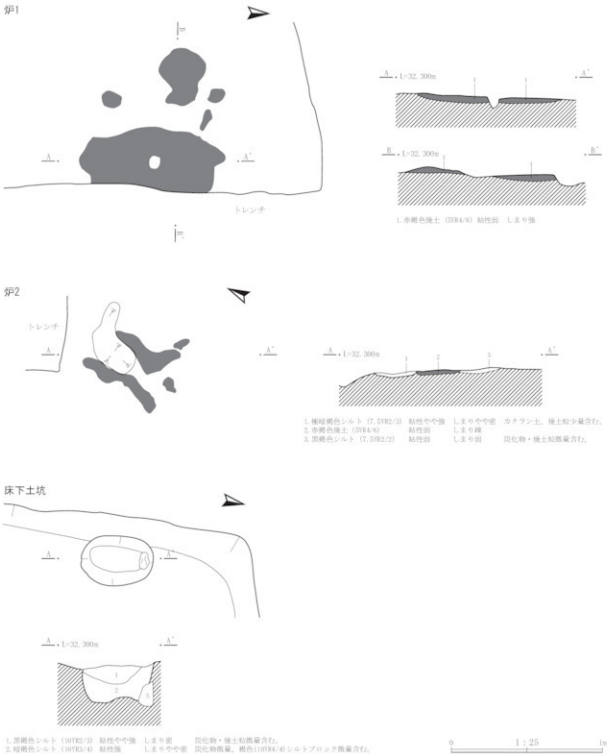


1. 黒褐色シルト（10YR2/2）　粘性弱　しまりやや密
2. 黒褐色シルト（10YR2/1）　粘性強　しまり緩　　暗褐色(10YR3/3)シルトブロック微量含む。
3. 暗褐色シルト（7.5YR3/3）粘性強　しまりやや密　褐色(10YR4/4)シルトブロック少量含む。
4. 暗褐色シルト（10YR3/3）　粘性弱　しまり密
5. 暗褐色シルト（10YR3/3）　粘性強　しまりやや密　褐色(10YR4/4)シルトブロック微量含む。
6. 暗赤褐色シルト（5YR3/4）粘性弱　しまり密
7. 暗褐色シルト（10YR3/3）　粘性強　しまり緩
8. 暗褐色シルト（7.5YR3/4）粘性強　しまりやや密　炭化物微量、褐色(10YR4/4)微量含む。
9. 黒褐色シルト（10YR2/3）　粘性強　しまりやや密　暗褐色(10YR3/3)シルトブロック少量含む。
10. 赤褐色焼土（5YR4/8）　粘性弱　しまり密　　カマド燃焼面、硬化している。
11. 黒褐色シルト(10YR2/1)　粘性強　しまり緩　　暗褐色(10YR3/3)シルトブロック微量含む。
12. 暗褐色シルト(2.5YR3/3)　粘性強　しまりやや密　褐色(10YR4/4)シルトブロック少量含む。
13. 暗褐色シルト(10YR3/3)　粘性強　しまりやや密　褐色(10YR4/4)シルトブロック微量含む。
14. 暗褐色シルト(10YR3/3)　粘性強　しまり緩
15. 黒褐色シルト(10YR2/3)　粘性強　しまりやや密　暗褐色(10YR3/3)シルトブロック少量含む。
16. 黒褐色シルト(10YR2/3)　粘性強　しまりやや密　暗褐色(10YR3/3)シルトブロック少量含む。
17. 黒褐色シルト(10YR2/3)　粘性強　しまりやや密　暗褐色(10YR3/3)シルトブロック少量含む。

第 50 図　9号住居跡 2

底の端部が外に開く逆台形のものも出土している。

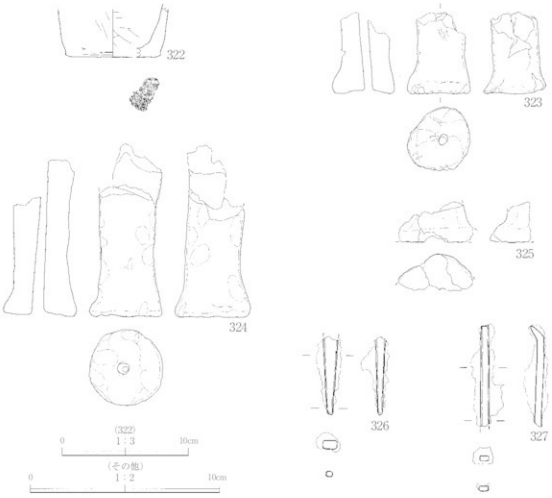
323 ～ 325 はカマドの土製支脚の一部である。3 点とも、円柱状で端部がやや開き、中央に径 0.6 ～ 0.9cm の孔が貫通されているものである。指頭で整形されナデで調整されている。323・324 はカマド燃焼部奥に東西に直線的に並んで据えられていたもので、上半部が欠損している。323 は手前にあるもので、ほぼ燃焼部直上に置かれていた。324 は 4 ～ 5cm 程埋められていた。胴部の太さを比較す



第 51 図　9 号住居跡 3

ると 324 が径 4.4cm、323 が 3.8cm と 323 より一回り大きいタイプのものである。325 はカマド埋土から出土した端部のものである。324 は 21 号土坑出土の破片と接合している。326 は刀子の柄の部分、327 は板状鉄製品である。埋土下位から出土している鉄滓の分析から、鉄滓は鍛冶滓が鍛練鍛冶滓、鉄塊系遺物が鍛打作業前の鍛冶原料であったこと（附編－２）が判明している。

［時期］出土遺物から平安時代中期、10 世紀後半と考えられる。放射性炭素年代測定では 1,120 ± 20yrBP である。暦年較正用年代（1 σ）では 1,056 ～ 1,021calBP）（894 ～ 929calAD）（34.2%）、1,011 ～ 982calBP（939 ～ 978calAD）（34.0%）（附編－１）である。（光井）



第 52 図　９号住居跡出土遺物

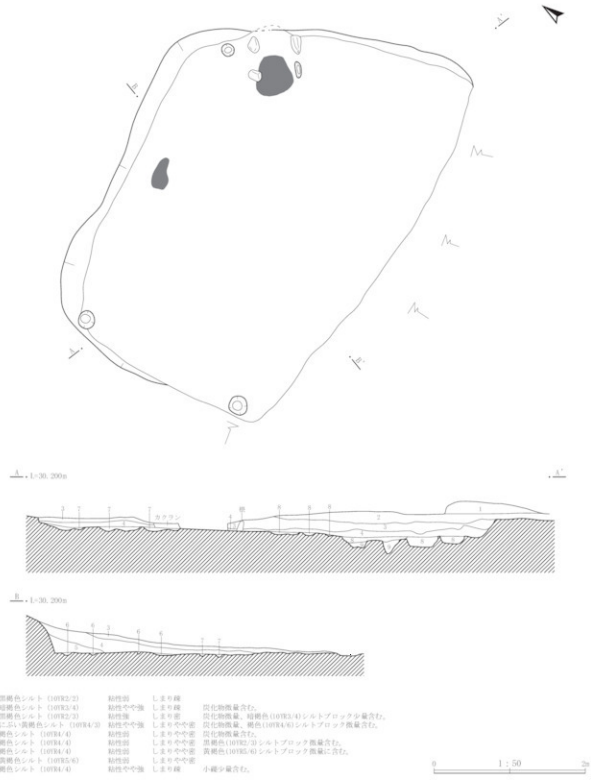
10号住居跡（第53～55図、写真図版16・47・51・52）

［位置・検出］調査区東側尾根の南斜面上位、ⅢＢ1ｃ・1ｄ、ⅢＢ2ｃ・2ｅグリッドに跨り位置している。検出面はⅤ層上面である。斜面下方の南側半分は崩壊し消失している。

［その他の遺構との重複］なし

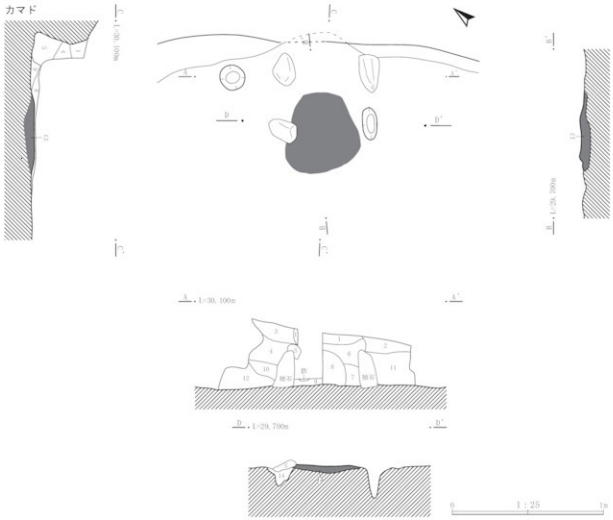
［平面形］不整な方形を呈する。　［規模］長軸442cm・短軸390cm・深さ46cm

［床面］床面は一部礫が突出している部分もあるがほぼ平坦である。本遺構は小礫混じりの褐色シル



第53図　10号住居跡1

ト層を掘り込んでつくられている。床面は褐色～黄褐色シルトで貼り床がほぼ全体に施されている。
［壁］床面より外傾しながら立ち上がり外反している。
［埋土］埋土は５層からなる。主に上半部が炭化物や褐色シルトのブロックを含む黒褐色～暗褐色シルト、下半部が炭化物、褐色シルトのブロックを含むにぶい黄褐色シルトで占められている。埋土は断面の形状が三角状になる堆積の仕方をしており、自然堆積の様相を呈している。
［カマド］カマドは北東壁中央部北寄りに設けられ、扁平な礫を袖石として構築されている。左袖に２個、右袖に１個残存している。壁際の左右の袖石２個が原位置を保っている。また、右袖には袖石の抜きとり痕が検出されている。袖石を３～９cm 程埋め込んでやや内傾させて埋置している。袖石の大きさは径 33 ～ 36cm、幅 15 ～ 23cm、厚さ８～ 15cm である。燃焼部の直上にも細長い扁平な礫を検出されている。天井石または作業用の石として使用されたと推定される。大きさは長径 62cm、短径 40cm、厚さ 10cm である。燃焼部の焼土は不整な楕円形を呈し、径 48 × 51cm、厚さ 5.5cm の



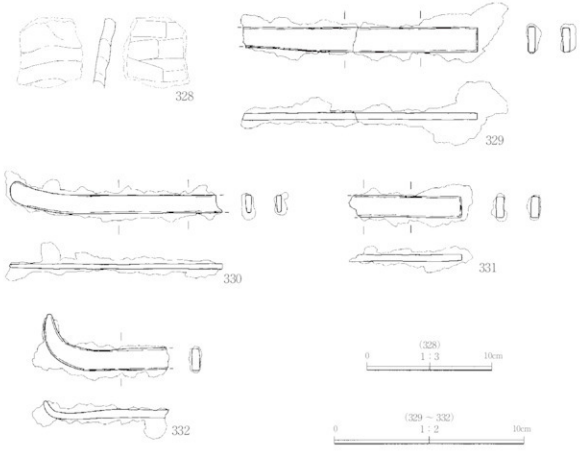
第 54 図　10 号住居跡２

規模である。煙道は床面からオーバーハングしながら立ち上がっている。煙道は検出されてなく、屋外にどのような形で煙を排出していたかはわからない。カマド本体の規模は長径90cm、幅72cmである。

［付属施設］北西壁中央部際に現地性焼土が検出されている。形状は不整な楕円形、規模は径22×43cm、厚さ2cmである。表面はガリガリに堅く硬化し、被熱により明赤褐色に変色している。鍛造剥片等は検出されていない。柱穴が3個検出されている。カマド脇の柱穴は規模が径20cm、深さ22cmである。西隅にある柱穴の規模が径41×46cm、深さ43cmである。南西壁際にある柱穴は規模が径26cm、深さ30cmである。3個は位置・規模から主柱穴を構成していた一部と考えられる。

［出土遺物］土器288.8ｇ、土製品類217.3ｇ、鉄製品3点、鉄滓1,522.5ｇが出土している。328は土師器甕形土器の胴部片である。内外面をヘラナデで調整されている。外面に輪積み痕が顕著にみられるものである。胴部の小破片で図示されていないが、橙色の色調で器壁がやや厚く、内外面がナデ調整で、両面に顕著な輪積み痕が残るものが出土している。329～331はカマド埋土から出土している板状の鉄製品で一部欠損している。330・332は端部が「Ｊ」状に曲がっている。用途については不明である。これら使用して鉄製品を製作していたとも考えられる。鉄滓の分析から、埋土下位から出土している鍛冶炉の小破片が鍛打加工に用いられたもの、椀形鉄滓が精錬鍛冶滓であること（附編－２）が判明した。

［時期］出土遺物から平安時代で10世紀代に属すると考えられる。放射性炭素年代測定は1,130±20yrBPである。暦年較正用年代（1σ）は1,035～983calBP（915～967calAD）（53.2%）（附編－２）である。（光井）



第55図　10号住居跡出土遺物

11 号住居跡（第 56 ～ 60 図、写真図版 17・47・48・50・51）

［位置・検出］調査区西区、南斜面下位、ＩＢ 7ｄ・7ｅ・8ｄ・8ｅグリットに跨り位置している。検出面はⅤ層上面である。斜面下方にあたる南壁側は崩壊して消失している。

［その他の遺構との重複関係］本遺構は 1 号住居跡を切り、31 号土坑に切られていることから、1 号住居跡より新しく、32 号土坑より古い。

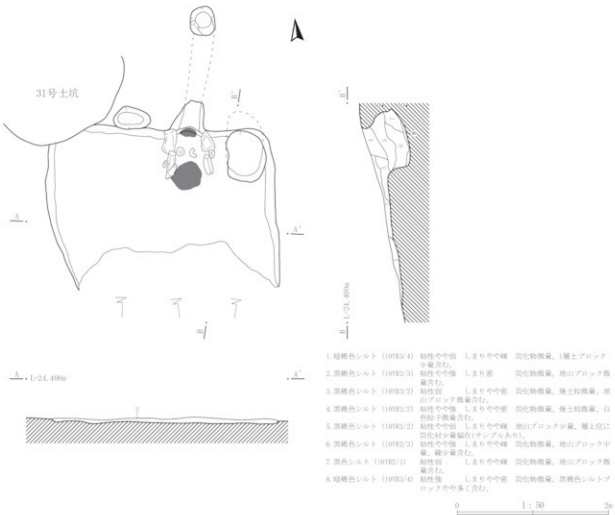
［平面形］方形を呈する。　［規模］305 ×（220）cm

［床面］床面は北壁側に一部凹凸があるが全体としては平らでしまっている。斜面下方側にやや傾斜している。

［壁］残存する北壁から、壁は床面から丸味をもって立ち上がり外反している。最大壁高は北壁で 38cm である。

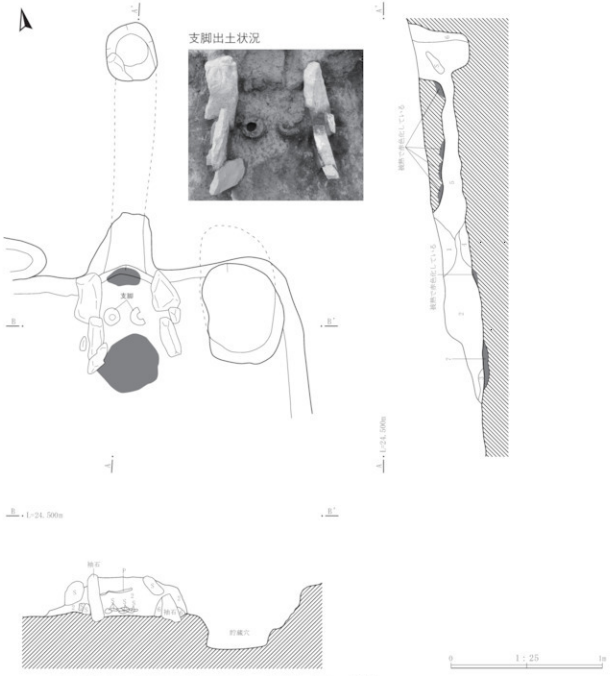
［埋土］壁際にある貯蔵穴を含めた埋土は 7 層からなる。主に炭化物、地山ブロックを含む黒褐色シルトで占められている。埋土は断面が三角状になる堆積をしており、自然堆積の様相を呈している。

［カマド］カマドは北壁中央部東寄りに設けられている。袖石と推定される礫が 6 個検出されているが、原位置を保っているのは袖部の 4 個で、残存状態は良好とはいえない。カマドは長径 24 ～ 31cm、幅 11 ～ 18cm、厚さ 8 ～ 10cm の大きさの扁平な亜角礫を内傾させて埋置し、地山の黄褐色シルトのブロックを多く含む暗褐色シルトで礫間を充填させて構築していたと考えられる。カマド燃焼部の奥近



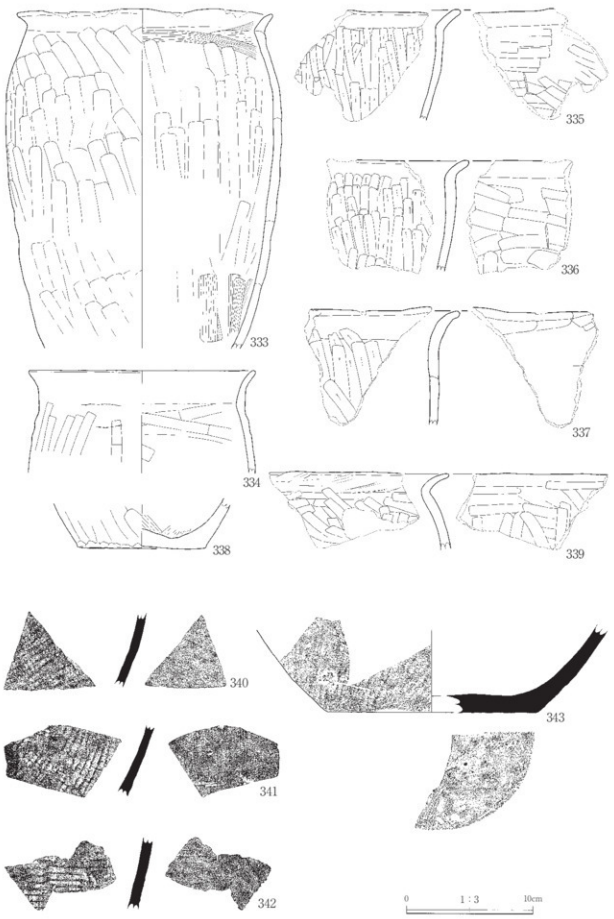
第 56 図　11 号住居跡 1

くに東西に並んで支脚が２個検出されている。燃焼部の焼土は円形状を呈し、径38×36cm、厚さ4cmの規模である。カマド本体の規模は幅75cm、長さ80cmである。煙道は刳り貫き式で、壁際で立ち上がった後、やや下降してから、緩い傾きで上昇し、煙出し口に繋がる。煙出し口は大きさが、径32×38cm、深さ80cmである。長径15～20cmの礫が煙出し口から３個検出されており、一部は煙出し口の上部施設を構成していたものであると推定される。煙道部の規模は幅28cm、長さ162cmである。

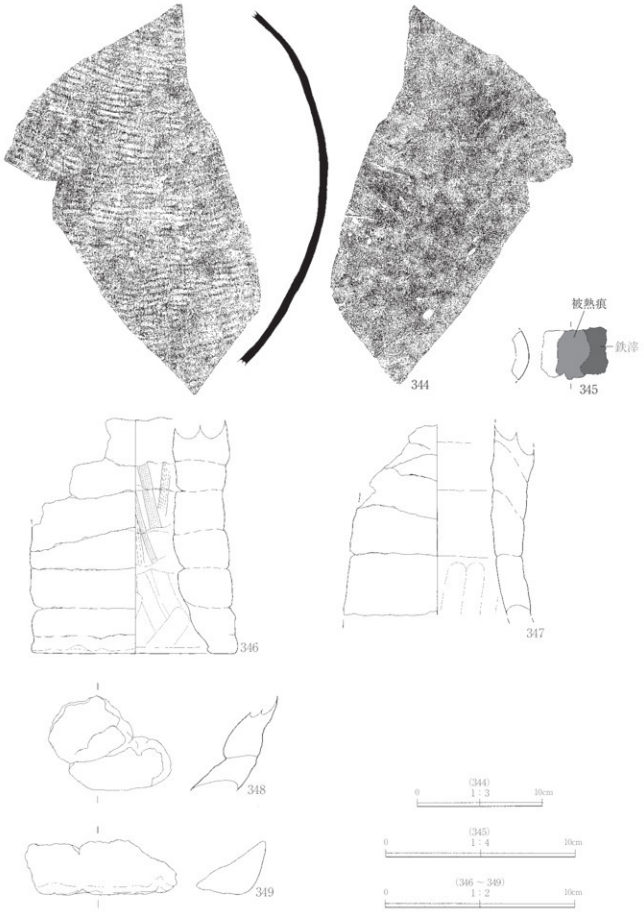


1. にぶい黄橙色シルト（10YR4/3）　粘性やや強　しまり密　　炭化物微量、地山ブロック少量含む。
2. 黒褐色シルト（10YR2/2）　粘性やや弱　しまり疎　　炭化物微量、焼土粒微量、地山ブロック微量含む。
3. 褐色シルト（7.5YR4/6）　粘性やや弱　しまり疎　　炭化物微量、焼土粒やや多く含む。
4. 褐色シルト（10YR4/6）　粘性やや弱　しまり疎　　炭化物微量、地山ブロックやや多く含む。焼成による被熱をわずかに受ける。
5. 黒褐色シルト（10YR3/2）　粘性強　しまりやや緩　焼土、炭化物微量、地山ブロック多量含む。
6. 暗褐色シルト（10YR3/4）　粘性強　しまりやや密　カマド袖構築土か、炭化物微量、地山ブロックやや多く含む。
7. 赤褐色焼土（5YR4/8）　粘性やや弱　しまりやや緩　燃焼温、激しい強度により、変色している。

第57図　11号住居跡2



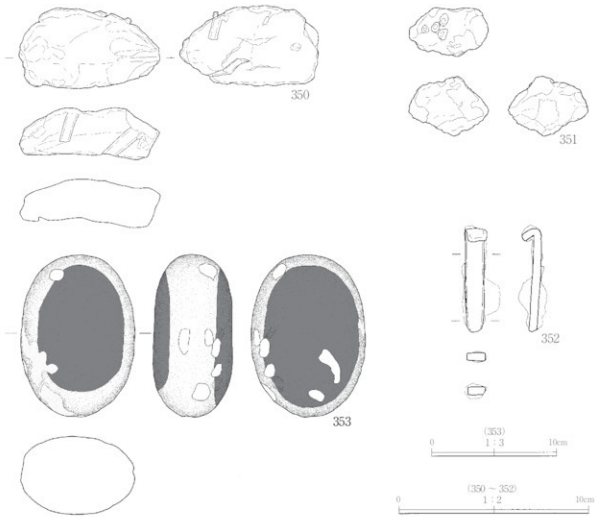
第 58 図　11 号住居跡出土遺物 1



第 59 図　11 号住居跡出土遺物 2

［付属施設］カマド右脇の北東隅から土坑が検出されている。土坑は形状が楕円形を呈し、底部が上げ底気味で、壁は北側がオーバーハングし、南側が外反しているものである。規模は径 68 × 50cm、深さ 60cm である。住居と土坑の埋土の断面と位置から土坑は住居に伴うもので貯蔵穴的機能を果たしていたものと考えられる。柱穴は検出されていない。

［出土遺物］土器 3,470 ｇ、支脚等の土製品 1,770 ｇ、鉄製品 1 点、石製品 1 点が出土した。333 は埋土中位から出土した土師器甕形土器で胴部下半が欠損している。口縁部は短く強く外反し口唇部が歪んで小波状をなしている。口縁部、胴部上半の内面に多くの炭化物が付着している。内外面に輪積み痕がみられる。調整は口縁部がヨコナデ、胴部外面がヘラケズリ、内面がヘラナデである。335 ～ 337 はカマド内の埋土から出土した土師器甕形土器口縁部片である。337 は口縁部が極端に短く緩く外反し口唇部に薄い陵をもつ。335・336 は口縁部が極端に短く外傾し口縁部と胴部が明瞭に分かれている。3 点とも調整は口縁部がヨコナデ、胴部外面がヘラケズリ、内面がヘラナデである。338 は煙出し口の埋土から出土した土師器甕形土器底部片である。外面は胴部がヘラケズリ、底部がヘラケズリ、ヘラナデで調整されている。内面はヘラナデで調整され、中央部が膨らんで凸状になしている。339、334 はカマド右脇の土坑（貯蔵穴）から出土した土師器甕形土器の口縁部片である。339 は口縁部が極端に強く外反している。外面に輪積み痕がある。口唇部が歪んで一部小波状をなす。334 は口



第 60 図　11 号住居跡出土遺物 3

縁部が短く緩く外反している。胴部外面に焦げ状の炭化物が付着している。２点とも口縁部がヨコナデ、胴部外面がヘラケズリ、内面がヘラナデで調整されている。

343は須恵器甕形土器の底部片でカマド埋土下位から出土している。底径は20cm前後のものである。胴部外面をタタキ調整後、下端をヘラケズリ調整、内面をヘラナデ調整が施されている。底部は外面がヘラナデ、内面がヘラナデで調整されている。底部内面に指頭圧痕もみられる。344は須恵器甕形土器の胴部でも肩部当たりのもので、カマド埋土下位から出土している。外面にはタタキ目痕があり、内面はヘラナデで調整されている。340～342は須恵器甕形土器の胴部破片でカマド煙出し口の埋土から出土している。外面には、平行タタキ目痕がみられ、内面はヘラナデで調整されている。346、347はカマドに据えられていた土製支脚で、上半部が欠損している。形態は円筒状で端部が幾分開くものである。内壁も端部が４～５cm外に開き、器壁が下の方にいくにつれて薄くなっている。２点とも輪積み痕が顕著である。内外面はナデで調整せれているが、内面に指頭での整形痕が残る。外径は最大で346が10.8cm、347が9.8cmである。345は埋土下位から出土した羽口の先端部片である。摩耗が激しく内面の器壁が薄くなっている。348・349も土製支脚破片の一部である。350・351は焼成された粘土塊で工具による刺突や刻線を有するものである。用途は不明である。352は板状の鉄製品である。端部が折り曲がっていることから釘の可能性もある。353は磨石で縁辺部に磨痕が多く残っているものである。

［時期］出土遺物から、平安時代中期、10世紀後半から11世紀前半以降に属すると考えられる。放射性炭素年代測定では、980±20yrBPである。歴年較正年代（1σ）は932～905calBP（1018～1045calAD）（40.5%）である。　（光井）

（２）鍛冶工房跡

１号鍛冶工房跡（第61～64図、写真図版18・19・48・50）

［位置・検出］調査区東部尾根南端、ⅡＢ６ａ～８ａ・７ｂグリッドに跨り位置する。検出面はⅣ層上面である。斜面下方の南側は崩壊して消失している。

［その他遺構との重複］なし。

［平面形］方形を呈する。　［規模］長軸556cm・短軸（236）cm

［床面］床面は緩い凹凸があるが全体がしまっている。

［壁］北壁のみが全部残存し、壁は幾分外反しながら立ち上がる。壁高は21cmである。

［埋土］埋土は６層からなる。主に上半部が炭化物、褐色シルトのブロックを含む暗褐色シルト、下半部が炭化物、焼土粒を含む褐色～暗褐色シルトで占められている。炭化材が、北壁際からまとまって16点、北東隅近くで２点検出された。樹種鑑定の結果は、ケヤキ７点、クリ５点、ナラ４点、ホウノキ２点である。北東隅からの２点はホウノキである。それ以外のケヤキ、クリ、ナラは木炭として使われる材種であるとのことから、木炭として利用されていた可能性もある。

［付属施設］炉が５基検出されている。

炉１は中央部にあり、炉２の南側の一部を切ってつくられている。炉１は外形が楕円形で、径74×55cm、内形が達磨形で擂鉢状のものを２つ合わせた「８」の字形を呈し、径40×22cm、深さ８～10cmの規模である。底部の２つの窪みには、椀形滓がびっしり残存していた。２つは同時に使われていたというより多少時間差があり南側が新しいと推定される。炉の断面から、炉は上部が堅く硬化している黒褐色、下部が赤褐色に被熱により変化している。厚さは上部が４cm、下部が６cmである。

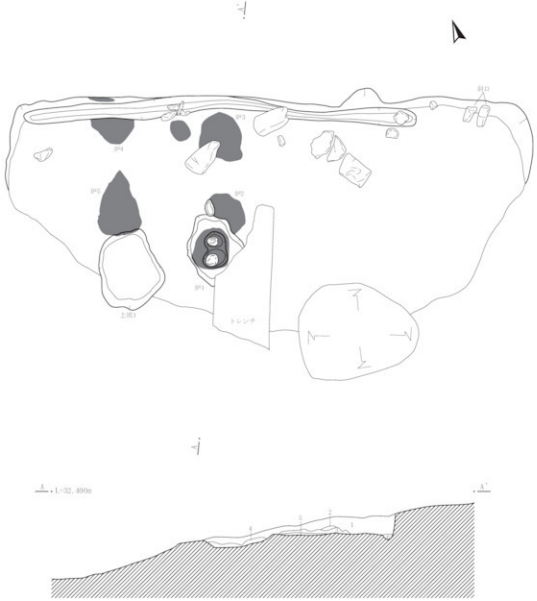
炉の掘り方はない。北側の炉底と南側の炉底から合わせて椀形滓 398.1 ｇが出土された。

炉２は南側の一部が削られているが大部分が残っている。炉１をつくる際に壊されたものと考えられる。残存する焼土から、炉２は平面形が円形で、規模が径 50cm 程度であったと推定される。焼土は表面がガリガリに堅く、厚さが８cm である。

炉３は北壁中央部のやや西寄りの壁際にある。炉の焼土は表面がガリガリに堅く、平面形がほぼ楕円形で、規模が径 48 × 36cm・厚さ 10cm である。

炉４は炉３の西側１ｍの北壁際にある。炉の焼土は平面形が不整な円形で、規模が径 42 × 37cm・厚さ 10cm である。

炉５は中央部西寄りにある。炉の焼土は表面がガリガリに堅く、平面形が南北に長い楕円形で、規



第 61 図　１号鍛冶工房跡１

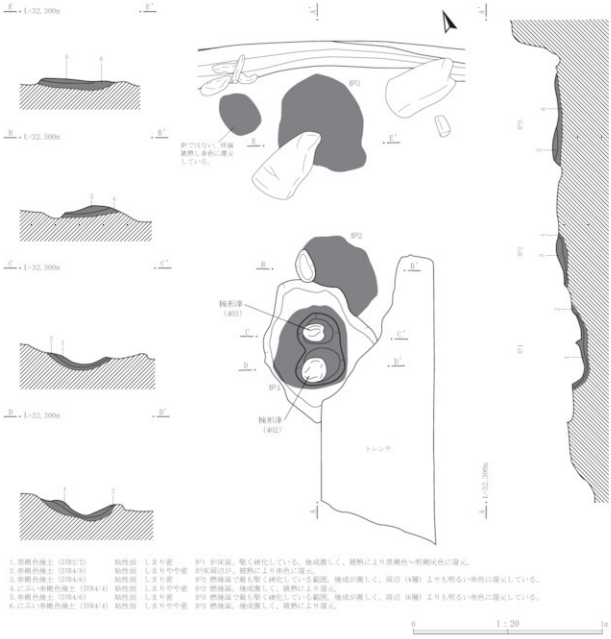
模が径 62 × 38cm・厚さ 12cm である。土坑１の埋土の上につくられている。このことから、炉５は土坑１より新しい。

土坑１は、平面形が楕円形で規模が径 90 × 72cm・深さ 22cm である。底面は壁際が浅くなる浅皿状を呈している。埋土は炭化物、焼土粒を含む褐色シルトで占められている。規模、位置などから炉１のような炉を取り除いた後、作業用にして使われたとも考えられる。

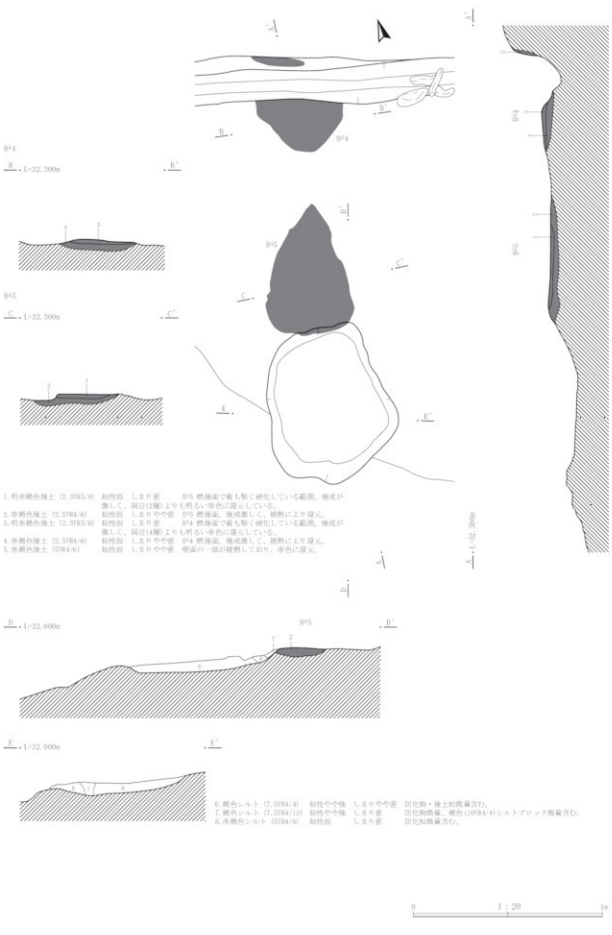
北壁際に壁溝が検出されている。規模は長さ 412cm・幅 16 ～ 25cm・深さ 9 ～ 17cm である。埋土は炭化物を含む黄褐色シルトである。柱穴は検出されていない。

主に炉１・２の周囲から、鍛造剥片が多量に、また粒状剥片が少量検出されている。床面直上から鉄床石が出土し、また、北西隅から並んだ状態で羽口が２個、南西隅から羽口が１個検出している。これらのことから大鍛冶（製練）と小鍛冶の両作業が行われていた鍛冶工房跡であると考えられる。

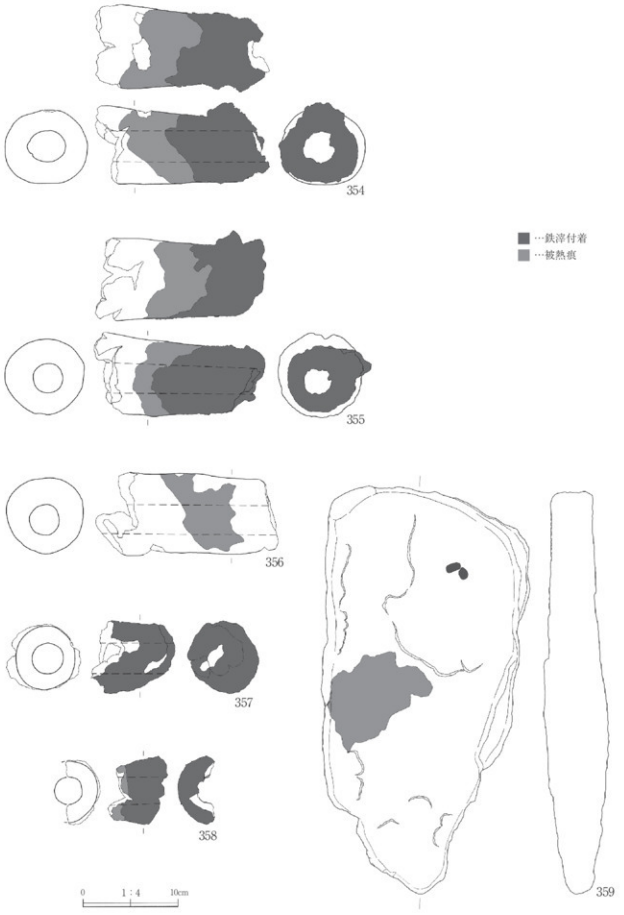
［出土遺物］土器 101.4 g、羽口等の土製品 1,770 g、鉄滓 1,630.8 g、石製品２点、鉄床石４点が出土した。



第 62 図　１号鍛冶工房跡２



第 63 図　1 号鍛冶工房跡 3



第 64 図　1 号鍛冶工房跡出土遺物

図版に載せていないが土師器甕形土器の胴部や底部の小破片が出土している。胴部片は内外面ナデ調整で灰白色のものと、輪積み痕がみられる橙色のものである。底部小破片は木葉圧痕をもつ。羽口が５点出土している。354、355 は北東隅の床面からで先端部を北に向けて２つ並んだ状態で出土している。意識的に置かれていたものと考えられる。両方とも端部は欠損している。356 は南西隅の床面から出土した胴部片である。358 は埋土最下部から出土した先端部破片である。

357 は炉１の埋土から出土したもので４号鍛冶工房跡から出土した羽口と接合している。354 ～ 356 は残存長が 18.1 ～ 19.3cm、外径が 8.3 ～ 8.9cm、内径 3.2 ～ 4.0cm のものである。359 は床面から出土したもので表面に鉄滓痕や叩打痕がみられる鉄床石である。径 42 × 21cm、厚さ 6 cm の扁平な礫である。鉄滓の分析から、床面から出土した鉄滓は椀形鍛冶滓、鍛冶滓は鍛練鍛冶滓である（附編－２）という結果が出ている。

［時期］出土遺物から平安時代で 10 世紀代に属すると考えられる。放射性炭素年代測定では　1,080 ± 20yrBP である。暦年較正用年代（1 σ）は 988 ～ 952calBP（962 ～ 998calAD）（45.0%）（附編－１）である。　（光井）

２号鍛冶工房跡（第 65 図、写真図版 20）

［位置・検出］調査区東端、南斜面上部、ⅡＢ９c・10b・10c グリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出されている。斜面下方の南側は崩壊して消失している。

［その他遺構との重複］なし

［平面形］隅丸方形を呈している。　［規模］長軸 388cm・短軸（190cm）・深さ 24cm

［床面］床面は緩い凹凸があるがしまっており、全体としてはほぼ平坦である。

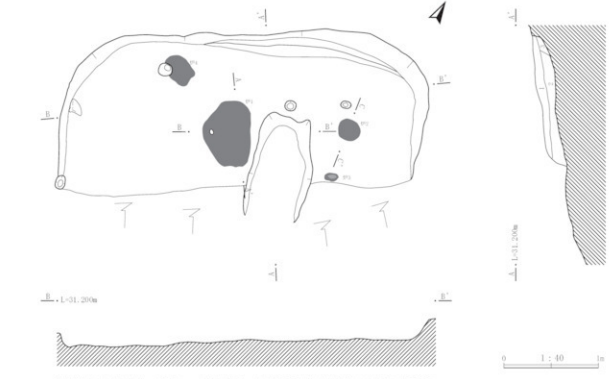
［壁］壁は内湾しながら立ち上がっている。北壁際の南側からは、長さ 180cm・幅 14cm・高さ 6 cm 規模の階段状の段が検出されている。地山を残してつくられている。作業用や出入口に関するものなのか、作り替えした残存部なのかは不明である。

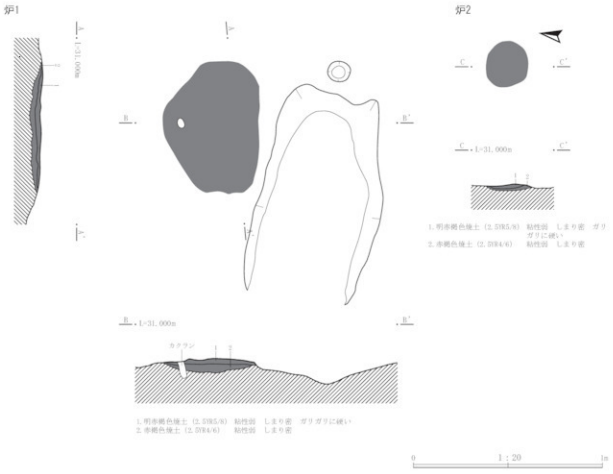
［埋土］埋土は３層からなる。主に炭化物や褐色シルトのブロックを含む黒褐色シルトで占められている。堆積状況から自然堆積と判断した。

［付属施設］炉は４基検出されている。炉１は中央部にあり、表面がガリガリに硬化している。炉の焼土は形状が南北に長い楕円形で、規模が径 74 × 54cm・厚さ 6 cm である。炉２は炉１の東１m にあり、表面が炉１と同じようにガリガリに硬い。炉の焼土は形状がほぼ円形で、規模が径 32 × 28cm・厚さ 4 cm である。炉３は炉２の南側 50cm にあり、斜面下方側にあるため大半が崩壊し消失している。残存する焼土は形状が不整楕円形で、規模が径 13 × 8 cm・厚さ 3 cm である。炉４は北西隅にある。表面はガリガリまでに硬くなっていない。炉の焼土は形状が楕円形で、規模が径 32 × 22cm・厚さ 2 cm である。４つの炉周辺から鍛造剥片等は検出されていない。しかし、特に炉１や炉２のように表面がガリガリに厚く硬くなっていることや遺跡内の１号鍛冶工房等の類例から、小鍛冶の機能をしていたと考えられる。

また、炉１と炉２の間に幅広い溝状の窪みが検出されている。規模は幅 66cm・長さ 110cm・深さ 22cm である。埋土は炭化物、焼土粒が少量含む暗褐色シルトで占められている。位置、形態から作業に関係した遺構でないかとも考えられる。柱穴は４個検出されている。規模は炉２近くのものが（径 14cm・深さ 7 cm）、炉１の北東のものが（径 13cm・深さ 19cm）、炉４と重なるものが（径 12cm・深さ 25cm）、南東壁のものが（径 11cm・深さ 19cm）である。柱穴配置は不明である。

［出土遺物］土器 82.4 g、鉄滓 64.6 g が出土している。図版に載せていないが、土師器甕形土器で口





第65図　2号鍛冶工房跡

縁部が極端に短く外反する小破片が床面から出土している。ヨコナデ後、外面をヘラケズリ、内面ヘラナデ調整されている。鉄滓の分析から、埋土下位から出土している椀形鍛冶滓は鍛練鍛冶滓であること（附編－２）が判明している。

［時期］出土土器から平安時代中期の10世紀後半に属すると考えられる。放射性炭素年代測定では、1,120 ± 20BPである。暦年較正用年代（1 σ）は1,056 ～ 1021calBP（894 ～ 929calAD）（36%）、1,011 ～ 981calBP（939 ～ 969calAD（32.2%）（附編－１）である。（光井）

３号鍛冶工房跡（第66 ～ 69図、写真図版21・22・48・50）

［位置・検出状況］調査区中央の緩斜面上、Ⅰ A8 ～ 10j・Ⅰ B9 ～ 10aグリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出した。斜面下方にあたる本遺構の南西～南側は、斜面の土砂崩れ、ないし近世以降に植林のための削平により消失している。

［他の遺構との重複関係］５号住居跡と重複し、本遺構の方が新しい。

［平面形］隅丸長方形を呈する。

［規模］長軸（324）cm、短軸762cm、深さ55cm

［埋土］24層からなる。１～ 10層は斜面の土砂崩れによる流れ込みの層と考えられ、黒褐色シルトを主体として粒状の炭化物・焼土のほか地山シルトブロックが混入する。11 ～ 24層が本遺構に伴い、その内22層は煙道堆積層、23層はカマド燃焼面、24層は炉３燃焼面に細分される。堆積土は暗褐色シルトを主体とし、粒状の炭化物・焼土のほか地山ブロックが混入する。堆積状況から自然堆積とみられる。

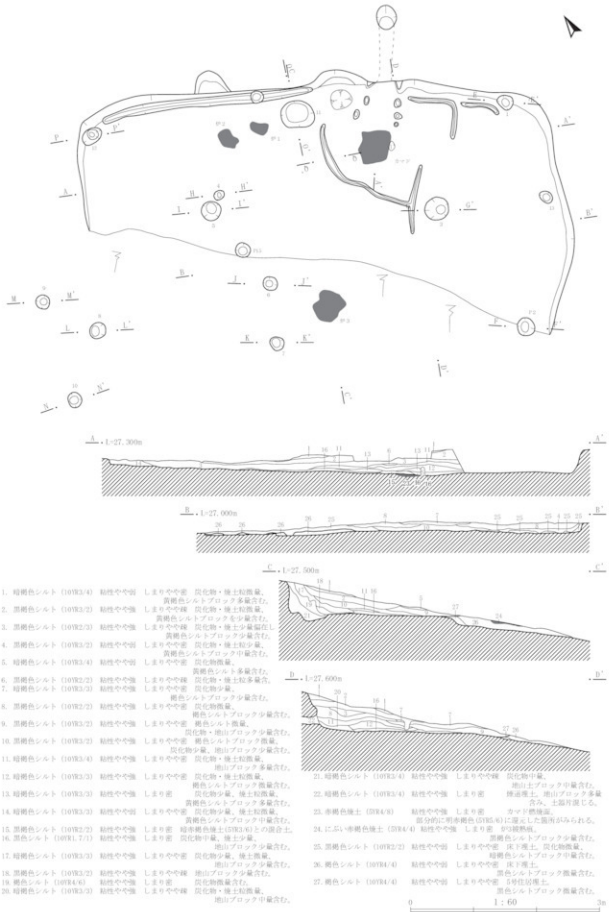
［床面］カマドを検出した面を床面とする。加えて、斜面下方の南側半分は５号住居跡と重複し、この埋土を一部削平するように本工房跡床面の概ね平坦な面が構築されている。

［壁］斜面上方の北壁と、東壁、西壁の北半部の立ち上がりを検出した。若干外へと広がるが、概ね直立気味に立ち上がる。南壁と西壁の南半部の立ち上がりは消失している。

［カマド］北壁に設置され、壁中央からやや東寄りに位置する。燃焼面・両袖の一部・煙道・芯材を設置した痕跡が残存する。燃焼面は50 × 48cmを測り、被熱は強く、４cmほどの赤褐色に還元し表面の硬化は著しい。燃焼面中央から壁面煙道口までは100cmほど離れている。袖は一部地山の削り出しで、東側は長さ20cm、西側は長さ10cm分残存している。またこの両袖の延長線上に、燃焼面にかけて軸を同じくして東側で３基、西側で２基の窪みが検出されている。これらは袖を構築する芯材を設置した痕跡と考えられ、燃焼面の縁辺部に残る芯材には礫が用いられている。煙道は刳り貫き式で天井部が残存し、北壁から斜面上方側へまっすぐ貫いて100cmを測る。そこからほぼ垂直に立ち上がり、上方へ60cmほどを測り開口する。

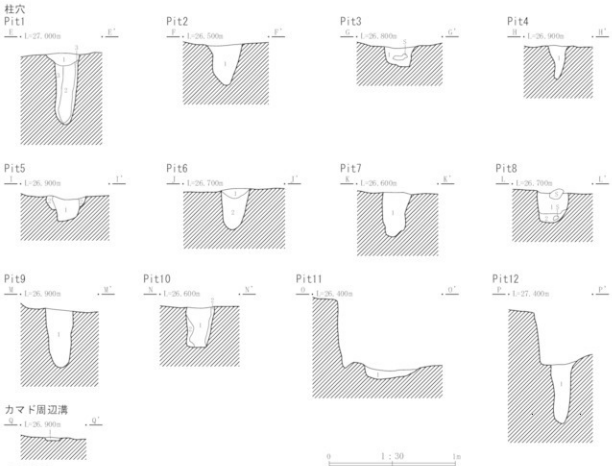
［付属施設］カマドとは別にして、３箇所の燃焼面を炉跡として床面上で確認した。炉１・２は近接しており、北壁付近の西側に位置している。炉１は30 × 20cmの楕円形を呈し、被熱は２cmほど赤褐色に還元している。炉２は33 × 22cmの楕円形を呈し、被熱は３cmほど赤色化しており、両箇所とも被熱は弱い。炉３は斜面下方である南側のほぼ中央に位置し、床面の残存範囲外にある。床面の高さからは５cm程下がり、斜面の土砂崩れの影響から現地性が失われている可能性も考えられるが、位置関係から本遺構に付属するものと推察される。炉３は49 × 44cmの楕円形を呈し、被熱はやや弱く、３cmほど赤褐色に還元している。

カマド燃焼面の周辺には、これを取り囲むように細い溝状の窪みが検出されている。東西走向190cm、南北走向110cm、幅10 ～ 12cm、深さ３cmを測る。



1. 暗褐色シルト（10YR3/4）粘性やや強　しまりやや密　炭化物・焼土粒微量、黄褐色シルトブロック多量含む。
2. 黒褐色シルト（10YR3/2）粘性やや強　しまりやや緩　炭化物・焼土粒微量、黄褐色シルトブロックを少量含む。
3. 黒褐色シルト（10YR2/3）粘性やや強　しまりやや緩　炭化物・焼土少量含む。黄褐色シルトブロック少量含む。
4. 黒褐色シルト（10YR3/2）粘性やや弱　しまりやや密　炭化物・焼土粒少量、黄褐色シルトブロック中量含む。
5. 暗褐色シルト（10YR3/4）粘性やや弱　しまりやや密　炭化物微量、黄褐色シルト多量含む。
6. 黒褐色シルト（10YR2/2）粘性やや強　しまりやや緩　炭化物・焼土粒多量含。
7. 暗褐色シルト（10YR3/3）粘性やや強　しまりやや密　炭化物少量、褐色シルトブロック少量含む。
8. 黒褐色シルト（10YR2/2）粘性やや強　しまりやや密　炭化物微量、褐色シルトブロック少量含む。
9. 黒褐色シルト（10YR3/2）粘性やや強　しまりやや密　褐色シルト微量、炭化物・焼土ブロック少量含む。
10. 黒褐色シルト（10YR3/2）粘性やや強　しまりやや密　褐色シルトブロック微量、炭化物少量、地山ブロック少量含む。
11. 暗褐色シルト（10YR3/4）粘性やや強　しまりやや密　炭化物・焼土粒微量、地山ブロック多量含む。
12. 暗褐色シルト（10YR3/3）粘性やや強　しまりやや密　炭化物・焼土粒微量、褐色シルトブロック微量含む。
13. 暗褐色シルト（10YR3/3）粘性やや強　しまり密　炭化物少量、焼土粒微量、黄褐色シルトブロック多量含む。
14. 暗褐色シルト（10YR3/3）粘性やや弱　しまりやや密　炭化物少量、焼土粒微量、黄褐色シルトブロック中量含む。
15. 暗褐色シルト（10YR2/2）粘性やや強　しまり密　暗褐色焼土（5YR3/6）との混合土。
16. 黒色シルト（10YR1.7/1）粘性やや強　しまり密　炭化物中量、焼土少量、地山ブロック少量含む。
17. 暗褐色シルト（10YR3/3）粘性やや強　しまりやや密　炭化物少量、焼土微量、地山ブロック少量含む。
18. 黒褐色シルト（10YR3/2）粘性やや強　しまりやや緩　地山ブロック少量含む。
19. 褐色シルト（10YR4/6）粘性やや強　しまり密　炭化物微量含む。
20. 暗褐色シルト（10YR3/3）粘性やや強　しまりやや緩　炭化物・焼土粒微量、地山ブロック中量含む。
21. 暗褐色シルト（10YR3/4）粘性やや強　しまりやや緩　炭化物中量、地山ブロック中量含む。
22. 暗褐色シルト（10YR3/4）粘性やや強　しまり密　焼成粗土、地山ブロック多量含む。土器片混じる。
23. 赤褐色焼土（2YR4/8）粘性やや強　しまり密　カマド燃焼面。部分的に明赤褐色（5YR5/6）に変化した箇所がみられる。
24. にぶい赤褐色焼土（5YR4/4）粘性やや強　しまり密　9号竈燃焼。黒褐色シルトブロック含む。
25. 黒褐色シルト（10YR2/2）粘性やや弱　しまりやや密　床下堆土、炭化物微量、暗褐色シルトブロック中量含む。
26. 褐色シルト（10YR4/4）粘性やや弱　しまりやや密　床下堆土、黒色シルトブロック微量含む。
27. 褐色シルト（10YR4/4）粘性やや弱　しまりやや密　5号住居埋土、黒色シルトブロック微量含む。

第66図　3号鍛冶工房跡1



土層注記

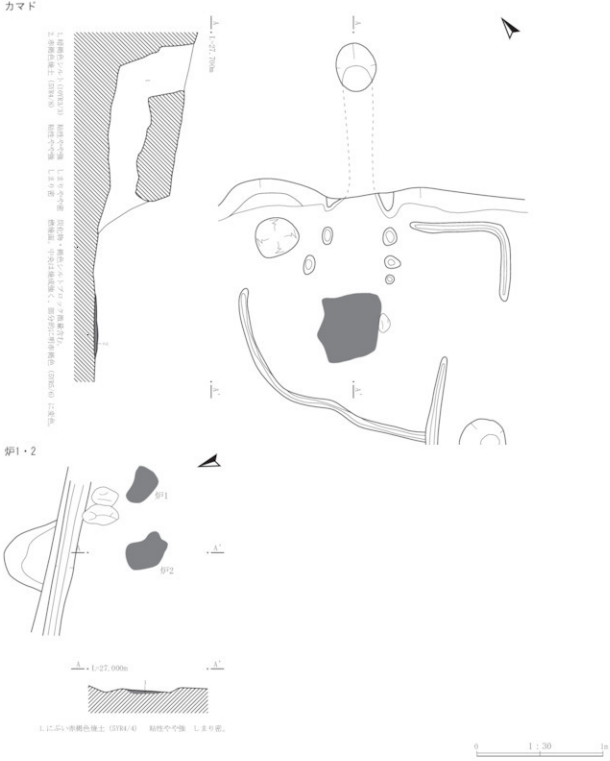
付属施設名	層	土質・色調	粘性	しまり	埋土組成・混入物
Pit1	1	暗褐色シルト（10YR3/3）	やや弱	やや密	柱抜取痕、炭化物微量、黄褐色シルトブロック微量
	2	黒褐色シルト（10YR3/2）	やや弱	やや密	柱痕跡、炭化物微量、黄褐色シルトブロック微量
	3	褐色シルト（10YR4/4）	やや強	やや密	掘方埋土、暗褐色シルト多量
Pit3	1	暗褐色シルト（10YR3/3）	弱	密	炭化物微量、黄褐色シルトブロック多量
Pit4	1	黒褐色シルト（10YR3/2）	弱	密	炭化物中量、焼土粒微量、黄褐色シルトブロック少量
Pit5	1	黒褐色シルト（10YR3/2）	やや強	密	炭化物少量、黄褐色シルトブロック少量
Pit6	1	暗褐色シルト（10YR3/3）	やや弱	密	柱抜取痕か、炭化物少量、焼土粒微量、黄褐色シルトブロック少量
	2	にぶい黄褐色シルト（10YR4/3）	やや弱	密	掘方埋土、炭化物微量、暗褐色シルトブロック多量
Pit7	1	暗褐色シルト（10YR3/3）	弱	密	炭化物焼土粒微量、灰黄褐色シルトブロック微量
	2	黒褐色シルト（10YR3/2）	やや強	やや密	炭化物、焼土粒微量、黄褐色シルトブロック少量
Pit8	1	黒褐色シルト（10YR2/2）	やや弱	やや密	炭化物・焼土粒微量、黄褐色シルトブロック微量
Pit9	1	暗褐色シルト（10YR3/3）	弱	やや密	黄褐色シルトブロック少量
	2	暗褐色シルト（10YR3/3）	やや強	やや密	黄褐色シルト多量
Pit10	1	黒褐色シルト（10YR2/2）	やや強	やや密	黄褐色シルトブロック少量
Pit11	1	黒褐色シルト（10YR3/2）	やや強	やや密	柱抜取痕、黄褐色シルトブロック少量
	2	黒褐色シルト（10YR2/2）	やや強	やや密	掘方埋土、黄褐色シルトブロック多量
Pit12	1	褐色シルト（10YR4/4）	やや密	やや密	炭化物微量
	2	褐色シルト（10YR4/4）1層より明るめ	やや密	やや密	黄褐色シルト中量
Pit13	1	暗褐色シルト（10YR3/3）	やや強	やや密	炭化物中量、焼土粒微量、黄褐色シルトブロック少量、黒褐色シルトブロック中量
カマド周辺溝	1	暗褐色シルト（10YR3/3）	やや弱	密	炭化物中量、黄褐色シルトブロック少量

第67図　3号鍛冶工房跡2

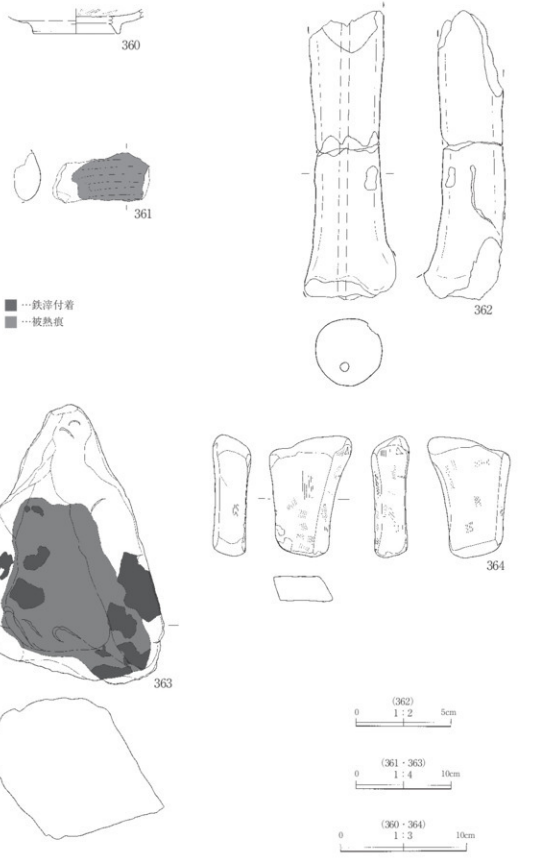
柱穴は13個確認した。壁沿いに位置するもの（P 1・2・12・13）と、床面中央に位置するもの（P 3・5）が主体と考えられる。規模は壁沿いのものが径26～29cm・深さ32～52cm、床面中央のものが径24～30cm・深さ16cmである。（澤目）

［出土遺物］　土器2,392.2ｇ、支脚等の土製品227.3ｇ、石製品2点、鉄滓501.0ｇが出土している。360は土師器高台坏の底部片で埋土下位から出土している。ロクロで整形され、内面にミガキ調整が

施されている。内面の黒色は二次的な被熱で飛んでしまったと考えられる。その他、図版に載せていないが、土師器甕形土器の口縁部でほぼ真直ぐに立ち上がる小破片が埋土から出土している。362はカマドの土製支脚で床面直上から出土している。上半部が欠損している。形態は円柱状で端部がやや開き、径0.6cmの孔が貫通されているものである。孔は端部では中心より1.5cmほどずれている。胴部は径3.5cmと同じタイプでは細い。摩耗が激しく一部しか原表面は残存しないが、外面はナデ調整されている。361は中央カマドの埋土最下層（焼土層）から出土した羽口の胴部片である。363は床



第68図　3号鍛冶工房跡3



第 69 図　3 号鍛冶工房跡出土遺物

面から出土した鉄滓痕、叩打痕をもつ鉄床石である。径 30 × 18cm、厚さ 15cm の底面が傾斜しているので一部埋めて使用していたと考えられる。364 はカマド近くの焼土上面から出土した砥石である。側面 4 面が使用され擦り減って凹面をなしている。鉄滓の分析から、カマド付近の埋土最下位から出土した椀形鍛冶滓は鍛練鍛冶滓である（附編－ 2）ことが判明した。

［時期］出土遺物から平安時代中期で、10 世紀後半に属すると考えられる。（光井）

4 号鍛冶工房跡（第 70 ～ 73 図、写真図版 23・24・48・49・51・52）

［位置・検出状況］調査区中央の緩斜面上、Ⅱ A1i・Ⅱ A1 ～ 2j・Ⅱ B1 ～ 3a グリッドに位置する。V 層上面で検出した。全体的に残存状況は悪く、斜面下方にあたる遺構の西～南側は、斜面の土砂崩れ、ないし近世以降に植林のための削平を受けて消失している。

［他の遺構との重複関係］27 号土坑と重複し、本遺構の方が旧い。

［平面形］隅丸長方形を呈する。

［規模］長軸（368）cm・短軸（928）cm・深さ 27cm

［埋土］8 層からなる。1 ～ 3 層は斜面の土砂崩れによる流れ込みの層と考えられ、褐色シルトを主体とし、全体的に地山シルトブロックの混入が目立つ。4 ～ 8 層が本遺構に伴い、その内 7・8 層は壁溝堆積層に分けられる。暗～黒褐色シルトを主体とし、堆積状況から自然堆積とみられる。

［床面］燃焼面を確認した面を床面とする。風化した岩盤層が現れ出しているためこの面の凹凸は顕著だが、全体として概ね平坦である。

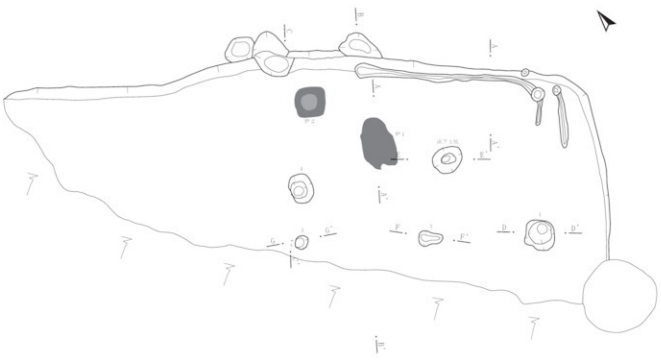
［壁］斜面上方の北壁と、東壁の立ち上がりを検出した。やや外へと広がるが、概ね直立気味に立ち上がる。西壁と南壁は消失している。

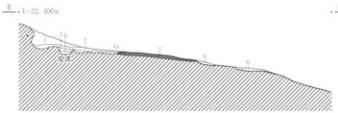
［付属施設］焼土範囲を 2 箇所確認した。炉 1・2 共に被熱は強く、表面の硬化は顕著である。炉 1 は 82 × 53cm の楕円形を呈し、被熱は 8 cm ほど赤褐色に還元している。炉 2 は 51 × 49cm の隅丸方形状を呈し、被熱は中央に 4 cm ほど特に強く受け明赤褐色に還元した部分があり、これを含めて全体で 9 cm ほど赤褐色に還元している。

炉 1・2 の周辺で 2 基の坑を確認した。50 × 40cm の楕円形を呈し、深さ 80cm を測る床下土坑が炉 1 の東側 60cm 離れた場所に位置する。また、47 × 36cm の楕円形を呈し、深さ 10cm を測る Pit 4 が炉 2 の南側 90cm 離れた斜面下方に位置する。これらは柱穴とも考えられたが、掘方がややいびつである上、埋土内から鉄滓・羽口が集中して見つかっており、柱穴とは用途の異なる坑とみられる。

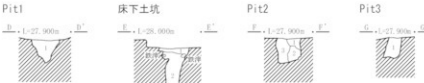
柱穴を 3 個確認した。これらは主柱穴と考えられ、径の規模は不規則ではあるが深さが 34 ～ 36cm である。（澤目）

［出土遺物］土器 385.3 g、羽口等の土製品 3648.8 g、鉄製品 3 点、鉄滓 3227.1 g が出土している。365 は床面から出土した土師器甕形土器で短く外反する口縁部片である。ヨコナデ後外面をヘラケズリ、内面をヘラナデで調整されている。図版に載せていないが、輪積み痕が顕著な胴部片や端部が外に開く底部小破片が埋土下部から出土している。羽口が 9 点出土している。366、371、372 は床面から、369 は炉 2 直上から出土している。366 は先端部、369 は端部、371、372 は胴部片である。367、370、373、374 は埋土から出土している。367 は先端部～胴部、370 は端部～胴部、373・374 は胴部破片である。368 は先端部破片で、炉 3 の埋土下位から出土したものである。378 は焼成された粘土塊である。用途は不明である。375 は床面直上から出土した袋状の鉄斧でほぼ完形である。長さが 17.8cm、幅が 7.3cm、厚さ 4.8cm と大きいものである。受け部は断面がC字状に折り曲げられている。376 は釘と推定されるものである。377 は刀子の柄の部分と推定される鉄製品である。398 は焼成された粘土塊で



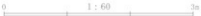


1. 褐色シルト（10YR4/4）　粘性やや強　しまりやや密
　焼化物を多量、地山ブロック少量含む。
2. 黒褐色シルト（10YR2/2）　粘性やや強　しまり密
　地山ブロック多量に含む。
3. 黒褐色シルト（10YR3/1）　粘性やや強　しまりやや疎
　地山ブロック少量含む。
4a. 黒褐色シルト（10YR3/1）　粘性やや強　しまりやや密
　地山ブロック少量含む。
4b. 暗褐色シルト（10YR3/3）　粘性やや強　しまりやや密
　地山ブロックを少量含む。
5. 明赤褐色焼土（5YR5/6）　粘性やや弱　しまりやや密　炉1焼礫崩土層。
6. 暗褐色シルト（10YR3/3）　粘性弱　しまり密
　灰黄褐色シルト多量含む。
7. 黄褐色シルト（10YR5/6）　粘性やや弱　しまり密　明瞭埋土。
　暗褐色シルトを少量含む。
8. 暗褐色シルト（10YR3/3）　粘性やや強　しまりやや疎　明瞭埋土。焼化物粒・地山シルト少量含む。

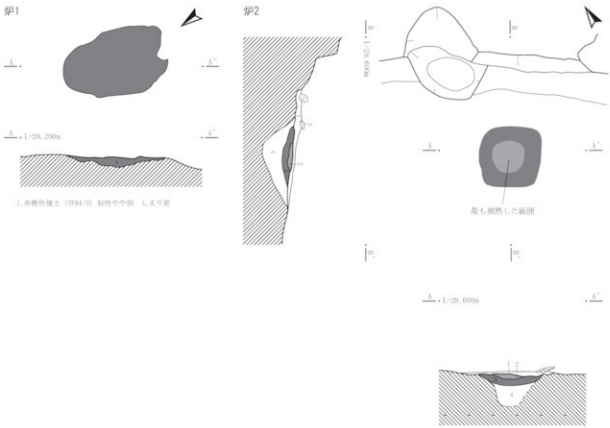


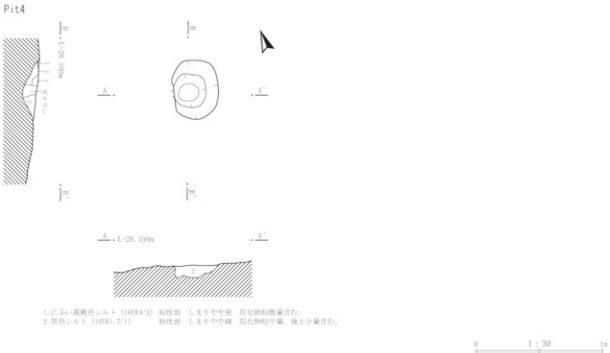
柱穴土層注記

付属遺構名	層	土質・色調	粘性	しまり	埋土種別・混入物
Pit1	1	暗褐色シルト（10YR3/3）	やや弱	やや密	焼化物微量、黄褐色シルトブロック少量
床下土坑	1	暗褐色シルト（10YR3/3）	やや弱	密	焼化物中量、黄褐色シルトブロック少量
	2	暗褐色シルト（10YR3/3）	やや弱	やや密	焼化物中量、黄褐色シルトブロック中量
Pit2	1	灰黄褐色シルト（10YR6/2）	弱	やや疎	暗褐色シルトブロック中量
	2	灰黄褐色シルト（10YR6/2）	弱	やや疎	暗褐色シルトブロック少量
	3	褐色シルト（10YR4/4）	弱	やや疎	灰黄褐色シルトブロック少量
Pit3	1	にぶい黄褐色シルト（10YR4/3）	弱	やや疎	地山ブロック多量（崩落土か）



第70図　4号鍛冶工房跡1

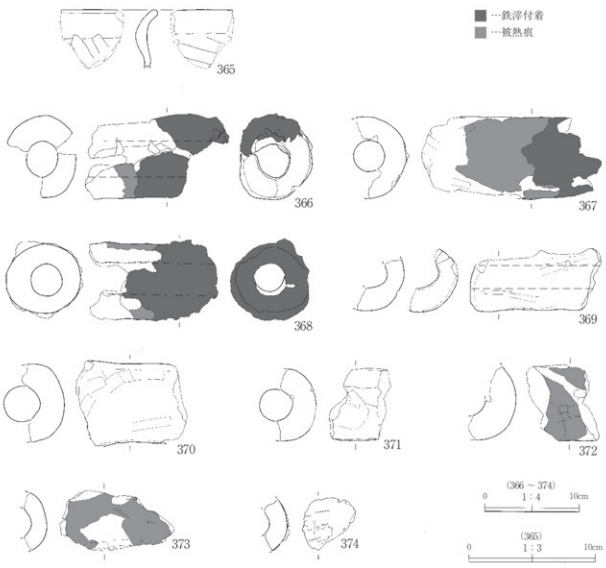




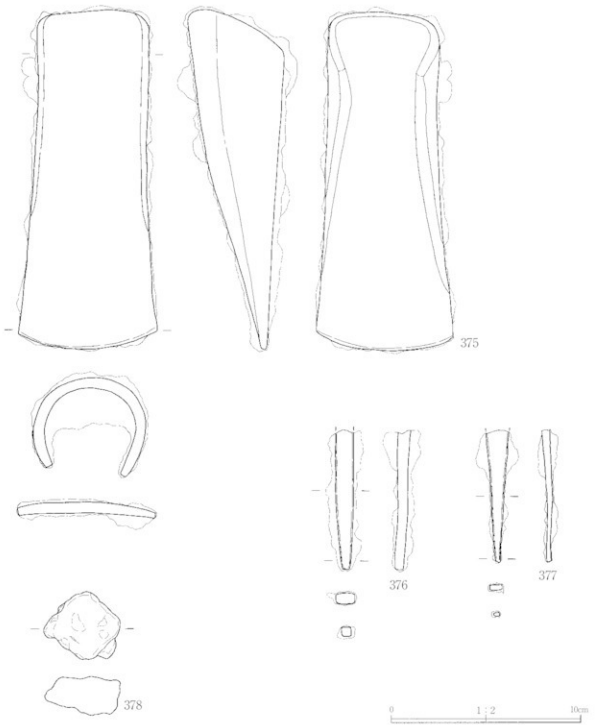
第71図　4号鍛冶工房跡2

工具による刺突を有するものである。鉄滓の分析から、床面・埋土下位・炉内から出土している椀形滓鍛冶滓３点はすべて鍛錬鍛冶滓である。羽口の分析から、耐火度 1,480℃で耐火性の高い性状で高温作業に適していたこと（附編－２）が判明している。

［時期］出土遺物等から、平安時代前期～中期、９世紀後葉から 10 世紀前葉と考えられる。放射性炭素年代測定では、1,170 ± 20yrBP, 暦年較正用年代(1 σ)1,090 ～ 1,056calBP(860 ～ 894calAD)(27.8%)、1,146 ～ 1,108calBP(804 ～ 842calAD)(23.1%)(附編－１)である。（光井）



第 72 図　４号鍛冶工房跡出土遺物１



第 73 図　4 号鍛冶工房跡出土遺物 2

５号鍛冶工房跡（第 74 ～ 76 図、写真図版 25・49）

[位置・検出状況] 調査区南西側、ＩＢ３～６ｃ・ＩＢ３～６ｄグリッドにまたがり位置する。Ⅴ層上面で検出した。残存状況は比較的悪く、遺構の南側は、斜面の崩落により消失している。

[他の遺構との重複関係] なし。

[平面形] 長楕円形を呈する。

[規模] 長軸（495）cm・短軸 980cm・深さ 25cm

[埋土] ６層からなる（１～６層）。暗褐色シルト（１層）を主体とし、炭化物・焼土粒が混じる。北壁際では地山ブロックの混入が目立つ。（２～４層）ので、自然堆積で埋没したと推定する。

[床面] 炉を検出した面を床面とした。Ⅴ層上面に層とし、掘り方は認められない。平坦であるが、細かい凹凸が目立つ。

[壁] 北壁と東西壁の一部のみ残存する。北壁は緩やかに広がりながら立ち上がる。東西両壁は床からの立ち上がり付近のみしか残存せず、大きく広がりながら立ち上がるものと推測する。

[付属施設] 炉３箇所、床下土坑１箇所、柱穴 13 個を確認した。

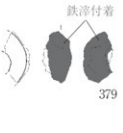
炉は東壁際に１箇所（炉１）、と北壁際に２箇所（炉２・３）である。炉１は 66 × 35cm の瓢箪形を呈し、わずかに壁溝に壊されている。強い被熱により、約２cm、赤褐色に還元する。また炉１は本遺構が埋没途中（壁溝が埋まりきった段階後）に、さらに焼成を受け、橙色に還元し、非常に強く硬化している。位置などの情報から、その用途については推測できない。炉２は歪な楕円形で 50 × 32cm を測り、強い被熱により、床下約２cm が赤褐色に還元している。炉３は北壁際の壁溝によりわずかに壊されている。70 × 10cm の歪な長楕円形で、焼成は強く、床下約２cm まで赤褐色に還元する。どちらも用途は不明である。さらにもう一つ床面の中央よりやや東側で 30 × 10cm の焼土範囲を確認したが、現地性ではなく、炉とは考えられない。

床下土坑は東壁際に位置する。開口部 105 × 95cm、底面 120 × 105cm のフラスコ状を呈し、深さは床面から 55cm を測る。屋内用の貯蔵施設と推測する。

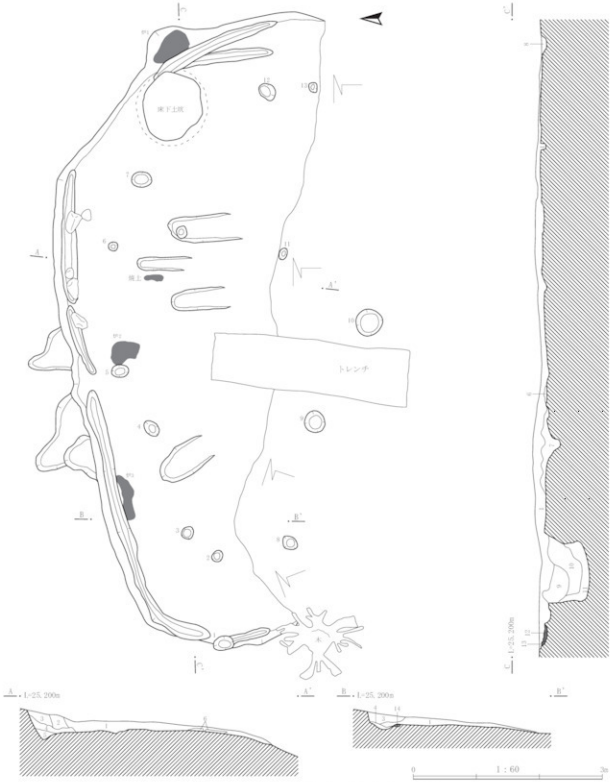
柱穴は残存する床面に 10 個（Pit １～７、11 ～ 13）、床面が消失した南側に３個（Pit ８～ 10）である。Pit ２～７は北壁際に沿っており、主柱穴の可能性もあるが、いずれも規模が小さい。　（須原）

[出土遺物] 土器 291.1 ｇ、羽口等の土製品 38.9 ｇ、鉄滓 431.6 ｇが出土している。図版に載せていないが、埋土下部から土師器鉢形土器の口縁部でほぼ真直ぐに立ち上がる小破片が出土している。底部小破片で端部が外に開くものと開かないものの両方が埋土下部から出土している。379 は埋土下部から出土した羽口先端部の小破片である。鉄滓の分析から、床下土坑から出土した椀形滓は鍛錬鍛冶滓であること（附編－２）が判明した。

[時期] 平安時代中期、10 世紀後半から 11 世紀代に属すると考えられる。放射性炭素年代測定では、980 ± 20yrBP である。暦年較正年代（1 σ）は 932 ～ 906calBP（1018 ～ 1044AD）（43.7%）である。（光井）



第 74 図　５号鍛冶工房跡出土遺物



1. 暗褐色シルト（10YR3/3）　粘性やや弱　しまりやや密　炭化物微量、焼土粒微量、地山ブロック少量含む。
2. にぶい黄褐色シルト（10YR4/3）　粘性やや弱　しまり密　炭化物少量、焼土粒微量、地山ブロック中量含む。
3. 暗褐色シルト（10YR3/3）　粘性強　しまりやや密　炭化物微量、焼土粒微量、地山ブロック中量含む（1層土に類似）。
4. にぶい黄褐色シルト（10YR5/3）　粘性強　しまりやや緩　炭化物微量、地山ブロック少量含む。
5. 黒褐色シルト（10YR3/1）　粘性やや弱　しまりやや緩　炭化物微量、焼土粒微量、地山ブロック少量含む（崩落土）。
6. 明黄褐色（10YR7/6）　粘性やや強　しまりやや密　床面小張れて堆積した、暗褐色シルトブロック中量含む。
7. 灰黄褐色シルト（10YR4/2）　粘性やや強　しまりやや密　炭化物少量、地山ブロック少量含む。
8. にぶい黄褐色シルト（10YR5/4）　粘性弱　しまりやや密　炭化物微量、地山ブロックやや多く含む。
9. にぶい黄褐色シルト（10YR5/3）　粘性やや強　しまり密　床下土坑埋土、炭化物微量、白色粒子少量含む。
10. にぶい黄褐色シルト（10YR5/4）　粘性弱　しまり密　床下土坑埋土、炭化物微量、地山ブロック少量、白色粒子微量含む。
11. 灰黄褐色シルト（10YR5/2）　粘性やや弱　しまりやや緩　床下土坑埋土、炭化物微量、地山ブロック微量、白色粒子微量含む。
12. 橙色強土（7.5YR7/6）　粘性弱　しまり密　9ブ、明瞭な傾斜で赤色に還元し、硬化、被熱激しい。
13. 赤褐色強土（5YR4/6）　粘性やや弱　しまり密　9ブ、明瞭な傾斜で赤色に還元し、硬化、12層よりは被熱弱い。
14. 赤褐色強土（5YR4/6）　粘性やや弱　しまりやや密　9ブ焼壁面、傾斜で赤色に還元し、被熱激しい。

第75図　5号鍛冶工房跡1